

社会学伝来考 : 昭和の社会学(2)

著者	宮永 孝
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	55
号	1
ページ	170-40
発行年	2008-07
URL	http://hdl.handle.net/10114/5160

社会学伝来考

——昭和の社会学「2」

宮 永 孝

第六章 編年史的にみた日本社会学

昭和期（終戦まで）の社会科学文献

閑話 狂躁の昭和期——亡国への道

“社会主義”と“共產主義”の輸入

“山宣”の暗殺

特高による拷問の手口

佐野学の逮捕劇

三木と戸坂の怪死

ファシズム体制と破滅への道

防諜とスパイ事件

共產主義運動の波動

講壇から追放された教授たち

暗黒政治の巨魁（首領）・東条首相

検閲と伏字

落日の大日本帝国

終戦詔書の起草者はだれか

敗戦の原因はなにか

天皇制と民主主義

内容の概略は——第一巻 根本概念の一般的规定 主題 第一章 共同社会の理論 第二章 利益社会の理論 第二巻 本質意志と選択意志
第一章 人間意志の諸形式 第二章 対立の解明 第三章 経験の意味 第三巻 自然法の社会学的基礎 第一章 定義と論旨 第二章 法に於ける自然的なるもの 第三章 結合意志と諸形式 附録 結論及概観——である。

訳者の「序」によると、本書はジンメルの大著『社会学』とともに、形式社会学の古典であるという。一八八七年に刊行されたとき、社会学者をのぞきあまり世間の注目をひくことはなかったが、第一次世界大戦後、ドイツにおいて社会学が異常な勢力をもって勃興するや、同書が存在が知られるようになった。

本書の内容は、五つの観点から考察しようという。第一は形式社会学の主要問題に関するもので、本書の核心部分をかたちづくり、他の考察はその説明もしくは適用である。社会の基本的関係にたいする類型として、同書において「共同社会」「利益社会」といった二つの類型が確立されている。

第二の考察は、このような類型に対応する個人の意識における心的要素を分析し記述したものである。第三の考察は、社会の進化発達に関するものである。著者によると、社会は共同社会から利益社会へむかって発達するものという。

すなわち、社会関係についていえば、了解から契約へ、社会集団に関しては、家村落・民族から大都市国家へ。個人意識に関しては、献身から打算へ。これはスペンサーの「軍事型から産業型へ」といった社会進化の思想とよく似ている。第四の考察は、第三に関連したものであるが、社会哲学的であり、社会思想をふくむものである。第五の考察は、社会関係の根本的二類型を、その経験的現われを中心に、経済・法律・政治などの社会現象において考察し、その解明を進めようとしたものという。

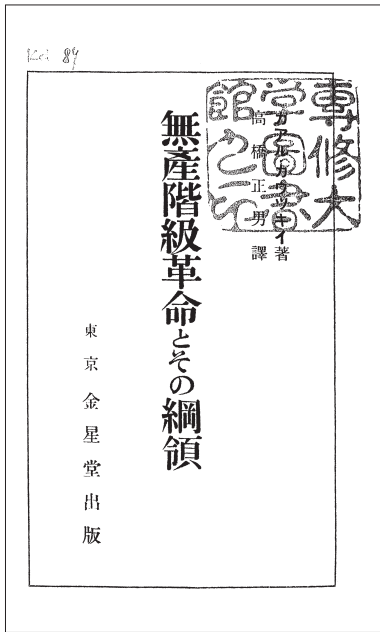
塩田秀介訳『実践論理学の一研究 社会哲学第一原理（合理的善）』（昭和2・10）は、ロンドン大学社会学教授レオナード・トレロウニー・ホブハウス（一八六四～一九二九）の著書 *The Rational Good: A study in the Logic of Practice*, 1921 を反訳したものである。

本書は、人間の行為の意義と目的、社会生活の理想の思索について語り、それらの問題に通ずる根本原理（調和の原理）を明らかにしたものである。

内容の概略は——緒論 第一章 行動の源泉 第二章 衝動と制御 第三章 合理的なることの意義 第四章 善 第五章 合理的善 第六章 実現された善 第七章 適用 第八章 内在仮定——である。

村松正俊訳『西洋哲学物語』（昭和2・10）は、アメリカの教育家兼作家ウィル・デュラント（一八八五～一九八二）の *The story of philosophy. The lives and opinions of the greater philosophers, by Will Durant New York, 1926* を反訳したものである。

著者はマサチューセッツ州ノース・アダムズに生まれ、はじめフランス公教会の尼僧から薫陶をうけ、ついでニュージャージー州のチャーシー



カール・カウツキー著『無産階級革命とその綱領』。〔専修大学附属図書館蔵〕

市のカトリック系のカレッジでヤソ会士から教育をうけた。一九一七年コロンビア大学で哲学博士の学位をえ、以後成人教育に従事した。

原書はアメリカで出版されるや、一年も経たないうちに十萬部以上も売れたというから、当時のベストセラーの一つであった。同書はすべてを網羅した哲学史ではなく、思弁的（理性に訴えて考える）な思想の物語を、ある主要な人格（物）のまわりにあつめることによって、知識に体軀（からだ）をあたえようとしたものだという（ウィル・デュランツ）。

内容の概略は——訳書の序 読者に（原著者の序）序論 第一章 プラトーン 第二章 アリストテレスの希臘の科学 第三章 フランシス・ベーコン 第四章 スピノーザ 第五章 ボルテールと仏蘭西啓蒙 第六章 イマヌエル・カントと獨逸觀念論 第七章 ショーペンハウアー 第八章 ハーバート・スペンサー 第九章 フリードリヒ・ニーチェ 第十章 現代欧州哲学 第十一章 現代亞米利加哲学——である。

本書は、著者がアメリカ人のために書いたものであり、特徴として、物の見方がアメリカ人としての見方になっていることである。訳者の見るところ、原著者はニーチェ主義者もしくはベルグソン主義者ではないかという。当時の日本の哲学界は、ドイツ的な哲学でいまにも窒息しそうになっていた。が、訳者はドイツ色が濃い、わが国の哲学界に明るい仏米流の空氣を吹きこむために訳筆をとったようである。

当時もいまも、われわれは「哲学」といえば、むずかしいものと決めつけがちである。とくにドイツ哲学などは、内容的に難解であることも事実であるが、原語の術語がやさしいのに、訳語がむずかしいため、わざわざ内容をわかりにくくしている、と人はよくいう。ときに専門家が、頭をかかえるほどむずかしいものになっている。

ところが著者は、主なる哲學者の思想を一般大衆にも理解できるように、やさしく通俗的に描こうとした。同書がアメリカ本国でひじょうに受けた理由は、この点にあるようだ。

高橋正男訳『無産階級革命とその綱領』（昭和2・10）は、カルル・ヨハン・カウツキー（一八五四—一九三八、ドイツの社会民主主義者）の『プロレタリア革命及びその綱領』*Die Proletarische Revolution und ihr Programm*, 1922 を反訳したものである。

本書は比較的良好に読まれたようで、一九二五年には英訳本が刊行された。

カウツキーが本書を著わした動機は、プロレタリア階級を向上発展させ、その有機的結合をたかめ、その経済的・政治的見識を増さしめ、さらにその社会的義務や感情をつよめんがためであった。

内容の概略は——原著者および訳者の「序」 A 旧綱領の変更 B 社会主義への過渡綱領 (一) ブルジョア革命 (二) プロレタリア革命

(三) 過渡期の国家 経済革命 (一) 消費者と生産者 (二) 労働生産物の分配 (三) 所有と組織 (四) ブルジョア及びプロレタリア革命

(五) 計画経済 (六) 官僚制度 (七) 私的発言権 (八) 社会化の諸形式 (九) 農業 (十) 貨幣 (十一) 結語——である。

カウツキーによると、われわれマルキシストの使命とは、プロレタリア階級闘争を勝利にみちびくことだという。著者は、本書の(A)部において、ドイツ社会民主党のエルフルトおよびゲオルリッツの二つの綱領を対比し、その主要句節を批判し、(B)部においては、プロレタリア革命の本質と、その将来の綱領をくわしく解明し、さらにロシア革命の実質を批判し、レーニンが自著『国家と革命』その他において、かれに投げつけた非難と罵倒にたいして反駁^{はんぱく}している(「訳者序」)。

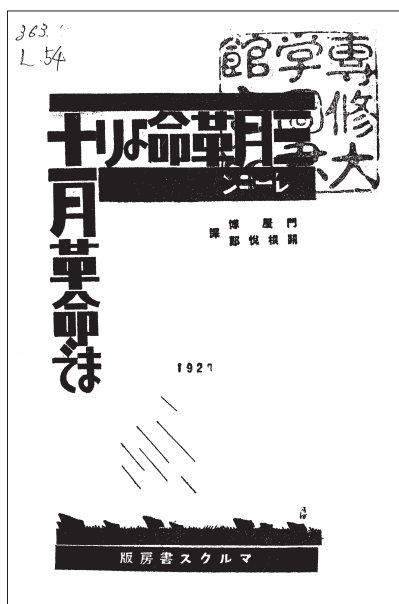
西雅雄^{まさお}(一八九六—一九四四、大正・昭和期の社会主義運動家、のち獄死)と渡部義通の共訳『組織問題』(昭和2・11)は、レーニンの諸論文やかれの他の著書から抜いたものを反訳したものである。

内容の概略は——序 レーニンとボルシェヴィキ党の建設 如何^{いか}なる事情^{もと}の下にボルシェヴィキ党は結成されたか ボルシェヴィキとメンシェヴィキとの分裂 工場細胞の組織——などである。

ロシアの無産者階級が農民と同盟し、有産者や地主との闘争に勝ち、干渉と封鎖、経済の破たん、飢えや寒気にたえながら、経済の復興に着手しえたのは、ボルシェヴィキ党によって指導されたからであるが、ロシア共産党は一朝^{いつぱ}にして成ったのではなく、長い闘争によって発展したのである。その闘争の歴史を、一般の労働者に知らせることを意図したのが、この訳書を刊行した主旨でもあった。

今井三郎の『社会哲学概論』(昭和2・12)は、著者がハーバート大学院に在学^{ちゅう}に執筆したものという。本書は十八章から成っている。内容の概略は——第一章 倫理学と社会哲学 第二章 倫理学と社会哲学の主要問題 第三章 倫理学的及び社会哲学的思索としてのプラトウとソクラテス 第四章 アリストウトルの社会哲学 第五章 ストイシズム、エピキュリアニズム及びネオ・プラトニズムの社会哲学 以下省略——である。

著者によると、旧稿に手を加えて成ったのが本書であるという。第一章から第五章までは、レイトン博士の『社会哲学概論』を参考にし、忽々^{そつそく}



レーニン著『三月革命より十一月革命まで』。
〔専修大学附属図書館蔵〕

に書き加えたものという。第六章以後は、だいたいハイニンリッヒ・ヘルクナア教授の分類にしたがい、社会主義的流派の各代表的なるものをあつめたという（「序」）。

倫理学は人生の福祉、価値ある行為、経験、または善——道德価値の本源などについて研究する学問とすれば、社会哲学は、社会の成員としての個人の道德関係をとりあつかうものという。

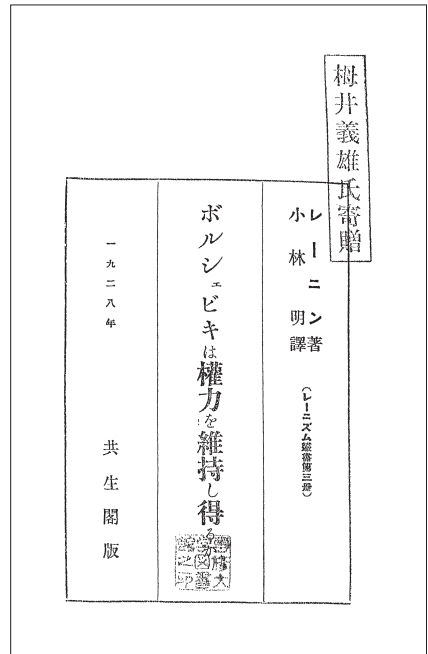
門屋博と関根悦郎の共訳になる『三月革命より十一月革命まで』（昭和2・12）は、一九一七年九月の反革命運動の勃発以後、同年十一月のブルジョア革命にいたるまでのレーニンの著述の英訳書を訳述したものである。英訳書の表題は、『××への路』であるが、検閲官に顧慮して、表題を改めた。

訳者のひとり門屋は、「これが我が国の検閲制度の下にあって、如何にゆがめられたる姿をして世に出ずるかを懸念するものである」と、「訳者序」の中で述べているように、その心配は的中した。結果的には、伏字だらけの本になったからである。

内容の概略は——英訳者序文 訳者序 ロシア社会民主労働中央委員会への手紙 妥協に就いて ××の根本問題 出版の自由に就いて ××の怪物 ××の目的 ボルセビキは××を握らねばならぬ マルクス主義と×× 差し迫る大破綻、如何にしてこれと戦ふか 危期は近づけり ロシア社会民主労働党ペトログラード委員会及モスコ委員会への手紙 「全ての××をソビエトへ」と云ふスローガンについて 国外よりの忠告 同志への手紙——である。

青野季吉（二八九〇～一九六二）は、大正・昭和期の評論家である。早大英文科を卒業後、『種蒔く人』や『文芸前線』の同人として活躍した。同人が訳筆をとったのが『何を為すべきか』（昭和2・12）である。同書はレーニンの筆になるものであり、一九〇二年外国において出版された。同書は、社会民主主義団体の右翼を批評するために書かれたものである。訳者は仏訳本（原題不明）から訳したという（「例言」）。

訳者が同書を訳出したとした理由は、日本の社会運動の陣営にあるひとびとと、それに理解を示そうとする人々に、読んでもらうためであった。



レーニン著『ボルシェビキは権力を維持し得るか』
〔専修大学附属図書館蔵〕

内容の概略は——例言 緒言 第一章 獨断主義と批評の自由 第二章 大衆の自然生長性と社会民主主義の目的意識性 第三章 トレード・ユニオニズムの政治と社会民主主義的政治 第四章 経済主義者の原始主義と××の組織 第五章 全ロシアの為めの政治新聞計画 結論——である。

川内唯彦訳『人民の友とは何ぞや——彼等是如何に社会民主主義者に対して闘ふか——』（昭和2・12）は、ロシア共産党二十五週年にあたり、指導者レーニンの名を記念するために、モスクワで刊行された原本（書名不詳）を全訳したものである。

内容の概略は——訳者序 第一篇 問題の提起 「資本論」の窮極の目的
唯物史観の公式 「資本論」骨組 ミハイロフスキー氏の曲歪（第二篇はすべて削除されたものか？） 第三篇 問題の提起 大生産の家内的制度 バガロッド郡に於ける例 「人民の友」に依る事実の曲歪 附録——である。

本書は、ナロードニキ（「人民の友」）一派によるマルクス主義の曲歪および無理解をあばき、かれらの小ブルジョア性や反動性を摘発したものである。

小林明訳『ボルシェビキは権力を維持し得るか』（昭和3・3）は、レーニンの同名の著書の英訳からの重訳（小冊子）である。訳者が本書の訳出をくだてた理由は、この書が日本の無産者（労働）階級にとって、緊要欠くべからずものを示教すると思ったからである。

訳者の「序」によると、本書には——

プロレタリア××の途上^{（後記による削除）}に於ける最も厳密なる形勢の分析

××に於けるプロレタリアの任務の最も明確なる理論的確立

がなされている、という。

内容の概略は——訳者 序（一）反対論者の議論（二）反対論者の論点——プロレタリアートは他階級から孤立して居るか（三）彼等は民主主義の現勢力から孤立して居るか（四）彼等は技術的に機××関を統制し得るか（五）彼等は此機関を運転し得るか（六）中央集権の問題

について (七) 錯雑せる情勢を前にして権力を維持し得るか (九) 彼等は反対勢力に対抗し得るか 後言(原著者)——である。

本書は、レーニンの邦訳『国家と革命』『インサレクシオン』(三月革命より十一月革命へ)と、不可分の連関をなすという(「訳者序」)。

岡田宗司(一九〇二〜七五)は、昭和期の社会運動家である。東京帝大経済学部を卒業したのち、労農派に加入し活躍するが、昭和十二年(一九三七)人民戦線事件で逮捕された。『資本主義最近の段階としての』『帝国主義』(昭和3・3)は、同人が訳したものであり、レーニンの同名の著書(レーニン研究所版の独訳) *Der Imperialismus als jüngste Etappe des Kapitalismus*, 1926の重訳である。帝国主義は、ふつう一つの民族や国家が、政治的・経済的に他民族や国家を支配し、自国の領土や勢力範囲をひろげようとする運動を意味する。レーニンによると、第一次世界大戦(一九一四年〜一八年)は、両側からしかけられた帝国主義戦争——いい換えると、征服戦争、強盗戦争、掠奪戦争——であった。

すなわち、それは世界を分割しようとするための戦争——植民地、金融資本の“勢力範囲”の分割および新分割のための戦争であった。「帝国主義は、プロレタリアートの社会××の前夜である」という。

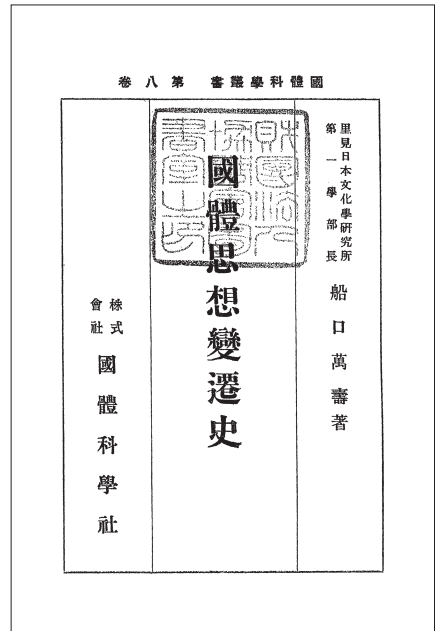
××は伏字となっているが、“社会革命”とでもよめる。

内容の概略は——はしがき ロシア版、フランス版、ドイツ版の序文 最新の資本主義 第一章 生産の集積と独占 第二章 銀行の新しき役割 第三章 金融資本と金融寡頭支配 第四章 資本の輸出 第五章 資本家団体の世界分割 第六章 列強間の世界分割 第七章 資本主義の特殊の段階としての帝国主義 第八章 寄生生活と資本主義の頹廃(たいはい) 第九章 帝国主義の批判 第十章 帝国主義の歴史的地位 附録 バーゼルに於ける社会民主党臨時大会の宣言——である。

レーニンは、ロシア版の序文のなかで述べている。

——世界を支配している強盗が二、三いる、と。その強盗とは、アメリカ・イギリス・××である。(××は日本のことか。——引用者) かれらは“獲物を分配し、その獲物を分配するための仲間同志の戦争に、全世界をひっぱり込んで、と。

船口万壽ふなぐちますの『国体思想変遷史』(昭和3・4)は、国体思想史の骨子をのべようとしたものである。本書は、国体論にかぎらず、国体についての諸思想の概要をとらえようとしたものである。



船口万壽著『国体思想変遷史』。
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

内容の概略は——序記 第一節 国体思想の通念 第二節 本書の取扱ふ問題 第三節 時代の区分 第一篇 太古期 第一章 概説 第二章 神話にあらはれたる太古期 第三章 史話にあらはれたる太古期 第四章 三種神器 第二篇 上世期 第三篇 中世期 第四篇 近世期 第五篇 現世期 結語——である。

本書の内容に分け入るまえに明らかにしとかねばならぬ点は、“国体”とはなにか、ということである。この語義に関しては、これまで何度かふれる機会があった。が、いまいちどふれておこう。

国体とは、平たくいえば、“万世一系の皇室を戴くこと”の意である。そして“国体思想”とは、一種の祖国愛的感情を中心として形づくられた、日本についての諸思想である、という（「序記」）。

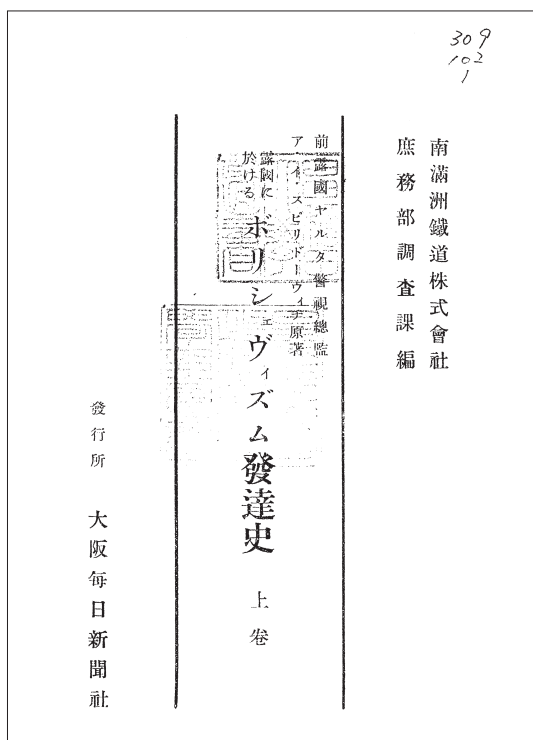
里見岸雄（一八九七〜一九七四、昭和期の国家主義者）といえは、美濃部達吉の天皇機関説を攻撃したことで知られているが、同人の研究（国体学説の批判的新研究稿本）によると、この“国体”という語が、近代的な意味で用いられるようになったのは、徳川初中期のことであつたらしい。近世的用例として、栗山潜鋒（一六七一〜一七〇六、江戸中期の儒学者、のち水戸の彰考館総裁）の「保建大記」に、

国体ヲ遐邇（遠いと近いと）ニ示ス所以ニ非ザル也
大典ヲ闕キ団体ヲ損ズルコト焉ヨリ大ナルハ莫シ

の文があるというが、どうもこれこそ文献にあらわれた最初のものらしい。

本書刊行の意図を、はっきりと捉えることはむずかしいが、里見岸雄の創唱なる“国体科学”を鼓吹するためであつたのであろう。

南満州鉄道株式会社の庶務部調査課が編んだ『露国にボリシエヴィズム発達史 上・下巻』（昭和3・3〜4）は、小山猛男がじっさいの訳者であるようだ。この訳書は、発禁あつかいになったようで、早大本には（極秘）の印がおされている。



ア・イ・スピリドローウィチ『露国に於けるボルシェヒスヴィズム発展史 上巻』。〔早稲田大学中央図書館蔵〕

「例言」によると、本書は一九二二年パリにおいて発行されたア・イ・スピリドローウィチ將軍原著（ロシア語）の『露国に於けるボリスエヴィズムの歴史、発生より政権奪取まで、一八八三年～一九〇三年～一九一七年』を訳出し、上下二巻本としたものである。著者は、帝政時代において国家保安部や宮廷親衛隊の重要な地位をしめ、革命運動とふかいかわりをもった人物である。

上巻は第十二章までであり、下巻は第十九章までと附録（第一号～第十一号まで）から成っている。本書はボルシェヴィキの誕生からその権力掌握までのすべての過程を、弾圧する側から見た生の研究であるところに大きな特徴がある。

たとえば、政権を把握した権力者は、だれでも抹殺したい、うしろめたさをもっているのがふつうだが、著者はそのような点を容赦なくあばきだてる。レーニンやトロツキーの売国奴的な革命戦術、ボルシェヴィキの巨頭マリノフスキーが保安部のスパイであったこと、ボリスエヴィキが、組織的かつ不屈なものであったかを遺憾なく暴露している。

本庄栄治郎（一八八八～一九七三）は、大正・昭和期の経済史学者である。同人の『近世封建社会の研究』（昭和3・4）は、昭和二年（一九二七）夏——四日市の夏期大学において、徳川時代の社会、経済上の変化、封建社会崩壊の事情について語ったものや、諸雑誌に発表した論文に手をくわえ、増補改稿したものである（「序」）。

内容の概略は——第一章 政治社会状態 第二章 経済の発達
第三章 財政の窮乏 第四章 武士生活の困難 第五章 農村の疲弊 第六章 都市及び町人の発展 第七章 人口問題 第八章 社会階級の変化 第九章 封建社会の崩壊 附録——である。

われわれはよく「封建的」とか「封建制度」といったことばを使うが、そのことばの意味を真に理解することなしに使っているばかりが多い。前者は、専制的、因襲的、閉鎖的であることや、個人の権利をかるんじられることを意味し、後者は君主などから与えられた土地がもたなって主従関係が成っている社会上の制度の意である。

著者によると、徳川時代の政治や社会の組織は、まさに封建制度のそれなのである。それは上下の主従関係と封土関係から成っている。とくに封建制度が生まれた背景的理由として考えられるものは、社会の安定をもとめようとする要求から生れ出たものである。

鎌倉以来、日本社会は武士階級のみにとどまらず、一般社会も封建的な考えに染まり、雇う者と雇われる者との関係、いくなれば主人と召使との関係——臣従の関係ができた。

赤坂静世訳『輿論と群集』（昭和3・4）は、ガブリエル・タルドが著わした集団心理学（または社会心理学）の断片であるが、原著者によると、各研究はそれぞれ緊密な関係を持ち、統一されているという。

内容の概略は——一 公衆と群集 二 輿論と会話 三 群集と犯罪団——である。

タルドは“公衆”（public）と“群集”（foule）とを区別している。タルドによると、公衆と群集とを混同してはならないという。公衆は、抽象的ななしかもきわめて現実的な集団である。公衆は、劇場の公衆、集会の公衆といった使い方をする。それに対応することは、ギリシャ語にもラテン語にも見当たらないという。これに対して、群集とは、人間のあらゆる種類の集団を表わしている。群集とは、一種の動物性をあらわし、心理的伝染のあつまり——他の大多数のひとびとと共に一つの観念や意志を抱いているという意識をもつ、ひとびとの集りのことである。

福本和夫の『唯物史観のために』（昭和3・4）は、先に刊行した小著『社会の構成Ⅱ並に変革の過程』『唯物史観と中間派史観』に二つの小論をくわえ、一書をつくったものという（「序言」）。しかも、収録したものはすべて、唯物史観のために戦ひたる闘争の記録だという。

内容の概略は——第一篇 一 唯物史観 二 無産者運動の台頭と唯物史観の発生 三 唯物史観の構成過程 四 階級及び階級闘争論 五 我々はいま如何にして戦闘的唯物論を戦ひとり得るか 第二篇 唯物史観（社会の構成Ⅱ並に変革の過程） 第三篇 一 我が国における唯物史観の発展 二 高田博士の「第三史観」を批判す 三 河上博士の「唯物史観と因果関係」を批判す 四 河上博士の最近の発展 五 河上博士の唯物史観より分離せざるべからず——である。

“唯物史観”とはなにか。辞引の定義によれば、それはマルクス・エンゲルスが創始し、レーニンによって発展させられた社会観・歴史観のことである。社会の進化、歴史の展開の原動力を、物質的、とくに経済的生活関係のなかに求める立場をいう。

著者の説く“唯物史観”とは、——歴史のいわゆる唯物弁証法的把握のことであり、科学的社会主義ならびにその運動の核心をなすところの歴史観である。

吉山道三訳『背教者カウツキー』（昭和3・4）は、レーニンの『プロレタリア××と背教者カウツキー』を全訳したものである。翻訳の底本は、一九一七年に刊行された独訳とのことである。したがって本書は、重訳である。

カルル・ヨハン・カウツキー（一八五四～一九三八）は、ドイツの社会民主主義者であるが、レーニンやルクセンブルクの革命派と決定的に対立し、超帝国主義論をとるに及んでマルクス主義と断絶したことで知られている。

内容の概略は——訳序 序言 第一章 如何にカウツキーはマルクスを平凡な自由主義者にしてしまったか 第二章 ブルジョア民主主義とプロレタリア民主主義 第三章 搾取者と被搾取者との間に平等があり得るか 第四章 ソビエトは××組織となつてはならぬ 第五章 憲法議会とソビエト共和国 第六章 ソビエト憲法 第七章 国際主義とは何ぞや 第八章 経済的分析のマンツを被ったブルジョアジーへの阿諛附録——である。

レーニンは本書においてカウツキーの背教主義（背教者の詭弁）、無節操、日和見主義にたいするたいこもちの根性を検討し、口ではマルクス主義をとえ、行動においては日和見主義に屈従する矛盾に満ちたカウツキーを、公然と“背教者”と呼んでいる。

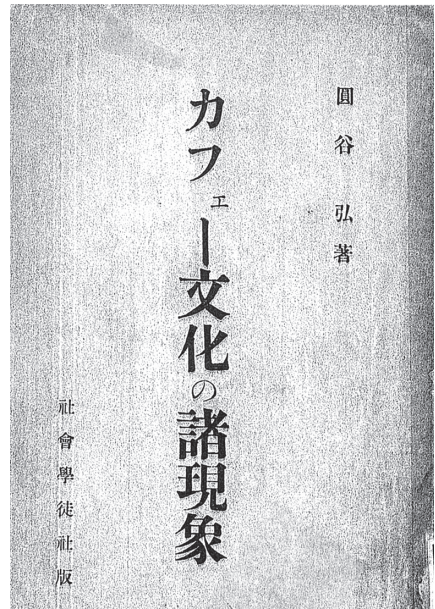
『大思想エンサイクロペディア 13 社会学』（昭和3・5）は、つぎのような内容から成っている。

社会の本質……………長谷川如是閑 社会学概論……………加田哲二 仏蘭西社会学……………赤坂静也 英米社会学……………松本潤一郎 独逸社会学……………五十嵐信 社会心理学……………綿貫哲雄 社会意識……………綿貫哲雄 家族……………戸田貞三 社会学者研究。

フランスの社会学を分担執筆した赤坂静也によると、この国の社会学は、観念論と機制論を同時にそなえ、デカルトの純理主義の特長をあらわしているという。また社会学はコントによって命名され、確立されるまえに、すでに政治学・倫理学・経済学のうちにその萌芽があるといど培われていた。もちろんこれらの学問は、こんにちのような特殊科学ではなく、社会についての一般科学であった。

コントの学説（実証哲学）は、まず英米に伝わり、ついでヨーロッパに流布した。かれは観念論（精神界を世界の本源的存在とかんがえ、外界は仮象の世界にすぎないとする考え方）を展開したのであるが、その実証哲学をうけ継いだのはエミール・リトレ（一八〇一～一八八一）であり、イギリスではジョン・ステュアート・ミル（一八〇六～七三）であり、後者は師から通信教育によってその教えをうけた。ミルは民族心理学や社会心理学に傾いていた。

原実訳『共同社会・結社・国家』（昭和3・5）は、アメリカの社会学者ロバート・モリソン・マツキーヴァー（一八八二～一九七〇）、トロン



円谷弘著『カフェー文化の諸現象』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

ト大学をへてコロンビア大学教授、多元的国家論を説いた）の論著を反訳したものである。

内容の概略は——第一章 社会の本質 第二章 社会の段階 第三章 社会と環境 第四章 利害と結社 第五章 社会の構造 第六章 社会の進化 第七章 社会進化の大法則——である。

“社会”とはなにか。社会とはふつう人があつまって生活を営むところの意である。マツキーヴァーによると、生命のある所にならず社会がある、という。生命は社会において生まれ、その中で育つ。社会はわれわれの内と外に存在する。アリストテレスは、人間のことを“社会的動物”と定義した。

最初の社会とは、家族社会であり、性の生物的相互依存のうえに存する。社会は、相似性・相互依存・協同・経済などを意味する。社会は人間の活動領域、人格の乗物（人格を存続せしめる手段）、青春の乳母であるという（第一章 社会の本質）。

米田庄太郎の門下生・円谷弘（二八八八―一九四九）は、日本大学法文学部社会学科の中興の祖ともいえるすぐれた社会学者である。同人は『カフェー文化の諸現象』（昭和3・6）といった、なかなかユニークなエッセイ集を刊行した。かれは昭和初期の日本社会の縮図を“カフェ”（キャバレーの前身、女給のサービスのついた酒場ふうの飲食店）のなかに発見した。

著者は、過去数年のあいだ「動乱渦中の社会を凝視し」、ときどき筆のむくまま、想の走るまま、画家がキャンバスに絵の具をぬるように描いたのが本書である。それはまた著者のおりおりの断章でもあった。

著者の視線は、つねに社会そのものの注がれ、しかも凝視の対象は、社会のさまざまな相であった。

著者によると、日本のカフェの現相は、まったく世界にその類例をみない、日本独自の文化相の表象だという。外国にも“カフェ”というものがあるが、そこでは女給のサービスはなく、単に紅茶やコーヒーを飲みながら、ゆったりとくつろぐ所である。が、日本の当時のカフェは、現代資本主義の産物であり、日本独自の文化相を有していた。

カフェが発生し、はやったのは、一つには値段が安かったこと、二つには多分に男にとっての慰安所であったこと、三つには性欲のはけ口的な

ところであったことによる。おまけに結婚難の時代であったから、男はそこに何らかの慰藉^{いしや}をもとめて出かけた。

内容の概略は——吉原文化よりカフェー文化へ モダンガールと外人のもつれ ニセ刑事相の批判 南京の社会劇 象牙の塔より見たる街頭の悲喜劇——である。

河野密^{みつ}（一八九七—一九八一）は、大正・昭和期の社会運動家である。大正十五年（一九二六）日本労働党に参加し、戦後社会党の結成にくわわった人である。『功利主義論 全』（昭和3・7）は、同人の訳書である。本書は、イギリスの著名な哲学者、経済学者のジョン・スチュアート・ミル（一八〇六—七三）が著わした *Utilitarianism*（功利主義）を反訳したものである。初版は一八六三年に刊行されているが、よく読まれた書物であり、訳書はロンドン版（第十四版）を底本としたという。

タイトルの“功利主義”とはなにか。それは幸福と利益をもって、人生のおもな目的とする倫理思想のことである。

内容の概略は——第一章 概論 第二章 功利主義とは何ぞや 第三章 功利主義の究竟^{きやうきやう}（つまるところ）の制裁に就いて 第四章 功利主義は如何なる証明を許すか 第五章 正義と功利との関係に就いて——である。

ジェレミイ・ベンサム（一七四八—一八三二、イギリスの哲学者・法学者）は、功利主義を提唱したことで知られ、その哲学の中心は、人間は本来快楽をもとめる傾向を有し、苦痛をさける功利的存在とした。

ミルの功利主義の基礎をなしているのは、このベンサムの思想であった。かれは生涯の前半生において、個人主義者であり、後半生は社会主義者であった。ミルには空想的社会改良家的な側面があり、不幸の源である疾病や貧困は、科学や社会の知恵によってなくすことができると考えた。

永井享の『日本国体論』（昭和3・8）は、日本の国体^{こくたい}（当時は、天皇統治の觀念を中心とした国のあり方の意）を社会哲学的、社会学的に研究したものである。従来の国体論は、政治や法律の見地から、あるいは道徳または倫理の見地から、あるいは宗教または信仰上の立場から、神秘的に説いたものが多かった。が、著者の取りくみ方は、日本の国体を史的事実や社会事業や心理現象として、社会科学的に考察したものであった。

内容の概略は——第一章 緒論 第二章 一体としての社会、社会としての国家 第三章 国体、政体及主権 第四章 社会、国家及国体 第五章 日本の国体及国体論（上）（中）（下）——である。

著者のみるところ、日本の国体は、世界無比のものなのである。日本は建国以来、万世一系の皇統をいただき、いまだかつて中断されず、ましてや変革されたこともないのである。しかも古今を通じて、日本の国体は一貫した史的事実であり、一貫した民族心理なのである。日本の国体は、

時代が変わっても、日本民族と一体をなしている。

社会の組織は時代とともに変わると同時に、時代の社会思想も移りゆく。著者が今回、国体論を試みた理由は、切なる時代の要求があったからである。わが国の共産党結社が、いちどならず国体を変革しようとしたからである。著者によると、日本の国体は理想の国体だという。それは君民一体の国体なのである。

同じく永井享の『日本民族論』（昭和3・8）は、社会科学なしは社会政策上から見た民族論であるという。従来、日本の民族について論じる者は、歴史・政治・経済史・心理学・倫理学・植民政策・社会学・社会心理などの立場から考究するのがふつうであった。

著者によると、日本の民族史は、同時に日本の社会史であり、また日本の文化史であるという。だから日本民族を歴史的に、社会的に、文化的に、心理的に研究すれば、日本民族の実体があきらかになるのである。

また日本民族は、日本の国体の母胎であり、またその産物だという。だから日本民族を論じることは、日本の国体について論じることの前提なのである。

内容の概略は——第一章 緒論 第二章 日本の民族及国民 第三章 日本の民族社会及国民国家 第四章 日本の民族性及国民性 第五章 結論——である。

著者によると、日本人が一国の民族、あるいは独立の一国民として意識したのは明治維新後のことである。いまの日本人は錯覚や謬想にとらわれ、“立憲制度”をみては“封建制”のそれのごとく考えている。また日本人は久しきにわたって、時代の支配者に服従し、外国の文化を模倣し、みずから支配し、またみずから建設することを知らなかった。

著者の見るところ、日本ほど民族的統一が完全におこなわれた国はないという。それは最高族長である天皇が、民族的結合または統一の中心となったからである（「第一章 結論」）。

正木康訳『マルクス主義と修正主義』（昭和3・8）は、プリボーイ出版所が編纂した「レーニン叢書」三十巻ちゅうの第六巻——『マルクス及びマルクス主義について』を訳出したものという。本書はマルクス主義からのブルジョアの退却者、修正主義、反プロレタリア的立場に立つ日和見主義・無政府主義・改良主義・経済主義・小ブルジョア民主主義、メンシェヴィズムなどにたいするレーニンの明快な駁撃（ばくげき攻撃）と論断から成る（「訳者の序」）。

内容の概略は——マルクス主義と修正主義 カール・マルクスの学説の歴史的運命 マルクス主義と経済主義・改良主義・国家主義・小ブルジョア民主主義・ボルシェヴィズム・メンシェヴィズム 日和見主義者によるマルクス主義の歪曲 国際自由主義はマルクスを斯う評価する——である。

波田野^{かなえ}鼎（一八九六—一九七六）は、昭和期の経済学者・政治家である。満鉄調査部をへて同志社大教授、九州帝大教授を歴任した。同人の著述が『社会思想史概説』（昭和3・9）である。本書は、西欧文化史上にあらわれた重要な社会思想——ギリシャ・ローマの時代から中世をへて、近世の十九世紀末あたりまで取り扱っている。叙述方法として、通俗的な解説を旨としたという。代表的な思想家をえらび、かれら自身を語らせることに努めた、と述べている。

内容の概略は——序 第一章 序説 第二章 プラト^{キリスト}の社会思想 第三章 原始基督教の社会思想とその実践 第四章 中世の修道院的社会思想 第五章 中世の革命的社會思想 第六章 トマス・モアのユートピアと十七世紀のユトピスト 第七章 十八世紀の社会思想 第八章 十九世紀初頭の三大思想家 第九章 二月革命時代のフランス社会思想 第十章 十九世紀後半の社会思想——である。

西洋文化の発展をたどると、それぞれの時代との関連において、さまざまな社会思想が生滅起伏している。人間社会のルーツを、原始人類の社会にまでさかのぼると、原始人の社会は、“共同社会”であった。かれらは日々運命をともにして生きていた。いっしょに狩猟をし、共同の住居でくらし、共同の土地をもっていた。が、“生産”（商品生産）の発達とともに共產社会は変化せざるをえなかった。

生産物を交換することから商業が発達し、やがてそこから私有財産制度が誕生した。その結果、私有財をもつ生産者と無産者の二つの階級が生まれ、両者はさいげんなく対立するようになった。やがて富者と貧者は、果てしなく闘争をつづけるのだが、特権をもたぬ貧者の民衆は、かつての“共同社会”を願望し、かつその成立とその獲得につとめようとする。すべての社会思想は、この共同社会の実現を画した意識的表現であるという。

土田^{きよとん}杏村の『社会哲学原論』（昭和3・9）は、社会における文化的諸系統の交渉をとりあつかい、理想主義化された社会主義の教説について論述したものである（「序論」）。

本書は五八〇頁もある大著であり、二十二章からなる。内容の概略は——序論 第一章 現代社会の生活 第二章 世界改造の大勢 第三章 世界秩序変化の原因 第四章 現今社会人の人生観 第五章 理想主義とマルキシズム 第六章 文化生活と人格権 第七章 社会の理想的形態

水 平 道

栗 須 七 郎 著

栗須七郎著『水平道』。

第八章 政治機関の根本形態 第九章 経済制度の根本形態 第十章 国家の本質 以下省略——である。

著者によると、“社会哲学”とは、社会思想の科学であるという。社会哲学のしごとは、社会理想を批評することである。社会哲学は、社会理想（社会改造）の人類社会における実現の見地をはなれることができない、という。社会哲学の中心問題は、社会改造そのものである。

著者は、社会主義はデモクラシー（民主主義）への一叛逆であるといっている。さらにデモクラシーとは、人による他人の政略（策略）をゆるさないものであり、各人は本質的な人格の光輝によって評価されるものという。「人間は

自治し、自律する（じぶんの規範にしたがい、じぶんでやって行く）」のが著者のデモクラシーであり、人格自律の社会表現が、デモクラシーの具象結体であるという。

栗須七郎（一八八二—一九五〇）は、別名を“水平の行者”と呼ばれた。かれは大正から昭和にかけて水平運動（被差別部落の解放運動）の指導者として活躍した。水平社の創立に参加したのち、全国を行脚して差別撤廃を訴えた。『水平道』（昭和3・9）は、かれがパンフレットや諸雑誌に発表した記事を編んで一書としたものである。

著者は「水平道の序」のなかで、「本書は、私の水平運動に於ける、過去一切の総勘定であり、同時に又、今後に於ける踏み出しの足場であります」と語っている。

内容の概略は——水平道の序 第一篇 水平運動の精神 一 水平運動とは 二 エタの先祖（賤民の由来） 三 徳川時代の穢多 四 明治の新民（大正の特殊民） 五 私の身の上ばなし 第二篇 水平社綱領宣言釈義 第三篇 融和促進批評 第四篇 雑文 水平道の跋——である。

当時、全国には約三百万人ほどの新民（特殊民）がいたという。かれらは何百年ものあいだ、侮蔑と虐待と差別のなかで生きてきたのである。かつてのロシアの農奴がそうであったように、泣く泣くじぶんの運命にあきらめて従ってきたのである。しかし、近来、特殊民あつかい、畜生あ

つかいされることに目をさました者が現われ、人間的なあつかいを求めて団結するようになり、

「水平社」

という組合をつくったのである。

“水平”とは、この世の中とか、この社会を“水の面”のように平にしようという意味である。

それは人間の高下のない、貴賤の別のない、すべての人間が対等にまじわることができる、自由平等な、幸福な社会を建設しようとする意味であった。そしてこのような趣意にもとずく、かれらの運動が“水平運動”である。

日本列島に住んでいた原始日本人の世界は、無階級社会（共同体社会）であった。そこでは、ひとはみな平等であり、貴賤や貧富の別はなかった。それは“水平の社会”であった。が、やがて人間のあいだや部落間に食物や土地をめぐる、争いが生じ、武力に訴えるようになると、人殺しはじまり、勝者は敗者を奴隷にし、牛馬のようにこき使った。身分差別のはじまりである。

このような奴隷（賤民）が部落民の先祖であった。その賤民の中にもいろいろ階級があり、獣を殺し、その肉や皮をあつかう仕事に従事したのは、賤民ちゅうの賤民であった。徳川時代になると、賤民はふつうの百姓よりも下の身分とかんがえられ、あたかも“畜生”の扱いをうけた。

須山賢一訳『現代政治思潮』（昭和3・10）は、ヘルマン・ヘラー（一八九一―一九三三、ドイツの政治学者、ベルリン大学教授、のちナチズムに抗し亡命）が著わした *Die politischen Ideekreise der Gegenwart, Breslau, 1926* を反訳したものである。本書は現代ドイツの政治思潮を取りあつかうが、政治思想史のすべてにわたるものでないという（訳者後記）。

内容の概略は——第一章 緒論 第二章 吾が国の政治的思想形態の共通的基础 第三章 君主々義思想 第四章 民主々義思想 第五章 自由主義思想 第六章 社会主義思想——である。

著者のいう“政治思想”とは、政治的歴史のじっさいの経過を、あとから離隔し（はなしへだてる）、觀念化することによってのみ得られる思索図を意味し、それは同時に“客観的国家構成原則”をも意味するものである。

隈崎渡訳『家族の起源』（昭和3・10）は、イタリア国立文理科大学の実験心理学教授・アール・ピー・ジエメリーの著書を反訳したものである。本書は現代文明人の先祖である未開人の家族について、科学的に研究したものである。内容の概略は——第一章 家族の起源の問題 第二章 方法の問題 第三章 家族の起源についての進化論的教義 第四章 進化論的方法の批判 歴史学派 第五章 モルガンの血族説の批判こ

のあと十七章（結論）までであるが省略する——である。

われわれは原始人そのものや、かれらの風俗習慣についてあまり多くを知ってはいない。著者によると、初期の人間は、人間というよりも動物（猿類）にちかい存在であったと考えられ、言語や器具を使うようになったのは、はるか後代のことである。ともあれ原始人は、小さな集団をつくって生活したのは、生活上の必要や危険から身を守るためであった。

こういった蕃族（ばんぞく未開人）の日常の根本的しごとは、食物と女性をさがすことであった。そして時の経過とともに、あたかも種の保存の本能を満たすかのように、一夫一婦性の家族が現れるようになる。著者は「原始家族」の起源について論じるにあたり、その一夫一婦の特質、夫婦関係、子どもの地位、かれらが受忍した退行（化）などについてふれている。

牧野信之助の『武家時代社会の研究』（昭和3・11）は、中世から近世にわたる時期の、日本経済史および当時の日本社会について考究したものである。著者は京大で国史学をまなび、学窓を出てからは、北国諸県の県史を編纂するしごと——地方史の研鑽に従った。本務とはべつに学会誌などに発表した論文を修補し、あるいは新たに稿をおこしたものを集めて一書としたのが、本書である。

内容の概略は——第一編 法制経済史上の諸問題 第二編 土地制度及聚落（むらざとむらざと）問題 第三編 時勢及社会相 第四編 教界名僧——である。

著者によると、平安末期に発生したわが国の封建制度が完成したのは、江戸時代であった。ヨーロッパ諸国の生成とくらべると、発達の経路・組織・制度がよく似ているという。新勢力の主人（樹立者）は、その地位を守るために、あらゆる手段と方法を講じたのであるが、それにいちばん役立ったのは、「土地恩給制」と「けにんせい家人制」であった。

河野重弘と永田広志の共訳になる『哲学とマルクス主義』（昭和4・2）は、アー・デボーリン（不詳）が、一九〇六年から一九〇八年の間に、『ノイエ・ツァイト』に発表したものの、残余のすべては雑誌『マルクス主義の旗の下に』に掲げたものという。内容の概略は——跋文 個人主義の哲学とブルジョア社会 マンデギルの倫理学とカントの『社会主義』について ヨーロッパの滅亡か帝国主義の勝利か？ 軽率な批評家 修正主義の最後の言葉 ゲオルグ・ルカッチと彼のマルクス主義批評 ジャン・メリエ 革命と文化 ジュリアン・オツフレ・ラメトリー ドルバツク ラツサールの弁証法 マルクスとヘーゲル——である。

本書は三つの部分から成るといふ。第一部は、哲学批判もしくは論争的性質をもつ論文。第二部は、唯物論史に関する論文。第三部はマルクス

とヘーゲルの相互関係を明らかにしようとしたものであるが、終結していないという（跋文）。

民族学者の柳田国男（一八七五～一九六二）は、貴院書記官長をさいごに大正八年（一九一九）退官し、翌年朝日新聞社の客員、ついで論説委員となるのだが、『都市と農村』（昭和4・3）は、朝日常識講座の第六巻にあたる。同書は、都市と対極の立場にある農村の問題について論じたものである。著者は、本書において「日本の都市が、もと農村の従兄弟^{いとこ}によって、作られたことを力説した」とのべている（「自序」）。

内容の概略は——第一章 都市成長と農民 第二章 農村衰微の実相 第三章 文化の中央集権 第四章 町風田舎風 第五章 農村離村の歴史 第六章 水呑百姓の増加 第七章 小作問題の前途 第八章 指導せられざる組合心 第九章 自治教育の欠陥と其補充 第十章 予言よりも計画——である。

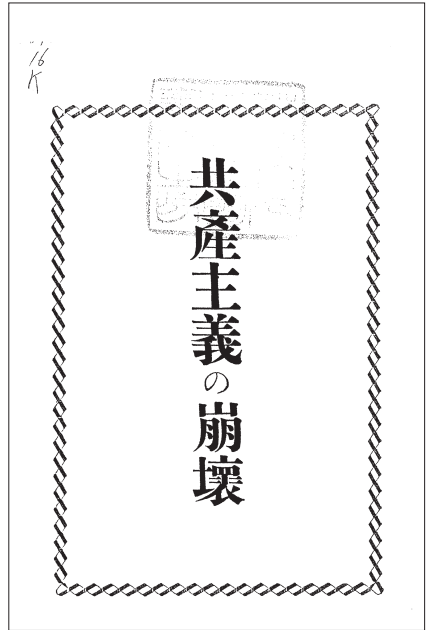
日本は昔ながらの農業国である。そこで暮らす人間は、都市（町）の住人と村民である。都市の住民はその利益を守るために、村落と抗争することもあった。都市と農村の将来あるべき関係について論じたのが、本書でもある。

三木清の『社会科学の予備概念』（昭和4・3）は、雑誌『新興科学の旗のもとに』に発表した諸論文に、若干の旧稿をくわえて一書としたものである。内容の概略は——問^との構造 解釈学的現象学の基礎概念 科学批判の課題 理論・歴史・政策 有機体説と弁証法 唯物論とその現実形態——である。

著者は、本書において分析かつ研究された諸概念が、社会的・歴史的諸科学の研究を志すものに何らかの“予備”として役立つことを望んだ。そしてこれまでの認識論の諸概念が、諸科学の構成と性質の哲学的解明にたいして無力であったこと、非生産的であったことを痛感した結果、それらを改造し、新たな能力をあたえたり、あるいは生産的な諸概念を置きかえようと企てたという（「序」）。

『社会思想全集 第十六巻』（昭和4・4）は、ベネデット・クロオチエの「史的唯物論とマルクス派経済学」（西宮藤朝訳）、エンリコ・フェリ一の「社会主義と近世科学」（浅野研真訳）、アントニオ・ラブリオラの「社会主義と哲学」（浅野研真訳）など、三篇の反訳を収録している。底本には仏訳を用いたようであり、したがって重訳である。

昭和期の教育運動家・仏教学者として知られる浅野研真^{けんしん}（一八九八～一九三九）は、アントニオ・ラブリオラ（一八四三～一九〇四、ローマ大学の哲学教授をつとめた）の「社会主義と哲学」を訳出しているが、これは書簡体形式の論文である。友人ソレルに宛てて出した一連の書簡から成っている。ラブリオラはマルクスを研究することによって、唯物史観の方法論を把握し、そこから社会現象を批判した。ラブリオラは、イタリ



宮本桂仙著『共産主義の崩壊』。



宮本桂仙

アを代表する社会思想家である。

宮本桂仙の『共産主義の崩壊』（昭和4・5）は、共産主義の恐るべき理由を事実によって解明し、かつ世に警鐘を打ち鳴そうとしたものである。著者によると、わが国は特殊な“国体”を有しているにもかかわらず、世界のさまざまな思想が容赦なく侵入し、ことに社会主義的無産政党が議会にその代表を送る、という画期的現象を呈している。日本の思想界は、いまや混乱状態に陥っているという。

内容の概略は——第一章 序論 第二章 社会主義と共産主義 第三章 共産主義の理論 第四章 共産主義の事実的崩壊 第五章 新経済政策 第六章 共産主義の理論的崩壊 第七章 結論——である。

“共産主義”とはなにか。著者の観るところ、それはユートピア社会主義の思想のなかに包含された主義だという。そしてマルクス主義（科学的社会主義）と共産主義とは一体同心だという。この二つの主義は、根本的には違っているが、よく混同される。共産主義と社会主義の異同点は——前者は原則的に生活に必要なものを除き、すべて共有し、いっさい“私有”をみとめないが、後者はじぶんで働いてえた収入の私有をみとめている。

著者によると、日本の労働者のなかには、マルクス主義理論に興味をもつ者がしだいにふえてきているという。また労働運動の指導者は、ドイツ労働者の心理状態に似ているという。著者から見れば、マルクス主義は、“えたいの知れない怪物”なのである。

共産主義というのは、これまで世界中で迫害と侮蔑をうけてきたユダヤ人が、呪詛（のろい）的復しゅう心をもって世界を“赤化”し、革命をおこそうとする政治的野望にはかならないのである。かりに数カ国を共産化しても、国民はその首領の暴虐専制にたえられず、ふたたび革命的運動をおこし、共産主義と対峙するであろう、とのべている。

日本は世界に誇るべき国体を有している。もし国民のなかに共産主義に共鳴するものがあれば、それはみずから火中に身を投じ、苦しもうとする馬鹿か狂人だという。

永井享の『日本思想論』（昭和4・6）は、明治時代に統一された国家思想（国体論）が、いま勃興しつつある社会思想との衝突を叙し、社会思想を批判したものである。

思想問題とは、新旧思想の衝突、内外思想の衝突である。それはわれわれの生活と密着しており、生活問題をはなれて思想問題はないのである。著者いわく。日本の社会思想は、明治時代の“国家思想”のもとに圧迫され、威圧され、国民精神のもとに抑圧されている、と。

船口万壽の『国体倫理学』（昭和4・6）は、国体倫理学（国体科学）という科学の一分科について論じたものである。倫理学とは、ふつう道徳の原理を研究する学問——人間の行為や社会関係を支配する道徳について究める行為を指している。著者によると、倫理学者は社会にたいしてその禄に価するような貢献をしていないという。かれらは寛大なる社会で食わせてもらってきた。「学ぶや禄はその中にあり」といった原則に従ってのことである。

こういった社会に寄食する“居候”は、その他の学問分野にもいっばいいる。研究といいながら、何んら社会にとつてためにならぬことをやりながら、天狗になり、ひとりで悦に入っている。本来、学術の研究は、実生活上の必要や疑問からおこなうべきなのに、そこから離れた頭の中だけの観念のあそびとしておこなっている。

現今の倫理学の大勢とはなにか。倫理学はいままで何をしてきたのか。著者が唱える“国体倫理学”とは、国体を第一義として、そこから演繹する御用哲学としての倫理学や空虚空論とは異なった科学的倫理学を説きしめたものである。

内容の概略は——第一篇 方法論 第一章 客観的興味の学より体験的必要の学へ 第二章 哲学としての倫理学より科学としての倫理学へ 第二篇 現代に於ける倫理生活の矛盾 第三篇 矛盾の打開 附録 科学的国体主義運動の方向——である。

ともあれ、著者が説く国体倫理学は、御用哲学的な日本思想を鼓吹したのではなく、まったく独自の方法論をもった科学であった。



来原慶助著『赤禍』。
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

来原慶助の『赤禍 共産主義真相』（昭和4・6）は、立憲民政党の思想善導調査会の委嘱をうけて執筆したものである。当時、この調査会の委員長であったのは衆議院議員・田中善立であったが、同人はまたロシアを唾棄（だき）していた。同人によると、世界に害をなす悪思想は、ロシアの共産思想だという。そしてロシア共産主義の偏（よ）（悪い例）をつくっているものは、マルクス主義なのである。マルクス主義をじっさい応用しているレーニンの労働国ロシアは、いかに矛盾に満ち、いかに横暴惨虐をきわめているか、目をおおわざるをえないという。

シア”の真のすがたをパノラマ的に描写したものである。

内容の概略は—— 一 世界社会の鳥瞰的觀察 二 現時の露西亜^{ロシア} 三 労働露西亜の世界的赤化手段 四 赤露の社会真相 五 赤露の女 六 赤露の牢獄 七 赤露の軍隊 八 非宗教国の宗教熱 九 赤露の暗影 十 言論界の極端なる抑圧 十一 赤露新聞の批評 十二 赤露の諷刺文学 十三、十四 レーニン（上・下） 十五 ボルシヴィツキ共産主義に関する1・A・Bの忌憚なき批判 十六 支那を救ふの途^{みち} 十七 日本の踏むべき道——である。

本書は発売二ヵ月目にして、五版もの売れゆきを示すほど、よく読まれた。

一九一七年（大正六年）——レーニンはマルクスの共産主義を土台にして、本国において革命を断行し、のち政府ができると、世界の共産化を終生の目的とした。ソビエトは、莫大な費用を使って第三インターナショナルといった国際組織のほかに、各種の国際団体をつくり、世界赤化につとめたことはよく知られている。が、そのような国家的な政治活動とは別にロシア内部をすこし垣間見てみよう。

ロシアの女性についてすこしふれてみよう。レーニンはロシア女性の庇護者^{バトロン}であったという。法律をもって彼女たちを保護したからである。労働ロシアは、著者の見るところ、“女の天国”である。一九二五年末のロシアの人口統計によると、人口一億三千万人ちゅう、男が四割六分とすると、女子は五割四分で、男性よりも数が多かった。

ロシアにおいては、女性も男性と同等であったから、女性といえども、ほとんどあらゆる分野の職業に従った——いっばんの官営会社・クラブ・銀行・工場・商店の事務員から、汽車や電車の転てつ手、托児所、孤児院の職員、看護婦・医師・女子裁判官などにおよんだ。

結婚や離婚はひじょうに容易であり、性的に放らつた生活をするものも少なく、女子の飲酒・墮胎・自殺の増加率にいちじるしいものがあつた。清水静文の『人口問題の研究』（昭和4・6）は、人口や食糧問題の原因と施策について論じたものである。とくに日本は土地がせまい上に、資源にとぼしく、人口も多い。人口の増加は列強ちゅう最高位をしめ、食糧の輸入も年ごとにふえている。大震災の惨禍をうけ、金融恐慌の辛酸をなめ、さらに社会の各方面の動揺に乗じて危険思想がひろまってきたという。

政治や経済、外交、社会に関する諸問題の根底には、人口問題があるという。

内容の概略は——第一編 概論 第二編と第三編 人口変動の地理的原因と社会的原因 第四編 人口の変動 第五編 人口に対する思想と政策 第六編 我国の進路——である。

生活問題を取りあげたばあい、日本の生活費は外国とくらべて案外たかいのである。これはいまでも変わらない。東京人の主食である米の価格は、同じ^{すめ}耕目において、ロンドン人の主食である小麦の値段より高いという。牛肉や砂糖にしても、およそ二倍もたかいという。東京市の米屋は、一家一五〇戸について一軒、菓子屋は七〇戸について一軒の割合になっている、ということである。

いまこれをすべて廃止して、“市場組織”に改めると、かなり食費の節約になるのである。衣食住は生活上の大問題であり、改良すべき点は多々ある。が、当時がいまでも、祝賀や冠婚葬祭において、虚礼・虚儀はひじょうに多いのである。たとえば、嫁入りのとき、はやりすたりがある着物を山ほどもってゆくことや、交際の広いことを世間に宣伝するように派出な葬式をおこなうこと、盆暮れの贈物をしたり、暑中見舞や年賀状を出したりすることがそれである。

日本の人口の増加は、国勢調査によると、

大正十四年（一九二五）	……	八七万余人
昭和元年（一九二六）	……	約九四万人
昭和二年（一九二七）	……	約八五万人

である。

日本国民のおよそ半数は、農業にしたがい、その割合は商業や工業に従事している者の数よりも多い。

人口過剰の結果、なにが起ったかといえ、下層社会において生活難から死者がふえたり、栄養不足から嬰兒（あかんぼう）の死亡率が増加したことがある。

呉文炳（くれぶん）の『江戸社会史』（昭和4・6）は、近世を代表する江戸時代の社会組織とそこに生きるひとびとの生活、世の中のありさま、経済組織や法律制度、文芸など、社会の万般にわたって叙述した書物である。

内容の概略は——序論・本論・概論 社会組織 一般世態論 幕府の経済政策と貨幣制度 外国貿易 都市・村落の特殊機関 社会問題 江戸幕府の刑事政策 此時代の学芸——である。

著者は「社会組織」の項目のなかで、江戸時代の農民のくらしについて言及しているが、その声を聞いてみよう。

江戸時代わが国には、“土農工商”という封建社会を形づくる階級があったことはよく知られている。農民は理論上から武士のつぎに位する身分であったが、じっさいは職人や商人よりも社会的地位がひくかった。農民は人格的尊敬を払われず、じっさいには人間の生命をつなぐ上に必要である“食糧の生産者”にすぎなかった。

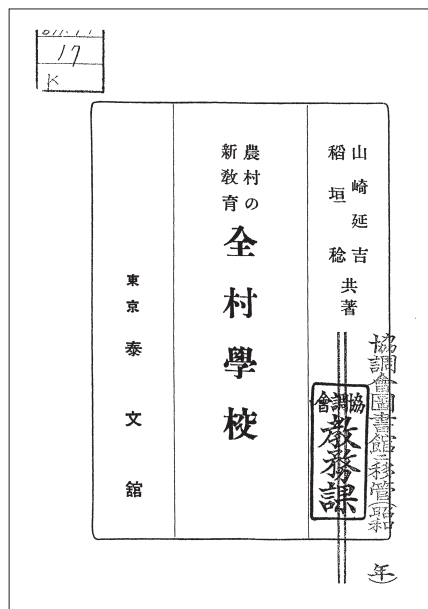
百姓はつねに武士によっていびられ、そのくらしはさんたんたるものであった。江戸時代に階級の犠牲になったものは幾多が筆頭とすれば、百姓がそのつぎに位した。農民は“貢米”（年貢）に苦しみ、ときに非道な領主や代官にくるしめられた。こういった搾取者に不法行為があっても泣寝りするしかなく、かれらに対してはなんら正当な理由や権利をのべることはできなかった。

百姓には哀訴はゆるされていても、領主や将軍にたいする越訴（おそ）（直訴）は厳禁されていた。酷遇に耐えられず、万策つきた百姓がとった最終的な手段は、“一揆”であった。

山崎延吉（のぶよし）（一八七三—一九五四）は、明治から昭和期にかけての農業教育家、農政家である。同人は稲垣稔と『農村の新教育 全村学校』（昭和4・9）を著わしたが、本書はあたらしい農村教育を提唱したものである。



国旗掲揚に立ちあう生徒と教員



山崎延吉 共著『農村の新教育 全村学校』。
稲垣稔
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

山崎は“我農生”^{われのうせい}といった雅号^{がごう}を用い、各地の農学校、農林学校の校長や農事講習所長などをつとめるかたわら、農民教育や農村振興につくしたことで知られている。

“全村学校”とは、かれが創設した学校のことである。この学校の主たる教育目標は、農村の分担を自覚して、農村の本来のつとめに万全^{ばんぜん}をつくす農村をつつることであつた。要は農村に役立つひとをつくるのが目的であつた。

著者いわく。わが農村の現状は、いうに忍びず、語るに忍びず、と。農村はどこでも疲弊している、と。あるところでは“亡村”の状態を呈し、またあるところでは自暴自棄の状態に陥っている。どこも経済的にめぐまれず、社会的にもみとめられていない。資産階級や知識階級は、都会にしごとを求めため、農村は資本と人材が欠乏し、生気をみるこがない。

農村で殖えているものといえば、子どもだけである。農村の教育に努力しているのは、各府縣の農事試験所や農事講習所であるが、こんにち形骸をとどめていだけだという。そこで浮上したのは、農村の新教育と農村振興をめざす、“全村学校”である。

内容の概略は——第一章 序論 第二章 農村教育の目的 第三章 講演に就て 第四章 講習に就て 第五章 全村学校講習 第六章 講習の準備 第八章 閉講式を終りて 第九章 結論——である。

太田亮の『日本上代社会組織の研究』^{に於ける}（昭和4・10）は、著者が大正六年（一九一七）五月に発表した「日本古代氏族制度」を基礎とし、その後の古代制度に関する論文を加えてなった書物である。

本書は、どちらかといえば、“氏族”の研究もしくは“姓名職官考”とよべそうな内容である。内容の概略は——第一編 緒論 はしがき 第一章 古史に顕はれたる人名の調査 第二章 社会組織の時代的概観 第一節・第二節 氏姓の原始時代 (一) 第三節 氏姓発生時代 第二編 部 第一章 部の起源 第二章 部の種類 第三章 職業部 第三編 氏 第一章 氏の意義 第二章 氏の起源 第三章 氏の種類 第四編 カバネ (“姓”^{かばね} 上代における、氏族の尊卑をあらわす階級的称号——引用者は) 第一章 姓とは何ぞ 第二章 原始のカバネ——である。

著者によると、太古には“氏”^{うぢ}というものはなかったという。しかし、人名に居住地、従事する職業を冠する風習は、はやくからあったらしい。そういった地名とか職業名を冠して呼ぶ習慣が氏の起源という。後世、支配層は実名をよばず、地名をもって□□^{うぢ}というようになったという。

瀧川政次郎 (一八九七—一九九二) は、昭和期を代表する法制史学者である。戦前戦後に九州帝国大学、満州建国大学、國学院などで教鞭をとった。極東国際軍事裁判では元海相・嶋田繁太郎の弁護人をつとめた。

瀧川の『日本社会史』(昭和4・10) は、昭和三年 (一九二八) 四月、大村書店から刊行された「日本文化講座」に掲載した同人の『日本社会史』を補正したものという(「序」)。

本書は、日本における社会階級の発達変遷についてのべたものという。

こんにち“社会史”^{うぢ}という、いっぽんに国家社会の歴史と解され、社会学者のなかには、社会史を社会全体の歴史として理解しているものもある。“社会史”について、学者は各人各様の定義をくだしているが、著者の考えでは、社会史とは、各時代における社会組織と社会意識の発達とその変遷を説くべきものである。社会組織の研究は、いきおい社会階級の研究にならざるをえないという。

内容の概略は——総説 社会史とは何ぞや 第一編 上古 第一章 総説 第二章 氏姓階級 第三章 公民階級 第四章 部民階級 第五章 奴隸階級 第二編 中古 第三編 中世 第四編 近世 第一章から第六章まで 総説 武士階級 農民階級 町人階級 教化階級 賤民階級 第五編 最近世——である。

石井秀雄の『日本社会階級史』(昭和4・10) は、前掲瀧川の著書の姉妹編のようなものである。本書は社会生活における人間の階級的存在が、わが国の社会生活全体にたいする関係を歴史的に検討し、かつ解明する目的をもって執筆したものという(「序」)。内容の概略は——緒論 第一節 社会階級に就て 第二節 マルクシスト流社会階級論の吟味 第三節 吾等の出発点(帝国主義的資本支配の時代) 第一章 現代 第一節

現代社会の展望 第二節 現代社会に於ける階級的分層 第三節 社会諸階級の利害関係 第四節 現代社会に於ける支配被支配の関係 第五節 現代社会諸階級の[※]起源的追求 第二章 近代（資本主義制度確立時代）

第三章 近世（封建的身分社会） 第四章 中世（武断的群雄割拠時代） 第五章 中古（莊園経済社会） 第六章 上古（不徹底模倣的郡縣制度社会） 第七章 上古前期（民族的長老支配の社会） 第八章 太古（神話伝説に表はれたる族長統制社会） 結論——である。

“階級”とは、ふつう地位や身分などの等級（くらい）を意味する。またマルクスやエンゲルスにしたがえば、階級とは「社会的地位のさまざまな階級」（『共産党宣言』第一章 プルジョアとプロレタリア）である。

そしてマルクス流に言えば、“階級”とは支配する者の集団と、支配される者の集団の概括的区別の名称でもある。

支配する者とは……………（古代ギリシャやローマにおいては）貴族・騎士・自由民であり、（中世においては）封建領主・家臣・ギルドの親方である。（近世においては）王侯貴族・僧侶・資本家・地主である。

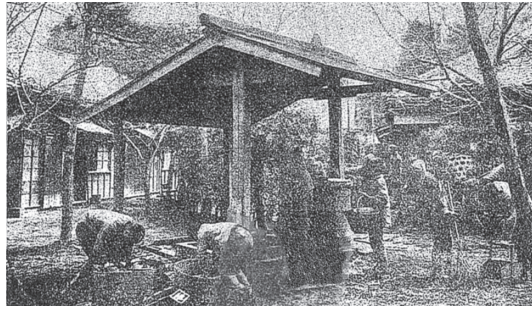
支配される者とは……………（古代ギリシャやローマにおいては）奴隸・平民、（中世においては）ギルド組合員、職人・徒弟・農奴、（近世においては）平民・労働者・農夫などである。

もともと人間がくらす原始社会は、土地共有にもとづく共産主義の形態をとっていたが、やがてそれがくずれ、支配権力の発生をみるようになると、身分（社会のなかで身を置く地位）というものの発達をみた。身分は支配層と被支配層との関係において、階級闘争をひきおこし、のちに革命を惹起する源となった。

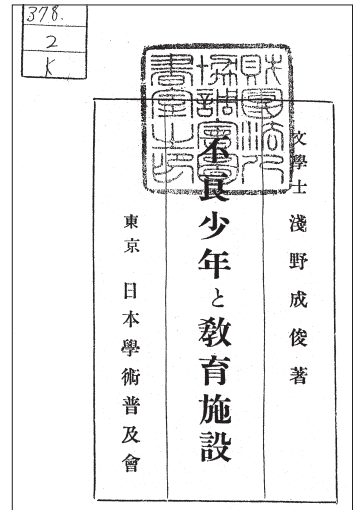
近藤宗男訳『^{基督教の発生と}古代無産階級』（昭和4・11）は、カール・カウツキーの『キリスト教の起源』*Der Ursprung des Christentums*を反訳したものである。従来、原始キリスト教の本質に関する研究は、神学および宗教史の専門家によってあまりなされることはなかった。著者によると、無産者の階級闘争とのかわりから、この種の問題に関心が芽ばえたいらしい。著者は本書において、キリストそのものについてならたしかないことがいえないこと、キリストに言及しなくても、キリスト教について説明しうることを、原始キリスト教の共産主義について叙述している。

内容の概略は——緒言 原著者序文 第一篇 イエスの人物 第二篇 ローマ帝政治下の社会 第三篇 ユダヤ民族 第四篇 基督教の発端——である。

浅野成俊の『不良少年と教育施設』（昭和4・11）は、当時の社会問題のひとつとされる不良少年の保護と矯正について論じたものである。そ



武蔵野学院家族寮を撮ったもの



浅野成俊著『不良少年と教育施設』。
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

のころの世間の三大問題といえは、

思想問題（マルキシズム）

労働問題

不良少年の問題

であった。“不良”とは、品行のよくないことの意である。が、非行に走る少年少女の多くは、労働階級の子弟に多いという。

中にはマルクス主義の中毒にかかっているものや無政府主義、共産主義を唱えるものもいて、日々その数はふえているという。人間の心は、本来、善であり、けがれのないもののなのに、いつの間にかひとの心は邪悪なものになり、悪事をおこなうにいたる。

内容の概略は——緒論 内篇 不良少年の感化 第一章から第三章まで、感化教育の意義、価値、可能性 第四章から第六章まで 不良少年の生理及精神状態、道徳的意識 (一) 第七章 感化教育の原理、第八章から第九章まで 不良少年の特性に対する矯正法、その類別及其矯正法 第十章 感化教育の主義 第十一章 感化院 第十二章 国立感化院の任務 第十三章 晩近感化教育思潮と少年審判所 第十四章 少年審判所の教育的処遇 第十五章 少年保護司 第十六章 矯正院——である。

著者によると、“不良”というのは、かならずしも少年少女にかぎったことではないのである。世間には、不良児童・不良青年・不良壮年・不良老年もあるという。社会が不良性を帯びるにつれて、少年の不良犯罪がふえてきた。

現代人の病根は、個人主義的、快楽主義的根性に墮落し、社会や国家に奉仕する精神に欠けていることである。盛り場へ行けば、ひとは半弓や

玉つきをやったり、登楼したり、カフェに入ったりして、あそびや酒や淫蕩にふけり、利那的快楽をもとめようとする。これが当時の現実の世相であった。

本来、青少年は無垢であるのだが、社会や家庭のわるい影響をうけて不良性をおびてゆくのである。

立山隆章の『日本共産党検挙秘史』（昭和4・11）は、日本に根をはっている共産主義思想とその運動の実体を正確に認識し、批判しようと試みたものである。著者のねらいは、非合法の共産主義思想の“秘密運動”を、合法健全な運動に転化させることであった。

ジャーナリストの著者は、党員検挙の裏面に活躍した経験を有していた。同人によると、“赤化”した人間の九割以上は、二十歳から三十歳にかけての青年子女であったという。

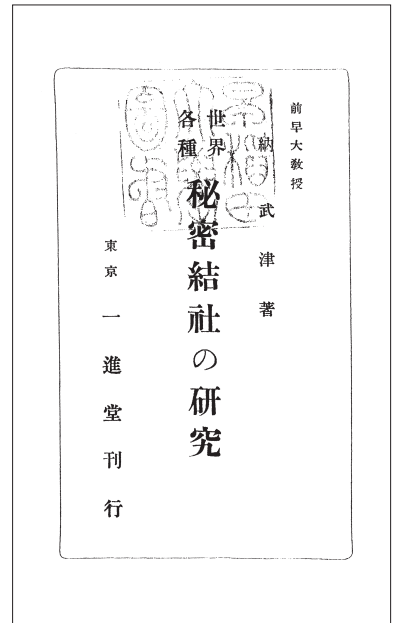
内容の概略は——前篇 一 社会主義運動の胚胎時代 二から四まで 社会主義運動の発展時代、苦惱期、分裂期 五 共産ロシアの出現と其の影響 六 日本共産党の生まれるまで 七 第一次日本共産党の成立と組織 八 第一次日本共産党々則 九 日本共産党大会 十 第一次日本共産党の検挙 余録（共産党挿話） 日本共産党の醜内紛 第二次日本共産党の大検挙 巨頭捕物帳 日本共産党員入露の経路 露国に於ける日本党員の生活 婦人党員の群 共産党リーダーの列伝——である。

わが国の社会主義運動のなかに、いつごろから“共産主義”の要素が取り入れられたものか、その詮索はなかなかむずかしい。共産主義思想が本格的に芽生えたのは、一九一七年（大正六年）にロシア革命おこり、ロマノフ王朝が崩壊してからのことか。“社会主義”とは、ふつう生産手段を社会の共有としたり、資本主義を否定したり、階級対立のない社会の建設につとめる思想や運動のことをいう。

一方、共産主義は、まず財産の共有をめざすものである。生産手段の社会の共有とする点や階級対立のない社会を目指すところは、社会主義とおなじである。この主義は、搾取のない社会、平等な社会の建設を目的としている。したがって、両者の区別はなかなか容易ではない。

こういった社会主義や共産主義的な思想をもつ政治結社をわが国ではじめて旗揚げしたのは、樽井藤吉（一八五〇～一九二二、明治期の社会運動家）である。かれは明治十五年（一八八二）五月——雲仙岳のふもと、島原町で没落農民数百名をきゅうこうして、「東洋社会党」を結成し、第一回目の大会をひらいた。

その綱領は、——



納武津著『世界各種秘密結社の研究』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

第一条……我党は道德を以て言行の規準とする。

第二条……我等は平等を主義とす。

第三条……我等は社会公衆の最大福利を以て目的とす。

といったものであった。この結社は、官憲によって一ヵ月で解散を命じられ、樽井は投獄された。

かれはマルクスの人とその思想を識らなかったであろうが、その名は日本においてはじめて社会運動を実践した人物として、銘記されねばならない。

早大教授・納武津が著わした『世界各種秘密結社の研究』（昭和4・11）は、世

界の各地方において結成された“陰謀団”もしくは“秘密結社”の特色・性質・所業について紹介したものである。著者が秘密結社の内幕をあばいたのは、その根絶を期せんがためであった。人間が住む社会は泰平ではないのである。政治的圧制や経済的圧迫や搾取があったり、宗教的の迫害、民族間の闘争があったりし、われわれは安楽な生活をいとなめない。

秘かなたくらみことや秘密結社が生まれるのは、不平不満、怨恨、無念を晴さんがためである。著者によると、ロシアの共産主義もイタリアのファシズムも、社会の裏にまわって企てたばかりごとだという。

内容の概略は——第一編 神秘的秘密結社 第一章 上代の秘密結社 第二編 民主主義的 secret 結社 第三編 民族主義的 secret 結社 第四編 犯罪的秘密結社 第五編 破壊的 secret 結社 第一章 無政府主義者団 第二章 虚無主義者団 第三章 共産主義者団 第六編 反革命主義的 secret 結社——ファシスト団——である。

著者いわく。秘密結社は、“暗黒”を家とし、“陰険”を糧としている、と。

平林初之輔（一八九二～一八三二）は、大正から昭和期にかけての文芸評論家である。かれは京都師範学校をへて早大英文科にまなんだ。大正十一年（一九二二）第一次日本共産党に入党し、翌年には早大仏文科講師となるが、このころから尾行がつくようになる。述作としては、社会主義やマルクス主義的な文芸批評があるほか、翻訳の筆をとった。

同人が執筆した『近世社会思想講話』（昭和4・12）は、近世の社会思想の流れを、初学者にもわかるように平易に説いたものである。資本主

義の勃興時に稿をおこし、ほぼ年代順にしたがって叙述したものである。著者によると、近世の社会思想は、プロレタリアとブルジョアとの階級闘争の実践からにじみ出たものであるといい、双方の思想の交錯、消長（盛んなことと衰え）をたどってゆくことにしたという（「序」）。

内容の概略は——第一章 資本主義社会の組織 第二章 資本主義経済学説 第三章 空想的社会主義 第四章 無政府主義・社会民主主義・サンヂカリズム 第五章 マルクスと科学的社会主義 第六章 マルクス主義の消長 第七章 新カント学派の社会学と修正派社会主義 第八章 消費組合運動の理論と実践 第九章 社会政策と労働立法 第十章 マルクス主義の発展、レニン主義 第十一章 資本主義再建運動の諸原理 第十二章 プロレタリア文学の理論——である。

著者によると、近世の社会思潮（想）を研究するまえに、その母胎である近世社会の組織について知りたい知っておく必要があるという。近世の社会組織は、約言すれば『資本主義社会組織』であるという。マルクスは十九世紀の中葉および後半のイギリスの社会組織や経済状態をくわしく分析することによって、資本主義社会の起源、その発達と崩壊の必然的理法を発見した。その研究の結晶が、『資本論』三巻である。

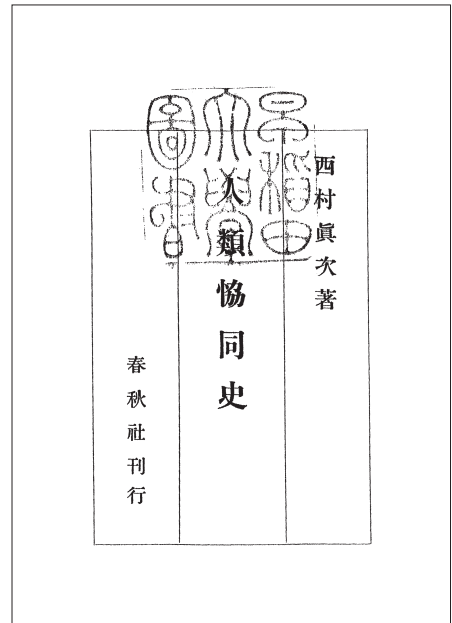
人間社会は、生産手段の発達とともに歩んできた。原始社会においてひとは動物とおなじように自然のままに生きていた。が、やがて道具をつくるようになり、漁業・狩猟・牧畜時代をへて、農業、手工業の時代に入った。いわゆる資本主義社会のはじまりである。はじめ農家は、食糧、被服、器具などをみずから生産することによって自給自足の生活をしていたが、やがて他人がつくった種々の道具やぜいたく品とじぶんがつくった農作物（商品）とを交換するようになり、社会的分業の発達をみるようになった。

十六世紀は手工業がもっとも盛え、ついで十八世紀末になると、イギリスにおいて産業革命がおこり、近代工業にとって代られた。大資本家（ブルジョア）が生まれ、賃金労働者は、近代産業の支配者である資本家に搾取されるようになった。

『フランスの社会科学——現代における諸現象』（昭和5・2）は、フランス学会がドイツの社会科学への反動として、現代フランスの社会科学の優越性を喧伝（けんでん）するために編んだ書物のようである。内容は——フランスの社会学・経済学・政治学・法学・心理学・倫理学・宗教学・歴史学・東洋学などに関して、各専門家が分担執筆した記事を取めたものである。

フランス現代社会学は田辺壽利が、ブーグレの社会学は高瀬莊太郎が執筆している。

本書を編んだ理由は、当時わが国で優勢であったドイツ哲学やドイツの社会科学研究の興隆を否定し、それを打破し、あらたにフランスの科学が秀抜であることを世間につたえるためであった。



西村真次著『人類協同史』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

高橋亀吉（一八九一～一九七七）は、大正から昭和期にかけての経済評論家である。のち拓殖大学教授をつとめた。同人は経済界の大暴風ともいえるべき「大不景気」について、昭和五年（一九三〇）一月に数回、日本工業クラブ研究会の例会で講演したが、その速記をもとに著わしたのが、『大不景気襲来^{および}其の対策』（昭和五・三）である。

本書が出版された昭和五年は、深刻な不景気がわが国を直撃していた時期である。不景気の原因は二つある、といい、一つは金解禁を断行したこと、もう一つは海外の不況にもとづくものであった。本書は、不景気の性質、その広さと深さ、そのコースを予見し、これにたいする対策をのべたものという。

策の真義と産業的結果 第三 旧平価解禁と其の影響結果としての不景気の深刻化 第四 金解禁後に於ける大不景気襲来事情の統括 附録——である。

著者によると、いま日本を脅^{おびやか}している不景気は、前衛的現象にすぎない、といい、予想される災禍^{さいか}は——物価の下落、売行不振、収入減、生活難、失業苦、就職難などであるという（「例言」）。

西村真次^{しんじ}（一八七九～一九四三）は、大正・昭和期の歴史学者、人類学者である。早稲田でまなんだのち、朝日新聞社の記者となり、大正六年（一九一七）早大教授となった。同人の『人類協同史』（昭和五・三）は、人類の協同が進化をもたらしただけを記したものである。著者によると、人類の進化の歴史を再考してみると、人類の真の歴史は、まさに「協同」（心をあわせ、力をあわせ、助けあっておこなうしごと）の歴史であることを悟ったという。

内容の概略は—— 一 最初の文化 二 棍棒から石棒へ 三 鎗と剣 四 弓矢の発明 五 戦争ばかりしてゐたか 以下、表題が六十まであるが、これを省略する 附録三篇 動物の結婚生活 民族の衡平力 芸術の始原——である。

著者が当時の日本の社会現象を観察しておもったことは、よろこばしいことは少なく、反対に歎かわしいこと、憤^{いかりおど}るべきことのみが多いことで

あった。そこでなぜこのような現象が起るのか、いろいろ考えてみると、ある事実に気づいた。それは各個人や列国民がじぶんのことばかり考えて、他の国民や他の個人のこと考慮しないことである（「序文」）。

すなわち、ひとはあまりにもじぶんの利益や快楽だけを考え、他人のしあわせや利益のことを考えないことである。いいかえると、利己主義が世界に満ち、愛他主義が消滅しつつあるからである。

昇曙夢（二八七八～一九五八）は、明治から昭和期にかけてのロシア文学者である。ニコライ神学校を卒業後、母校でおしえるかたわら、訳筆をとった。同人が訳した『芸術社会学』（昭和5・4）は、ロシアの文学史家、マルクス主義芸術学者として令名が高い、ウラヂーミル・フリイチェ（一八七〇～一九二九）の晩年の大著『芸術社会学』（一九二六年刊）を反訳したものである。

本書は、マルクス主義のあたらしい見方と方法と標準とにより、古代石器時代から現代までの芸術上の逸品を解剖し、批評している。しかしながら、著者が取り扱ったのは、造形美術もしくは空間芸術である。

内容の概略は——序 原書の序 本文 一 芸術社会学の問題 二 芸術の発生 三 芸術の社会的機能 四 芸術的生産の形式 五 美術の隆盛と衰頹 以下二十一までであるが省略——である。

『芸術社会学』とは、いかなるものか。それは芸術のある典型と社会のある形態との間に、合法的な連係（つながり）を設定する科学であるという。そして、マルクス主義的世界観のみが、この学問の建設に根柢をあたえているという。

佐野学の『社会史研究』（昭和5・7）は、社会進化の歴史と日本社会史についての論考を何篇かあつめて一書としたものである。内容の概略は——一 原始の社会 二 君主の呪術的起源 三 原始の財産制度 四 都市及び村落の歴史的進化 五 ヨーロッパ資本主義の歴史的起源——である。

このうちから『村落』および『都市』についての著者の考えについてのべておこう。村落とはなにか。そして都市とは……。人間の定住は、農業の発生とともにじまったという。狩猟や牧畜時代には、定住生活はなかった。しかし、農業は種まきと耕作と収穫をおなじ地域でなさねばならぬから、ひとはある特定の場所に住みつくようになる。かくして『村落』というものが発生する。

国語辞典によると、日本語の「むら」は、「むれ」と同語源である。「むれ」は集団を表す語である。

『国』とか『郡県』が生まれたのは、政治的必要の結果であるが、『都市』の誕生は、純然たる社会進化の産物であるという。一方、村落の発生

は、自足経済の産物なのである。

安達久の『日本教育思想史』（昭和5・8）は、従来なおざりにされていた、太古から現在までのわが国の教育思想について系統的に考察し、一冊にまとめたものという（「例言」）。日本の維新以後の教育が西洋追従であり、日本教育史の教授も、西洋教育史のそれにくらべて、いちじるしく軽視されていたという。

それがいま学界の興味をひくようになったのは、国民的自覚の勃興によるものらしい。内容の概略は——第一章 緒論 第二章 太古の教育 第三章 上古の教育 第四章 中古の教育 第五章 中世の教育 第六章 近世の教育 第七章 最近世の教育 結論——である。いっぽう思想史のうえから、なぜ日本教育史の研究が必要なのか。この問にたいして、筆者はこう答えている。それはわが国の教育理論や実際の由来を理解し、むかしの教育家の献身的活動をしのび、いまわれわれが行なっている教育に利用するためである。日本教育史の研究とは、いえるかと、“教育のための教育史”であるという。

教育は社会の要求によっておこり、時代思潮の影響をうけるのだが、いま日本教育史を区分すると、つぎのようになるという。

第一 太古の教育……………海外文化の影響をうけていない時代であり、日本固有の物の見方や考え方がおこなわれていた時代。換言すれば、“神ながらの道”の時代。

第二 上古（おおむかし、奈良朝まで）の教育……………儒教やインドの仏教がたわり、素朴かつ単純な教育がおこなわれた時代。

第三 中古（平安朝）の教育……………中国やインドの思想と日本の思想とが融和し、貴族教育がさかんになった時代。

第四 中世（鎌倉から戦国時代）の教育……………武士道がおこり、また平民教育が勃興した時代。

第五 近世（徳川時代）の教育……………古道、武士道、儒教思想、実学思想などが現出した時代。

第六 最近世（明治以後）の教育……………王政復古により、国家による統制的な教育がおこなわれた時代。西洋のあたらしい学問が移入され、その受容がおこなわれた時代。

従来、わが国の教育は、男性を対象におこなわれた感があり、近世における女子教育は振わなかった。いま徳川時代の女子教育を瞥見してみると、世間の風潮として、女子の知育は重んじられず、学問があると心がおこり、円満な家庭はつくりにくいと考えられた。それゆえ、学に志す女

性はすくなかった。

平民の子女………家庭では、料理・裁縫・機織^{はたおり}などを学び、寺小屋では習字や算術、読書などをまなんだ。
中流以上の武士・公家の子女………家庭で師傳^{しふ}（養育係）または出稽古^{でけいこ}の師匠から、読書・作文・習字・和歌・琴・茶の湯・活花^{いけばな}などをまなんだ。

この時代の女性は、学問より遊芸（謡曲・踊り・琴・三味線・笛など）を学ぶことを奨励され、芸に達者なものがよこばれた。

本莊可宗^{よしもと}の『プロレタリア宗教理論』（昭和5・9）は、マルクス主義（その無神論）への入門書のようなものである。著者は、これ（本書）はマルクス主義へ入るための小さい扉^{しほ}といっている。本書に収録した稿は、大学で講義したもの、あるいは諸雑誌に発表したものである。

内容の概略は—— 第一編 一 プロレタリア宗教理論 第二編 一 宗教の奴隷性 二 唯物論と人間的自由 三 「宗教弁護」の諸理論・その批判 四 宗教批判に絡む^{から}諸問題 五 生活に対する観念論的見方と唯物論的見方——である。

宗教の存在の歴史的、社会的意義とはなにか。宗教が無産階級にたいして働きつつある階級的役割とはなにか。「階級的見地」から、宗教を論じることが、マルクス主義的な問題の取りあつかい方なのである。

宗教の目的は——それが発生した理由は——安心をえるためであった。かつて僧侶は、じぶんの存在を保つために、権力者にへつらったり、その手先になっていたことがあり、また被圧迫者を搾取するために「精神的是認」をあたえる役目をはたしたこともあった。こういった過去および現在の誤りを正し、時代に適合するためにも、宗教を改良する必要があるという。

本書は、階級的に「宗教の」存在と意義を分析考究したものである。

長谷川光太郎の『循環景気の実際研究』（昭和5・9）は、国民新聞の経済部記者時代の収獲であるという。数年来、日本は深刻な不景気に悩まされているだけに、この問題にひじょうな関心をもたねばならぬという。わが国の不況は、浜口内閣の金解禁断行やアメリカその他の国の不況が、いっそうそれを助長した。

内容の概略は—— 第一章 巻頭の語 第二章 景気循環の根拠 第三章 六十年の財界変遷 第四章 循環経済の諸現象 第五章 禍福浮沈の交錯 第六章 金解禁後の財界——である。

著者によると、大ざっぱな見方であるが、明治維新後の経済界の動向をみてみると、時に例外はあっても、景気と不景気が交互におとずれているという。だいたい好景気のあとに反動（反作用）があるということ。

すなわち恐慌——中間景気——不景気——ほんとうの不景気——景気回復の漸進期——ふっとう的好景気がくる、と。この経路は、ほとんど判を捺したようにくり返しているという。『循環景気』と呼ばれる所以である。

里見岸雄（一八九七—一九七四）は、昭和期の国家主義者である。昭和二年（一九二七）国体学を提唱したり、美濃部達吉の天皇機関説を攻撃した。昭和十六年（一九四一）立命館大学に“国体学科”を設けた。

「教育勅語」は、明治二十三年（一八九〇）に發布され、戦前の日本国民が守るべき徳目をしめしたものととして知られている。里見の『思想的嵐を突破して』（昭和五・九）は、教育勅語が發布されて四十年記念の祝いとして社会に贈ったものである。

内容の概略は——第一章 国民史上に於ける教勅の意義 第二章 教勅に対する把握の変化 第三章 国体の精華と教育 第四章 家庭に於ける生活軌範 第五章 社会に於ける吾等の生活 第六章 国家に対し吾等是如何に観念し如何に行動すべきか 第七章 皇運扶翼の徹底的理解と実践の把握 第八章 三千年の体験を結束して全世界に呼びかける 第九章 天皇中心人格的共存共栄社会の実現 第十章 勅語全文通釈——である。

著者にとって教育勅語とは、なんであつたのか。それは万世不滅の聖典であり、社会生活の法則を形式的にしめしたものであつた。また本書刊行の目的は、教育勅語に対する一切の過去のイデオロギー（思想）を現代に適合するようにまとめることであつた。

明治維新後、古いものは破壊され、あたらしいものが歓迎される風潮がもしだされ、各種の思想の勃興をみた。社会の動向は、日夜進展につぐ飛躍をもって欧化主義に狂走したが、国民教育の亀鑑（てほん）として教育勅語が發布されるにいたつた。

石浜知行（一八九五—一九五〇）は、昭和期の経済史家である。九州帝大法文学部教授となるが、昭和三年（一九一四）の三・一五事件に関連して辞職した。『社会変革過程の諸問題』（昭和五・一〇）は、同人の述作である。石浜は九州帝国大学の教職を辞して上京したのち、二年半のあいだに四著（『経済史概論』『資本主義の成立とそれ以後に於ける経済の発展』『ドイツ経済史』『アメリカ資本主義発達史』）を出版した。これ以外に社会史や経済史についての論文を諸雑誌に発表したのが、いわば研究の余滴（よてき）をあつめて一本としたのが本書であるという。

内容の概略は——第一篇 現代資本主義社会の諸研究 第二篇 労働史の諸研究 第三篇 原始共同組織の諸研究 第四篇 日本社会史の諸研



河上肇

究——である。

さいこの篇章（「日本社会史の諸研究」）のなかに、「明治六年筑前竹槍一揆」と題する小論が収められている。これは明治新政府の体制がまだ脆弱であった明治六年（一八七三）六月に、筑前（福岡県北部を占める旧国名）一帯十五郷においておこなわれた農民一揆のことである。この騒動は「竹槍一揆」とも呼ばれ、参加者は約六万四千名にも上った。

この一揆の近因としては、「ひでり」（三月から六月まで雨がふらず、苗も枯死した）、遠因としては新政府による諸政策の乱発であった。農民が福岡県当局に出した要求は、

- 一 年貢を三カ年猶予すること。
- 一 学校の創設、徴兵の募集、地券の発行をやめること。
- 一 切手（藩札）をこれまで通り通用できるようにすること。
- 一 知事（居を東京に移した黒田藩知事）様御帰国のこと。

などであった。一揆に参加した農民らは、嘉摩郡高倉村の日吉神社にあつまと神に祈願し、さらに近在の不平農民を糾合して、富家・酒屋・米屋・質屋・両替屋・役所などを襲い、放火したり、電柱をたおしたりして、博多の町を恐怖におとし入れた。

この騒擾にたいして、縣下の士族は隊をつくり、熊本鎮台の兵の力をかりて、弾圧にのりだし、七月五日ついにこれを鎮圧した。

武力鎮圧ののち、一揆に加わった者の訊問がはじまり、五名を一組とし、もし真実をいわぬ場合、五人同罪とし、拷問をもふくむしゅん烈な取りしらべをおこなった。

河上肇（はじめ）（一八七九―一九四六）は、明治から昭和期の経済学者、社会思想家である。同人が著わした『第一貧乏物語』（昭和5・11）は、昭和四年（一九二九）春から同五年夏までの間に、雑誌『改造』に連載したものを、そのまま一冊にまとめたものという。かれは社会の裏側にひそんでいる貧困問題に、

人道主義的な視線をそそぎ、貧困を社会問題としてとらえ、その解決策を社会改造にもとめた。かれはブルジョア経済学よりマルクス経済学の立場に急速に近づき、後年、京都帝国大学を追われ、共産党員となり、検挙されるが、さいごまで非転向をつらぬいた。

『第二貧乏物語』は、五〇四頁もある大著である。「検閲」の跡が多く、筆者にとって重要とおもわれる箇所、ところどころに伏字が用いられているが、それは筆者にもっとも苦痛をあたえたものである。内容の概略は——一 まへおき 二から六までは、弁証法的唯物論についての総説・細論・批判 七から十までは、唯物史観に関するもの 十一 唯一史観から資本主義的社会の解剖へ 十二 驚くべき貧富の懸隔 十三 資本主義的社会の細胞としての商品の分析 十四 価値の実体としての社会的労働 十五 剰余価値 十六 剰余価値の出处 十七 商品としての労働力 十八 労働時間延長 賃金値下げ 産業合理化——労働能率の増進等々 十九 資本主義社会の行き詰り——その必然的^(伏字) 附録の一、二——である。

官憲による「伏字」は、筆者に苦痛をあたえたけど、ただ一点なぐさめられたのは、附録に添えたスターリンの報告演説（「社会主義的建設の加速度的な勃興とソビエト連邦の国内状況」）が、検閲にひっかからなかったことである。

（前略）レーニンの旗のもとにこそ吾々は、社会主義的建設の勝利のための闘争において、決定的な結果を勝ち取ったのだ。

同じ旗のもとにおいてプロレタリア^(伏字)××は、全世界において勝利するであらう。

レーニン主義万歳！

直井武夫訳『共産主義「左翼」小児病』（昭和5・12）は、かつて和田哲二がドイツ版（ベルリン、一九二五年刊）から翻訳した訳本を、ソビエト版レーニン全集第二版第二十五卷（一九二八年）にもとづいて改訳したものである。レーニンが本書を執筆したのは、一九二〇年（大正九年）四月から五月にかけてであり、当時ロシアにおいてレーニンらは、ソビエト政権の維持確立に腐心していた。

内容の概略は——第一章 吾々是如何なる意味においてロシア革命の国際的意義を語ることが出来るか 第二章 ボリシェヴィキ成功の一主要条件 第三章 ボリシェヴィズムの歴史の主要段階 第四章 労働運動内の如何なる敵との闘争において、ボリシェヴィズムは成長し、強固となり、鍛^{きた}へ上げられたか？ 第五章 ドイツの『左翼』共産主義、首領——党——階級——大衆 以下、第十章までであるが省略する——である。

福島次郎訳『民族問題について』（昭和6・2）も、前掲書とおなじようにレーニンの述作を重訳したものである。翻訳の底本は、*Quellenbücher des Leninismus Bd.4 © Lenin: Über die Nationalfrage* だという。レーニン主義は、マルクスの理論と実践を忠実にうけつぎ、発展させたものであるが、この思想上の立場は、『民族問題』においても、マルクス主義の発展と定式化をなしとげているという（訳者序）。

帝国主義が惹起したものは、おもに植民地、半植民地における弱小民族（被抑圧民族）の問題である。こういった弱い民族は、帝国主義的な抑圧者にたいして日夜、民族解放闘争をおこなっている。それは抵抗運動、独立運動といった形をとって爆発し、抑圧者と火花をちらしている。本書は、レーニンの民族や植民地問題に関する論文や演説を収録したものである。内容の概略は——訳者および編輯者序　レーニン主義と民族問題（スターリン）　世界史の断章　セルビア＝ブルガリア勝利の社会的意義　支那の革新　後退的ヨーロッパと前進的アジア　民族問題に対する評言　民族自決権——である。

安部磯雄と小池四郎の共訳になる『インターナショナル　歴史　現状発展』（昭和6・3）の原書については明らかでない。『インターナショナル』（*International*）とは、『国際労働者同盟』の意である。この種の労働者同盟は、過去に四度ほどつくられた。

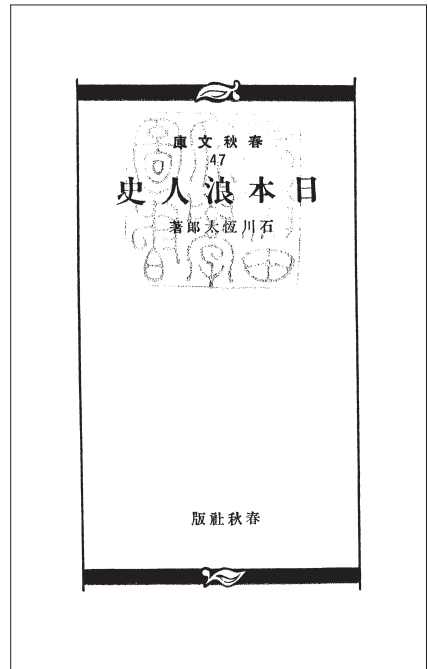
第一インターナショナル……………*The First International*（一八六四年～七六年——ロンドンで組織された。もとInternational Workingmen's Associationと呼ばれた）

第二インターナショナル……………*The Second International*（一八八九年～一九一四年——パリで組織され、*The Socialist International*と呼ばれた）

第三インターナショナル……………*The Third International*（一九一九年～一九四三年——モスクワで組織され、正式にはCommunist International、略してCominternと呼ばれた）

第四インターナショナル……………*The Fourth International*（一九三六年にトロツキーら急進派によって組織され、*Trotskyist International*と呼ばれた）

インターナショナリズム（国際協調主義、国際共産「社会」主義）のもっとも大切な基柱は、国際主義的人道主義である。本書が取りあつかっている諸問題は、——労働者の世界的結合の観念はどのようにして発生したのか。この思想は、どのような活動、いかなる組織や機関の発達をうながしたか。そしていかなる勢力をもつにいったか。国際労働運動が世界にむかってもつ約束と脅威とは、いかなるものか——といったもので



石川恒太郎著『日本浪人史』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

ある。

内容の概略は——緒言 歴史の部 第一部 伝統（一八三〇年～一八八〇年） 第一章 思想の氾濫（一八三〇年～一八四八年） 第二章 第一インターナショナル（一八六四年～一八七六年） 第二部 平和と進歩（一八八〇年～一九一四年） 第三章 第二インターナショナル（一八八九年～一九一四年） 第三部 戦争と革命（一九一四年～一九二四年） 第七章 第三インターナショナルの起源（一九一四年～一九一九年） 第四部 改造と再建（一九二四年～一九二八年） 現状の部——である。

世紀にフランスやアメリカの政治革命やイギリスの産業革命にすでにその萌芽がみられるが、世界的な協同運動へとうごきだしたのは、一八三〇年から一八四〇年にかけてであり、ヨーロッパやアメリカでまず頭をもたげたのである。

石川恒太郎の『日本浪人史』（昭和6・3）は、春秋文庫に収録されている。著者は大阪毎日新聞に勤務する記者である。ユニークな表題をもつ本書執筆の動機は、著者が入社するまえに味った痛烈な“失業苦”であった。

主家を去ることによって封禄をうしなった武士とか失業者などを総じて“浪人^{ろうにん}”という。これまでの歴史的な浪人の研究というと、法制史や風俗史のうえからおこなったものが多かったという。浪人の研究は、失業問題との関連で考えるべきものであって、生活の問題がいちばん重要視されるべきものという。

“浪人”を意味する語として、ほかに牢人、流浪人、老人といったものもあるが、ことばの内容は時代とともに変化している。古くは“浪人”は、“浮浪^{うかれびと}”と呼ばれた。七世紀の大化改新以来、戸籍にもれ諸所をさすらっていた、住所不定の無籍人のことを“うかれびと”（浮浪）と訓よみにしていた。

浪人を意味する、もっとも古い例は『日本書紀』天智天皇九年のくだりにみられる、「二月戸籍を造り、盗人^{むすびと}と浮浪^{うかれびと}とを断^やむ」という語であるという（「緒言」）。

内容の概略は——自序 緒論 第一編 浮浪篇 第一章 浮浪の発生 第二章 浮浪の生活 第三章 武士発生の過渡時代と浮浪 第二編 浪人篇 第一章 戦乱期の前期的浪人 第二章 兵農分離と浪人禁庄 第三章 階級の固定化と浪人の発生 第三編 浪人生活篇 第一章 浪人の生活苦 第二章 売り食ひの生活(序曲)——である。

田川大吉郎(だいきちろう)(一八六九—一九四七)は、長崎のひとである。東京専門学校を出たのち、『報知新聞』や『都新聞』の記者となり、明治四十一年(一九〇八)東京助役をへて代議士となった。かれは自由主義者として、戦争ちゅうも軍部の圧力に屈することはなかった。戦後、明治学院総理となった。

同人の『社会改良史論』(昭和6・4)は、明治学院で講義したものの筆録である。そのノートを補整したのが本書だという。第一次世界大戦の一大所産はなにかといえば、一つはロシアにおいて敗戦と同盟罷業によって社会不安が生じ、革命によってロマノフ王朝が倒れ、民主共和国——労農ロシアがあらたに誕生したことである。もう一つは、世界じゅうに民主主義の気運を醸成したことである。

ロシアの共産主義思想は、マルクス主義的立場をその基盤とし、資本主義を敵視している。ロシア思想は、英米二国に大した影響をあたえることはなかったが、著者の見るところ、赤の思想の波をかぶったのは日本であり、日本社会は混乱をきたし、狼狽して止むところを知らない状態にある。

英米が共産主義の洗礼をうけても何ともなかったのは、国内にろう固たる議会があり、キリスト教的社会主義があったからである。一方、日本には議会はともあれ、キリスト教的社会主義はなかった。

日本の労使問題は、議会および政党が邪魔物になっており、その抜本的方策として考えねばならぬのは、組織内容をふくむ議会の改善だという。そして日本国民の融和と協調こそが目下の急務であり、このような観察に立ち、未来に望みをかけて、本書を編述したという。

内容の概略は——第一編 総説 第一章 社会主義に就て(上) 第二章 社会改良事業に就て(中) 第三章 平等か不平等か(下) 第二編 英国の部 第一章 英国の基督教的傾向 第二章 基督教社会主義の台頭 第三章 彼等の為した運動の二三 第四章 労働者大学 第五章 フレデリック・マウリス 第三編 英国の部 第四編 日本の部 第一章 奴隷廃止 第二章 東京市養育院 第三章 赤十字事業 第四章 免因事業 第五章 日曜学校 第五編 参照 第一章 マルクスの主張(上) 第二章 マルクスの主張(下)——である。

能勢岩吉の『最近学生左翼運動秘録』(昭和6・4)は、おもに学生思想問題について論じたものである。とくに学生による『同盟休校』(盟

休）事件をあつかっている。著者によると、学生思想問題は、単なる教育問題ではなくて、重大なる社会問題であるという。最近勃発している学生の「同盟休校」は、このことを雄弁に物語っているという。学生が求めているものは、つぎのようなものである。

- 一 学校の企業化絶対反対。
- 一 学生自治の確立。
- 一 学校行政への学生の発言権。
- 一 学校設備の完全。
- 一 学内への警察権侵入絶対反対。

本書は、いまの学生運動と極左陣営との関係や新教育のための指針についてのべたものである。

著者によると、同盟休校が頻発したのは、昭和五年（一九三〇）から翌年にかけてであるという。学生運動の背後には、いつも学生が出入りする極左団体があつた。左翼学生は、ストライキ指導するだけにとどまらず、労働運動ともかわりをもっていた。

内容の概略は——学生運動と極左団体 二 学生運動の心臓読書会 三 学生運動と消費組合 四 日本大学盟休事件 五 早稲田大学盟休事件 六 明治大学盟休事件 七 東京女子歯科医専の盟休 八 朝鮮学生騒擾事件と背後に動いた思想団体 九 盲人技術学生の盟休 十 慶応義塾の盟休事件 十一 結論——である。

森清人の『大衆を何処へ動員すべきか——日本主義無産運動理論の提唱』（昭和6・4）は、無産運動——労働者・貧農・下級サラリーマンなど、労働賃金でくらす階級の解放や地位向上をめざす運動——が、日本の国体と本質的に矛盾するこれまでの錯覚的イデオロギーを根本から粉砕し、一君万民主義の観点にたつ、日本主義無産運動の客観的理論を建設しようとしたものという（「序に代へて」）。

内容の概略は——第一章 資本主義への挽歌 一 悲しむべき懷疑 二 ××の前奏曲 三 資本家よ進化の力を阻み得るや 四 ソヴェート・ロシアの展望 五 階級解放の聖戦か 第二章 資本主義反国体論 第三章 国粋無産政党論 第四章 資本主義はなぜ改革さるべきか 第五章 なぜ世界は社会主義を肯定しないのか 第六章 遺産三代収用論——である。

社会の事象が、ひくい段階から高い段階に移行するさまを、ドイツの哲学者ヘーゲル（一七七〇～一八三一）は「止揚」*aufheben*とよんだことはよく知られている。が、昭和初期経済的に疲弊していた日本は、「止揚」*アウフヘーベン*する方向がみつからなかった。農民は凶作に泣き、失業者はちまたにあふれ、資本家階級と労働者階級との対立はいよいよはげしくなるばかりで、政府には経綸（けいりん）（治めととのえる）策がなかった。自棄（じき）的な民衆は、エロ・グロ・ナンセンスのたわいもない官能的享楽に逃避するしかなかった。

ロンドン、ディーン街のアパートの一室で貧困のうちに亡くなったマルクスは、「資本主義的私有」*資本主義的私有*がおわりをつけることを予見したにもかかわらず、資本主義は亡びることなく、大きな力を維持している。社会主義思想をいだいた先蹤（せんしゅう）（先例）*先蹤*は、プラトンである。かれは国家統制による経済行動や私有財産の公有を『共和国』のなかで説いている。

古来、社会主義思想は、とりとめなく人びとの頭のなかにあったのだが、それに「唯物論的弁証法」といった衣裳をまとわせたのはマルクスであった。かれは資本主義打倒の大きな旗をかかげて登場したのだが、いまだにその願望は成就していない。社会主義や共産主義が、世界に容れられないのは、その主張に大きな欠陥があるからであり、かつ万人がみとめる普遍妥当なる真理がないからである、という（第五章 なぜ世界は社会主義を肯定しないのか）。

荒川芳三訳『性と文明』（昭和6・4）は、*ハヴェロック・エリス*が原著者になっている。が、じっさいは四、五名の執筆者が各章を分担執筆しているから、厳密に言えば共著ということになる。本書は、性的動物の子孫である人間の文明時代における「性」について論じたものである。

内容の概略は—— 一 序文（ハヴェロック・エリス） 一 潜在意識の解剖 二 社会学的に見たる性行動 三 文明過程の中に於ける性の現象 四 動物性心理学——である。

著者によると、「独身」ということは、売淫よりも一千倍も害があるという。とりわけ男性の独身は、多くの女性に影響を及ぼすところが大きいので、売淫よりもはるかに大きい罪悪であるという。また一般人は、性の恩沢に浴しているのに、高貴なる人びとの大部分は、性的に飢えていなくても、性的には栄養不良であろうとおもわれる、という。

桜井庄太郎の『日本封建社会史——初期封建社会に関する若干の研究』（昭和6・4）は、とくに初期社会の「階級」について研究したものである。封建社会は、いつごろ日本史上にあらわれたのか、その時期については、学者のあいだでも多くの異説がある。が、著者は、わが国の封建制度の萌芽はすでに平安時代にあらわれ、鎌倉時代に成立したと考えている。

すなわち大化改新の「班田制度」がすたれ、墾田（あらたに開いた田地）の発達にともなって荘園制度があらわれ、それが武士階級の勃興をみちびいた源頼朝が鎌倉幕府を創設するにおよんで、武士による社会支配は不動のものとなるとともに、「封建社会」の成立をみたのである。初期の封建社会の階級とはどのようなものか。それはつぎのような階層から成っていた。

武士……………社会の最上層をしめる支配階級

貴族
僧侶 } ……準支配階級

庶民……………被支配階級（農民、商人、職人など）

賤民……………被支配階級（奴隷と穢多から成る）

著者によると、封建社会の階級組織における最大の特徴は、支配階級はつねに武士であり、被支配階級の大部分はつねに農民であったことである。

内容の概略は——序論 第一章 初期封建社会に於ける階級関係 第二章 武士の農民搾取 第三章 社寺・僧侶の活躍 第四章 庶民の生活と奴婢——である。

浄土真宗本願寺派第二十二世の大谷光瑞（一八七六—一八四八）の口述を筆録して、『読売新聞』紙上に掲載したものをあつめて一書としたのが、『世間非世間』（昭和6・4）である。内容の概略は——非世間篇 仏教の大意 一 序説 二 二種の諦 三 世俗諦 四 第一義諦 五 迷と悟 世間篇 世間改造論 政治改造論 はしがき 冗員（余分にいる人員）と冗費 故意の冗費 教育改造論 大学と専門学校 農業改造論 雑篇——である。

本書は著者の肩のこらない時評や随筆を収録しており、おもしろくよめる。耳目をひく学校騒動とか、学の独立とか研究の自由といった学生や教師の声をきく著者は、かれらがまじめにそれぞれのつとめを全うしているかどうか疑問視している（「大学と専門学校」）。学生は学事に努めているであろうか。教師ははたして教導者として熱誠と親切をもって学生を教育しているだろうか。

いずこの国、いずれの時代においても、だらしない、ぐうたら学生はいるのである。かれらはなんのために学校へ来ているのか、じぶんでもよくわからず、ただ校舎で漫然と時間をすごしているだけである。かれらは教場でノートをとること（とらない者も多い）を学問と心得ている。試験前にやる勉強だけが、真の勉強だとおもっている。あとは玉突屋、映画館、公園、カフェなどで遊んで過ごす。

大学や専門学校の教師は、年間の大部分を学生にほとんどふれることなしに過ごし、学生が勉強しようが、すまいが無関心である。教師は学生が提出するレポートもしくは試験の答案によってのみ学生を判断する。生活が放恣^{ほうし}に流れているのは学生だけではない。さっこん教師も懶惰^{らんだ}な生活を送っている。

野原四郎訳『支那封建社会史』（昭和6・5）は、中国の封建制度とその崩壊過程について論じたものである。著者の陶希聖^{タオキシセイ}についてはつまびらかにしないが、中国国民党の理論家であるという（訳者から）。

西暦前四世紀以前に、黄河・揚子江両河流の腹部のあいだの平原で、封建制度がおこなわれていた。西暦前四百年以後、その封建的要素が分解しはじめるが、自然経済はずっと維持され、西暦一五〇〇年にまでおよんだ。その後、貨幣経済がいちじるしく台頭し、揚子江の腹部とその南方において盛んになったという（緒論）。

昭和初期の中国社会は、金融資本の支配をうけているが、二四〇〇年前の封建的要素がまだ存続している。当時の中国の社会構造について、つぎのような見解を提出するものもいるという。

- 一 中国社会は、封建制度とみられる。なぜなら、この社会は、土地資本を基礎としているからである。
- 二 中国社会は、資本主義社会である。なぜなら、この国には西暦前五世紀以前にすでに商業資本があるからである。
- 三 中国社会は、半封建社会である。もはや封建制度でもなく、資本主義社会でもないからである。

内容の概略は——訳者から 著者序 緒論 第一章 支那の地理と民族 第二章 支那の封建制度 第三章 封建制度の分解 第四章 集権国家の成立 第五章 商人資本の性質 第六章 土地制度の性質 第七章 過剰人口の生産と再生産 第八章 結論——である。

『日本社会文化史概論』（昭和6・6）の著者は、興亜学塾学監である。「興亜^{こうあ}」とは、アジア諸国の勢いをさかんにしたり、勢いさかんなアジ

アの意である。戦前、さかんに用いられた語である。

本書は興亜学塾から刊行された書物である。この右翼ばい、私設の学舎は、あたかも八紘一字の理想を実現しようとするかのような印象をあたえる。刊行の辞のなかに、

新しき世界の建設は、新しき亜細亜^{アジヤ}の建設に始まり、新しき亜細亜^{アジヤ}の建設は、新しき日本の建設に始まる。(中略) 亜細亜諸邦は、明日の国である。(日本は) 明後日の国を目標として進むべきである。

と、いったことが見られるからである。

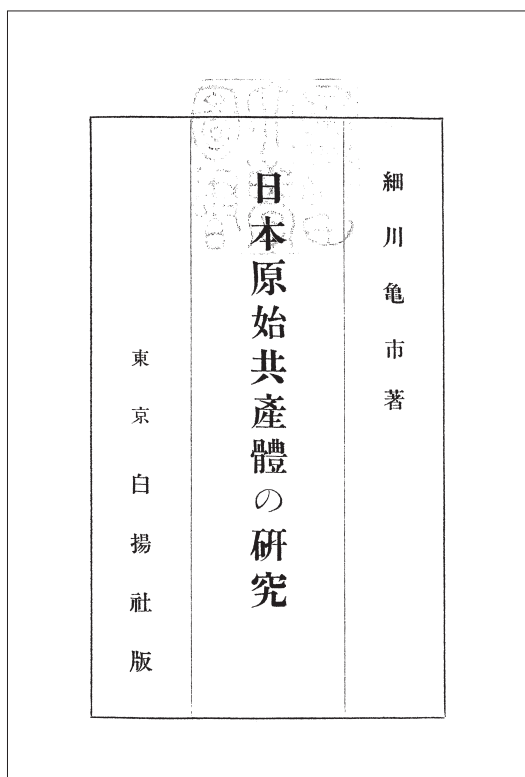
本書は日本社会の発展にともなう文化や社会構造の変遷史について説いたものである。内容の概略は——第一章 日本社会文化史の観念 第二章 日本社会文化の発展段階 第三章 日本社会形態の発生的規制 第四章 日本国家形態の発生的規制 第五章 氏族制度の時代 第六章 大化改新史の再認 第七章 荘園制度の時代(梗概) 第八章 封建制度の形成(史論) 第九章 封建社会の発展(梗概) 第十章 明治維新史の再認——封建社会崩壊と止揚の諸過程——である。

社会はいかにして発見されたのか。個人の集合体としての社会とその社会観は、どのような変遷をたどってきたのか。日本民族の社会的結合は、いかなる機能的目的、社会構成として理解されねばならぬか。これらはまず著者が追求しようとした質問である。

竹原八郎訳『マルクス学説体系の終焉』(昭和6・6)は、ベーム・バウエルクの論著を反訳したものである。同書はマルクスの基点となる経済学説やその学説の内的矛盾を衝いたものである。平易な書物の繙読になれた者は、マルクスの難解な弁証法的論議を理解することは容易ではない。マルクス理論の論理上ならびに事実上のさまざまな矛盾を論難しているのが、本書である。

内容の概略は——緒論 一 価値並に剰余価値の理論 二 平均利潤率並に生産価格の理論 三 矛盾の問題 四 マルクス学説体系に於ける誤謬 五 ウエルネル・ゾンバルトの擁護論——である。

三村親信^{ちかのぶ}の『教育勅語と教育の淵源』(昭和6・7)は、明治二十三年(一八九〇)十月より、昭和二十三年(一九四八)に失効するまで、約六十年ちかく、わが国の国民教育に指針をあたえつづけた教育に関する勅語の精神とその本質について論じたものである。



細川亀市著『日本原始共産體の研究』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

著者からみると、“教育勅語”（三一五文字から成る）は、皇祖高宗（歴代の天皇）の残した教えの道であり、臣民の生命や暮らしのなかに一貫して流れている自然の道である。またそれはわが国の教育の“絶対根本義”であり、同時に“肇国（建国）の精神”でもあった。

内容の概略は—— 第一編 叙説 第二編 教育の淵源 第一章から第二章まで 教育の淵源としての勅語の正文 勅語精神の心核 第三編 実現実行 第四編 結語——である。

社会学研究会訳『イデオロギー論』（昭和6・7）は、イデオロギー問題を社会的に解釈した諸論文を反訳したものである。内容の概略は——カアル・マンハイムの「知識社会学の問題」と「イデオロギーとユートピア」マックス・シェラーの「知識の諸形態と教育」ゴットフリート・ザロモンの「史的唯物論とイデオロギー論」——である。

細川亀市の『日本原始共産體の研究』（昭和6・7）は、著者が『宗教研究』（東大宗教教学研究室の機関誌）や雑誌『思想』等に発表した論文をまとめて一書としたものである。著者によると、“日本原始共産體”の存在が、学者によって注目されるようになったのは、明治三十年ごろ以後のことであるという。その後しばらく顧みられなかったが、こんにち再び学界で大きな問題になろうとしているという。

内容の概略は——第一章 日本原始共産體の存否に関する諸学説 第二章 古代日本の社会関係と仏教の世界観 第三章 日本原始共産體の兵制 第四章 日本国家の成立過程 外篇 外国原始共産體の研究 第一 農業の起源 第二 原始共産體の歴史過程——である。

“原始共産體”とは、原始的で自然発生的な、共産性社会のいみである。当時の農耕民族にとっていちばん重要な生産手段はなにかといえば、土地である。じっさい、わが国の古代に原始共産體が存在したのか、しなかったのか、すなわち、土地の“共有性”（なら階級的搾取がないこと）の存否は、重要な問題である。

原始土地共有制の存否に關して肯定説をとったのは、――

法学博士 福田徳三（一八七四―一九三〇、明治・大正期の……明治三十三年（一九〇〇）ドイツ留学中に*Die gesellschaftliche und wirtschaftliche*

経済学者。のち東京商大教授）*Entwicklung in Japan*（1900）を発表し、肯定説を主張した。福田説は、当時ヨー

ロッパの学説に影響をあたえたいらしい。

いわく。「かれらは共同して土地を占領し、之を呼ぶのにかれらは共同の名称たる『山和』を以てした」（第二節 肯定説、五頁）。福田説は、『日本経済史論』に収録されている。

文学博士 内田銀蔵（一八七二―一九一九、明治・大正期の……福田説が出て数年後、「我国中古の班田収授法」（『日本経済史の研究』に収録）と

歴史学者、のち京都帝大史学科教授）題する詳細綿密な論文を発表した。

このあと、経済学博士・黒正蔵、法学博士・石田文次郎らも、古代における「土地共有性」の存在を肯定するたちばをとった。ことに福田がはじめてこの説を論著において発表したとき、わが国のマルキストたちは、たいそうよろこんだらしい。しかし、福田は昭和二年（一九二七）にいたり、自説をすてた。

一方、否定説をとったのは、昭和期の法制史学者・滝川政次郎であり、大化改新以前の上古日本に、土地共有性があったとする証拠はない、と反論した。しかしながら、当時、肯定説を支持する学者は多かったようである。

岩崎卯一（一八九一―一九六〇）は、関西大学で法律をまなび、在学中に弁護士試験に合格し、さらに米国に留学し、コロンビア大学でギディングスのもとで社会学を手ほどきされ、博士の学位をえて帰国した。母校の経済学科や法学部の教授となり、のち大学行政にたずさわったり日本社会学会理事などに就任した。

大正四年（一九一五）の秋――渡米したとき、刑法と刑事政策をまなぶ予定であったが、母校の命令にそむいて社会学と社会立法学の研究をはじめたという。その人生は、紆余曲折に富んだものであった。じつに多作の学者であり、生前、著者二十五冊、論文やエッセイを二百あまり執筆した。

同人が著わした『社会統制理論の研究』（昭和6・10）は、書きためておいた未定稿に手を入れ、まとめたものである。内容の概略は——第一篇 社会進歩理論の研究 第二篇 社会統制理論の研究 第三篇 社会政策理論の出発点——である。

このうちから“社会統制”について、著者の考えを聞いてみよう。社会統制とは、ふつう国家のような権力や権威の主体が、一定の計画や意図にしたがって、社会をとりしめる意と解される。文化の程度が向上するにつれて、いろいろ統制があるのがふつうである。

著者いわく。ほとんどすべての現代国家は、その国民に行為規範をしめし、かつこの規範の表現であるもろもろの統制作用（法律のことか？）を絶対的に遵奉し、これに服従することを強要している、と。だから国民が心にどんな反国家的な信念をいだいたとしても、その外部行動が規範からはなれると、法規でもって容赦のない取締りをうける。

憲法とはなにか。それは現代社会の典型としての国家を特徴づけている根本規範であるという。

現代人が従わねばならぬのは、“国家の統制”ばかりではない。もしひとが宗教的な雰囲気の中かにじぶんを見いだすと、宗教王国の統制をも甘受せねばならないという。そして資本主義経済が生んだ、経済王国の統制というものがある。資本主義社会では、ややもすれば統制力を濫用しがちであるが、生存権や労働権を主張してかまびすしいのは、有産者にたいする無産者の声である。

夏秋亀一^{なかば}は、満鉄のハルビン出張所長として多年同地において活躍し、また何度もロシアに入国したことがある、当時日本有数のロシア通であったらしい。同人が著わしたものが『共産主義社会主義の解剖』（昭和6・11）である。著者は吉野の山奥に生まれ、十二歳のとき金五円をもって故郷をあとにし、東京の親戚の家にやっかいになり、三杯目の飯の茶わんをそっと出す居候^{いそうこう}となった。

のち苦心惨たんし学校を出ると、“腰弁”（安月給とり）となった。貧乏とは縁が切れず、ロシアの共産党からみれば、りっぱなコミュニニストとなる資格はじゅうぶんあるはずだった。かれは資本家や豪農を敵視し、資本主義に代わる公正なる主義をみつめようと、社会主義を研究してみた。いったい“社会主義”は、ほめたたえるに値するものなのか。それは日本の国情に合うものか、否か。それは有益なる主義かどうか。

研究の結果、著者がえた結論はつぎのようなものであった。

社会主義は、反社会的であるということ。

新社会的思想は、反社会主義的であるということ。ロシア共産党の大好きなものは、“内乱”と“革命”である。クレムリン（ソ連政府）が望んでいることは、失業・飢餓・内乱・革命などをおこさせて、民衆を共産党の幕下に参ぜしめることである。

内容の概略は——第一章 緒言 第二章 社会主義と社会的との区分 第三章 社会主義と人間の本性 第四章 社会主義と自由 第五章 社会主義と恐嚇（おどかす） 手段 第六章 人力の大濫費 第七章 公平^{おひら}及平等 第八章 階級闘争 第九章 強制的労働 労働義務 第十章 結論 附録——である。

伊藤藏平の『日本国家の成立過程』（昭和6・11）は、主としてわが国の古代社会——国家成立までの社会や農耕の発生、氏制社会、古代の律令国家の成立などについて論じている。日本歴史の起点をどこにもとめるべきか。いかなる社会に置くべきかが、この種のテーマを扱うとき問題になるという。

ある者は、天孫降臨や神武東征をもって、あるいは農業共產体の社会とか農奴社会をもって出発点とする。著者によると、日本歴史の領域において——原始社会の出発点に、おとぎばなし（子どもに聞かせる昔話）が支配しているが、一定の社会的発展の法則、統一的な容相があきらかにされているという。

なぜなら、人間はあたえられた環境にに応じて、それぞれ特異な社会を形成し、それぞれ特異な発展をとげたにちがいないからである。

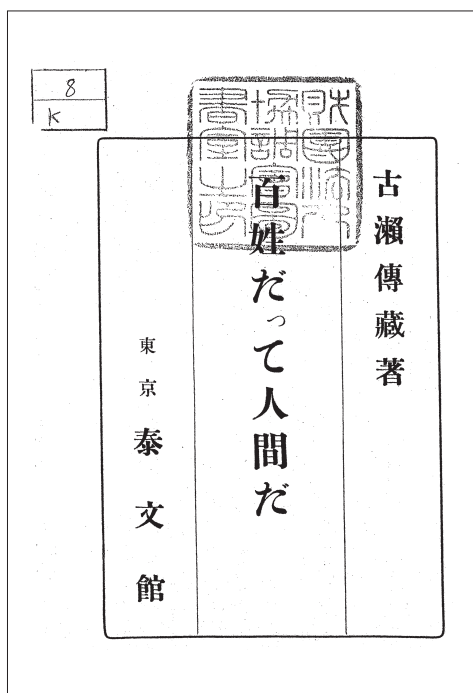
内容の概略は——第一章 技術の発展 第一節 緒言 第二節 蒙昧時代即ちヤマト族移住時代 第三節から第五節まで 野蛮時代——石器時代 穀物の栽培 鉄器時代 第二章 家族制度の発展過程 第一節 緒言 第二節 紀^き記を通じて見たる日本氏族制度の原始的形態 第三節 紀に現はれたる氏族制度の体制及び機能 第三章 大化の改新の諸問題 第四章 アジア的・古代的・封建的及び近代ブルジョアの生産諸方法——その日本史への適用について——である。

得能文^{とくのうみ}と高階順治の共著『高等教育哲学概説』（昭和7・3）は、高等学校や師範学校用の“哲学概論”の参考書として編纂されたものである。とくにはじめて哲学を学ぶ者のために、哲学のすべての面貌を示すためにとくべつ考慮をなしたという。

内容の概略は——緒論 第一章 哲学的精神 第二章 哲学の概念 第三章 哲学の方法 第四章 哲学と科学・芸術・宗教 第五章 哲学の力 本論 第一編 知識の問題——認識論 第二編 実体の問題——形而上学 第三編 人生の問題——価値論——である。

“哲学”とはなにか。著者によると、哲学とは、これこれしかじかのものである、と指摘できないという。疑うこと、何かを問うことが哲学であるらしい。うたがって問うところに智慧や求知心の源泉がある。

「第六章 社会」の第八十六節は、「社会学の問題」という項目である。この中で“社会学の意義”について説いている。——人は社会を離れて



古瀬伝蔵著『百姓だって人間だ』。
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

は生存しえない、といい、人の生活は社会関係においてのみはじめて可能である。

それでは、“社会学”とは、いったいかなる学問か。それは社会の本質や発達を学的に研究するものだという。その内容については、いろいろな説があるが、社会学をもって“社会の総合的一般科学”とし、“社会現象の渾一的（とけあい一つになる）全体的研究”をその任務とする、というものもある。

この種の社会学を主張したのは、コント、スペンサー、マルクスである。いっさいの社会現象、すべての文化活動を全体的、包括的に研究するものなりとする（三八九頁）。

古瀬伝蔵の『百姓だって人間だ』（昭和7・3）は、本のタイトルからして、人の注意をひいてやまぬものである。著者はどんな経歴のひとかつまびらかにしないが、信州の生まれであり、農政学をまなんだ人のようである。本書は、人間であって人間扱いされぬ三千万農民の意気（概）を天下にしめたものという（「自序」）。

いふなれば、農民愛のために、血と涙でねりあげた爆弾を社会にたいして投げつけたものである。おなじ人間であっても、百姓であるがゆえに人間扱いしない不合理な社会制度と経済組織を喝破（^{かつぱ}）したものである。

著者によると、いずれの社会にもめぐまれない暮らし方をし、不遇のものは多いが、百姓ほどみじめなものはいないという。炎天下、のら仕事に精をだし、わが家に帰ると、牛馬と同様に土間のうえに荒むしを敷いて寝る。麦めしをくらい、塩からいみそしるをすすり、青菜漬、沢庵漬、梅干をたべ、まれに塩鮭やイワシが食膳にあがるのがごちそうである。

しかし、最近では、百姓の生活が向上し、牛肉をたべるし、ビールやサイダーをのみ、洋服を着、中折れ帽をかぶり、自転車にのるものもあるという。

百姓はなぜ不利だとおもわれる農業をやめられないのか。それは日本

人の国民性にかかわりがある。日本人は郷里をすて、他郷に移ることはなかなかできないのである。日本人は愛郷心のつよい国民である。郷里をすて去ることができず、つい不利と知りつつも百姓家業をつづけるのである。また都会に出て、他に転業しようにも、てきとうな仕事はなかなかみつからないのである。

内容の概略は——一 百姓だって人間だ 二 娯楽に恵れぬ農民 三 農村に生れた金の行衛 四 健在なりやノ農村青年諸君 五 勿事主義臭いものには蓋をせよ 六 農民の進む可き目標を定めよ 七 田園都市の建設費は農村の破壊 八 農民運動と指導者 九 農業教育の改造 十 農学及農業は益々進歩して農村及農家は愈々疲弊する 以下、二十二まであるが省略する——である。

『結婚社会学』（昭和7・3）の著者・木村松代はいかなる人か、そのくわしい経歴については不明であるが、津田女子英学塾の出身であろうか。昭和六年（一九三一）、同女子大学の最上級クラスで社会学を講じていたという。講義のなかで、友愛結婚（*companionate marriage*）——産制、離婚を是認する）や産児制限の問題について話したことが学校当局の忌諱にふれ退職を余儀なくされた。学校当局をして彼女を退職に追いこんだものは、一通の無記名の投書であった。

その要旨は、木村講師は社会学の時間に、友愛結婚や産児制限の話をし、無垢な娘を墮落させているので、塾長は断固たる処置に出てもらいたい、というものであった。その匿名の手紙をうけた学校当局は大いに狼狽し、教室においてそのような問題を論ずることは、学校の主義に反する、ということによって彼女に退職を強要した。

戦前の男尊女卑の日本社会では、女性性は性に関する事柄について、ほとんど無知にさせられ、若い男女の交際はうたがいの眼をもってみられていた。結婚するさいも、親の考え、親の意向がつよく、「強制的結婚」がいっぱいであった。いまとちがって、恋愛結婚はめずらしかった。

本書は、旧来の性道徳に代わるあたらしい道徳を樹立するために、いかに世界の進歩的科学家や思想家が努力しているかを紹介したものである。

内容の概略は——第一章 結婚生活の新形態 第二章 米国家族制度の歴史 第三章 避妊結婚の動機 第四章 産児制限問題 第五章 離婚問題 第六章 青春期の性問題 第七章 性教育の改造 第八章 性生活に対する社会的干渉 第九章 理想的結婚制度への道——である。

戦前の日本女性性は、古い考えやしきたりの中で、伝統の性道徳にしばらく、ひたすら忍従を強いられ、盲目的にこれに服従していた。しかし、著者が望んだことは、女性も男性と同等の地位をもとめ、「押しつけ結婚」にたいしては、自決権をもつことであった。

河合栄治郎と蠟山政道ろうやま まさみちの合著である『学生思想問題』（昭和7・5）は、両人が昭和六年（一九三一）以来、文部省のなかに設けられた「学生

思想問題調査会」に、私案のかたちで提出した意見が中心となっている。ところで「学生思想問題」とはなんのことか。それはいうなれば、左傾思想（マルクス思想）を指している。

マルクス思想は、四つの内容に分類できるという。

第一 唯物弁証法の哲学。

第二 余剰価値説を中心とする、資本主義を解剖した経済思想。

第三 資本主義を変革し、これに代るべきものを社会主義にもとめようとする思想。

第四 社会主義を実現するため、暴力革命主義と無産者独裁主義をもつ政治思想。

学生思想問題は、左翼思想だけに限ったことではなく、右翼思想もふくまれる。しかし、思想かぶれの学生の大多数は、マルクス主義者である。著者によると、いわゆる「マルクス学生」になるには、頭脳と人格が必要だという。にぶい、愚鈍な学生は、マルクス学生にはなれないのである。いったいにマルクス学生は、優秀なのである。

こういった学生は、いかなる家庭に生まれ、いかなる経緯をへて左翼に走ったのであろうか。

いえることは、かれらの大半は中産階級以上の家庭に生まれ育っていることである。そして親からの仕送りにより、明日のパンのことを考えることなしに生活していることである。それは農民や店員や職工が左傾化するのと同じに考えてはならないのである。学生は、こういった人びとりもはるかにめぐまれた境遇にあり、生活に窮乏していない。かれらは直接体験から、実生活の問題にふれていない。

思想問題は、社会が存在する以上、その社会のいかなる成員についても発生するものである。すべての社会層から発生する可能性がある。昭和のこの時期、専門学校や大学でまなぶ者の数は、およそ十三万三七〇名ほどである。

かれらがマルクス学生になってゆく経緯だが、いくつか経路がある。まず学校において、教師の講義や学友の話から影響をうける。また学外において、新聞・雑誌や書物から影響をうけたり、左傾団体から勧誘をうけてなるケースもあるという。

内容の概略は——序 第一章から第四章まで 学生思想問題の性質、観点、原因、対策 附表 附録——である。

土田杏村の『現代世相論』（昭和7・6）は、現下の世相にたいする私見と表情を告白したものである（「序」）。著者はいう。朝、新聞をひらいてみる。そのとき感じるものはないか。それは世の中が安定している感じがしないという印象である。またたえず事件がおこっていることである。おまけに世の中は、不景気である。暗くてうっとうしい大衆生活、左右両翼が対立する運動、社会そのものは混沌たる状態に陥っている。なかでもいちばん深刻なのは、不景気を背景とした社会生活の窮乏である。社会不安や不況、生活難の解決を、これまで国民は政治によって解決しようとおもい、その改革を政治家にゆだねてきたが、なんの効果もなく、かえって不信と失望だけがつのっていった。

やがて議会主義を否定する思想が芽ばえてくる。議会を否認する思想は——ファッショ思想、帝国主義的独裁制の思想である。何よりもおそろしい傾向は、国民大衆のなかに生まれてきた「強烈な改革的気運」である。それは、もう議会主義ではだめだ、もっと積極的な手段によって日本を改造せねばならぬ、といった過激論である。

内容の概略は——第一章 現今世相の特性 第二章 世界の三大ブロック 第三章 資本主義の反省 第四章 購売力をどうしてつくるか 第五章 事業は怠業する 第六章 労働者と事業家と金融家 第七章 世界的不景気は何故起ったか 第八章 価値動揺と思想動揺 第九章 政治的世相の解剖 第十章 ファッショ傾向の背景 附録——である。

松浦要訳『社会連帯責任主義』（昭和7・6）は、シャルル・ジッド（一八四七―一九三二、フランスの経済学者、パリ大学教授）とレオン・ブルジョア（一八五一―一九二五、フランスの政治家）らの論文を何篇か選択し、それらを反訳したものである。

「連帯責任」ということばは、本邦において未知のものではないが、それほどよく知られたことばではない。もともとこの語は、法律語であるという。数名の債務者が、それぞれ全体の責任を負うばあい、債務者に負けせられた義務をいう。しかし、この語は数年来、ひとつのあたらしい意味をもってきた。それは同胞にたいして守らねばならぬ一つの義務感をあらわす。その義務は、ある人びとには社会がこれを命じる社会的義務の性質をよそおう。労働者においては、「結合」もしくは「組合」を意味する。

また連帯責任は、個人がこうむるすべての損害に対して、救済の発見を社会に強いるものという。

内容の概略は——ジッド連帯責任主義 第一節 連帯責任主義発達の諸原因 第二節 連帯責任主義の問題 第三節 連帯責任主義学説の実際の適用 第四節 連帯責任主義の批評 ジッド経済的連帯責任 ブルジョア連帯責任の観念とその社会的結果——である。

猪狩又蔵の『日本皇室論』（昭和7・6）は、国内の思想が混雑しているときにあたり、人心を匡_たし、国体の正しさを世間に認識させ、天皇

の徳を顕揚^{けんやう}させる意図をもって著わされたものである。

著者によると、世の中がしだいに変わるにつれて、いろいろな思想が国内にいつてきて、人の頭を混乱させたという。中には皇室の尊厳に疑問をもつものさえいる現状にかんがみ、座視できなくなった。著者は皇室主義者である。

内容の概略は——第一章 民族精神概説 大和民族の起源——神話と民族性 第一節 敬神 第二節 崇祖 第三節 純潔 第四節 現世主義
第五節 尚武と優美 第二章 民族精神の具体化 第三章 神勅 第四章 三種の神器 第五章 血統と道徳 第六章 歴朝の聖徳 第七章
明治天皇御製 第八章 外来諸宗教と民族精神 第九章 明治以後に於ける君と臣 第十章 欧米新思想と獨露諸帝国 第十一章 我国と欧米新
思想 第十二章 君主の責任 第十三章 国家及び政治の中心たる皇室 第十四章 道徳の中心たる皇室 第十五章 結論——である。

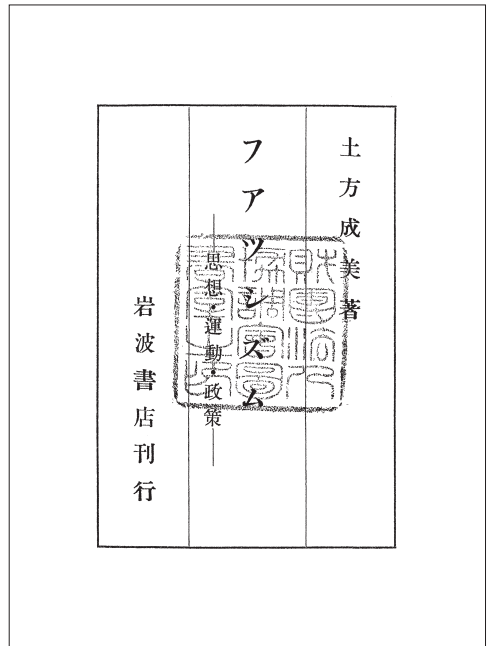
著者によると、日本人が世界にむかって誇りうるものは何かといえ、*“万世一系の天皇を奉戴^{ほうたい}していることだ*という。そして皇紀二千六百年のわが日本は、地上に二つとない国だという。日本に特有の美とはなにか。それは*“国体の美”*だという。国体の美とは何かといえ、万世一系の皇室をいただいていることである。

浅野研真の『社会を診断する「性と犯罪と」社会福利』（昭和7・6）は、病める社会の病状を判断し、その病状をありのままに記述し、新しい健康な社会への出発を企画したものである。仏教社会学者として令名の高い著者は、*“病める社会”*に注目し、機にのぞみ、時にふれて打診し、思索し、執筆したのが本書である。

当時は——恐慌、破綻、不安、動揺、汚職、変節、失業、貧困、飢餓、窃盗、売淫、親子心中、ガス自殺、エロ・グロ、テロ——が白昼横行する社会であった。

病める社会に手術をほどこし、病気を完全に治すのが、社会学徒に課せられた大きな責務であった。本書は、三百数十頁以上もある大著であり、数年にわたって書きためた論文からなる。内容の概略は——第一編 性の社会問題 第二編 犯罪と社会 第三編 社会福利の諸問題——である。

「第一編 性の社会問題」のなかに、*“社会現象としての婚姻”*という一章がある。このなかで著者は、婚姻の意義やその本質などにふれているが、それはいみはかることのない意見である。国語辞典の定義によると、*“婚姻”*とはふつう社会的承認をえた持続的な男女関係をいう。あるいは男女の性の結合を基礎として営む共同生活の意である。また法律によって認められた、終生の共同生活を目指す男女の結合関係のことである。



土方成美著『ファッシズム—思想・運動・政策』。

〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

しかし、婚姻を社会学的に解釈したとき、人間の欲望や醜さがはっきり表に出てくるのである。著者のみるところ、婚姻とは性欲を背景とした男女のむすびつきであり、それは性交を中心とした男女関係のすべての形態を意味する。そして婚姻の本質とはなにか。

婚姻の原因（本質）は、性欲であるとする、その結果は、出産を通じての家族である。

桑木厳翼（くわきげんよく）（二八七四～一九四六、明治から昭和期の哲学者）の『現代哲学思潮』（昭和7・8）は、改造文庫ちゅうの一冊である。本書に収録されている記事の大部分は、かつて講義録に掲載したものであり、今回それを簡約した。前半部はみずから筆をとって文をなしたが、後半は口授筆記であると

いう（「序」）。

本書は文庫本といえども四百数十頁以上もある大著である。内容の概略は——序説 第二編 科学的哲学 第二編 形而上学派 第三編 批評的哲学——である。

哲学とはなにか。その意義と問題について、著者はこんなことをのべている。哲学とは「原理の学」だということ。さらに布衍^{ふえん}すれば、「根本原理の学」だという。哲学はその形式からみれば、根本的原理または一般的原理に関し、内容からみれば、経験の全体、あるいは価値、あるいは「我」に関する学と解することができるという。

土方成美^{ひしかたせいび}（一八九〇～一九七五）は、兵庫のひとである。昭和期の財政学者であり、東大教授をへて、国学院・中央大学教授を歴任した。『ファッシズム——思想・運動・政策』（昭和7・8）は、ファッシズムの思想、社会的背景、運動政策について論じたものだが、とくに力を注いだところは経済政策であったようだ。

ファッシズムに関する書物はすくなしとしないが、従来資料としてドイツや英米の文献を用いる傾向がつよかった。しかし、著者はなるべく反対論をふくめてイタリアのものをういたという。内容の概略は—— 第一編 ファッシズム運動の社会的背景 第二編 ファッシズムの運動 第三

編 ファシズムの思想体系 第四編 ファシスタ国家の政治経済組織 附言——である。

“ファシズム”というのは、せまい意味とひろい意味があり、狭義においてはイタリアのムッソリーニの統率するファシスタ党の全体主義的な思想および運動、広義においては、全世界のファシスト的な思想や政治形態をさす。

とまれ、“ファシズム”は、当時の問題であった。またの名を“国家社会主義”というファシズムは、国家主義——ローマをもって、ラテン文化の中心たらしめんとする帝国主義的傾向をもつ。ファシズムの経済制度は、いわば資本主義的統制経済である。労働や経済統制の問題を、共同組合の委員会の権限としたことは、ファシズムの大きな革新とされる。しかし、それによって労働者や一般大衆の暮らしむきがよくなったかという、けっして生活状態は向上していないのである。

著者は、ファシズム体制の永続性に懐疑的であり、そのうごきを興味をもって見守ろうとしている。

山本三吾訳『モル古代社会』（昭和7・10）は、アメリカの民族学者ルイス・ヘンリー・モーガン（一八一八—八二一）の名著 *Ancient Society*, 1877 を反訳したものである。が、本書はその下巻である。訳者がモーガンの『古代社会』を日本語に移植しようとおもったのは、最近日本において古代社会史にたいする関心が高まりつつあるからとしている。

著者は、もともと弁護士であり、州議会議員、上院議員として政界で活躍した。やがてインディアン文化に関心をもち、イロクオイ族^{（イロクオイ）}の養子となって共同生活をはじめてから、その社会組織や人類の発達史に興味をもつようになっていった。本書は原始社会の民族的、社会的形態、性を基礎とする社会の組織、イロクオイ族の社会、古代ギリシャの氏族社会などについて言及している。モーガンの学説は、マルクスやエンゲルスによって採用され、エンゲルスの『家族、私有財産および国家の起源』に影響をあたえた。

内容の概略は——訳者はしがき 原著者序文 第一編 発明及び発達を通じての知の発達 第一章 種族的諸時代 第二章 生存上の諸技術 第三章 人類の進歩率 第二編 政府観念の発達 第一章 性を基礎とする社会の組織 第二章 イロクオイ氏族 第三章 イロクオイ胞族 第八章から第十章までは ギリシャの氏族、部族、国民、政治的社会制度——である。

東洋経済新報社編の『日本戦時経済の全貌』（昭和7・10）は、昭和六年（一九三二）の満州事変や翌年一月におこった第一次上海事変のあとに起りうる非常事件、もしくは武力衝突（戦争）の結果予想される国内経済の諸局面の情況についてのべたものである。

荒木貞夫陸相（一八七七—一九六六、のちA級戦犯）は、昭和七年（一九三二）四月、大阪府における「国本社」（右翼団体）の講演会におい

て、つぎのように語った。

満州、上海両事変が解決したとて、世上いろいろ建設方面のことが叫ばれているが、事實は樂觀をゆるさない。まずわれわれは、満州を再び禍乱の巷とすることは堪へられない。故に、満蒙を乱すものは、敢然起つて排斥しなければならぬ。

(国際) 連盟がもし横車を押すなら、「連盟は世界の平和を乱すのですか」と反問すればよい。(中略) ロシアは北満国境に四個師団を増派し、タンク、飛行機をどしどし輸送している。われわれは国本の大道にもとずき、東洋平和維持の責任者となつて、樂土建設に努めねばならぬ。日本は今後二、三年は、非常時に際會するものと大なる覚悟をもつてもらいたい、と。荒木は、油断せずに気をひきしめよ、と警告しているのである。すなわち、今後の情況によつては、日本が重大な國際危局に直面することもあることを國民に覚悟させたものである。

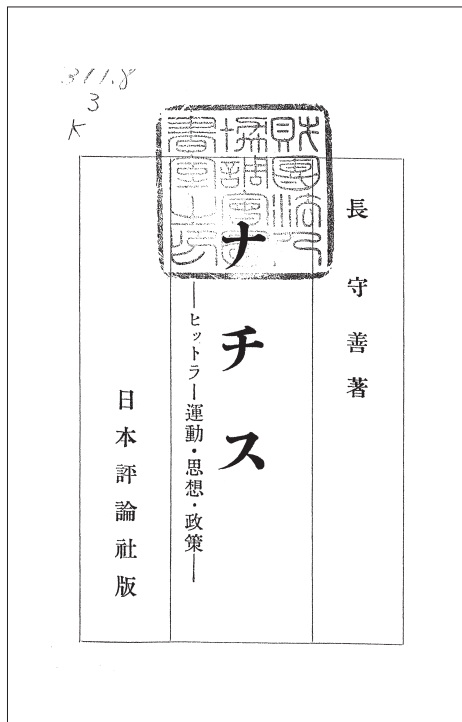
これを經濟の側面からいうと、日本國民はいつでも「平時經濟」から「戰時經濟」に転じうることがあることを、覚悟しとけということである。とくに「戰爭」は、戰時經濟を組織する。それは戰爭を準備する過程において組織される。國家總動員ともなれば、人と金と軍需品を短期間のうちに集めねばならない。

國家總動員とは――

- 一 陸・海軍の動員。
- 二 軍需工場の政治の統制下におき、生産を統轄する。
- 三 國民の消費をさだめる。
- 四 水・陸の交通を政府の手にうつす。
- 五 國民に労働を強制する。
- 六 財政、金融、教育などを規制する。

要するに戦争遂行のために、国内の人的、物的資源を統制、運用することを目的とすることである。

わが国でこれが法的に制定されたのは、昭和十三年（一九三八）であり、昭和二十年（一九四五）に廃止された。



長守善著『ナチス—ヒトラー運動・思想・政策』。
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

内容の概略は——第一章 戦争と国家総動員計画 第二章 我国軍需品工業の状態 第三章 我国官営事業の解剖 第四章 戦時財政の構成
第五章 戦時金融政策の動向 附録——である。

長守善の『ナチス—ヒトラー運動・思想・政策』（昭和8・4）は、ドイツにおいて展開している国民社会主義運動と政策綱領などを分析し、研究したものである。

著者によると、資本主義が多くの欠陥をふくんでいることに異論はない、という。しかし、その欠陥ゆえに、一つの階級（プロレタリア）だけの利益を代表する制度に、左担（味方）することはできないという。

ドイツはその特殊な国状、選挙制度の結果、数多の政党を生み、その政党間の対立がある、という。思想的には極左から極右まであって、その間には

社会民主党。

カトリック中央党（宗教色が濃厚）。

人民党（重工業者を背景とする）。

国権人民党（資本家、大地主を背景とする）。

など二十ちかい政党があった。

ヒトラーが率いるナチスは政党として大躍進をとげ、ドイツ連邦議会において第一党の地位を占めるに至った。

ヒトラー（一八八九—一九四五）は、組閣早々、四ヵ年計画を発表し、その政策をあきらかにした。すなわち、農民や失業者を救済することであり、何よりも失業者を一掃することがナチスの最大目標であった。

内容の概略は——第一章 社会民主主義の破綻 第二章 国民社会主義運動 第三章 国民社会主義の思想体系 第四章 ナチスの政治理論
第五章 ナチスの経済政策理論 第六章 国民社会主義とファシズム——である。

大島豊の『現代哲学史』（昭和8・4）は、過去百年間における、欧米哲学の発達と、その動向を明らかにしたものである。著者によると、これまでに発表された現代哲学思想についての多くの著述は、さまざまの哲学体系を史的連続として解説するだけであり、文化を形成する思想の継続的発達として論述しなかったという。著者が本書を執筆した動機の一つは、この点にある。

内容の概略は——第一講 現代ドイツ哲学の発達——フィヒナーよりハイデッガー迄 第二講 現代フランス哲学の主流——メーヌ・ドゥ・ピランよりル・ロア迄 第三講 現代英国哲学の伝統——トーマス・リードよりサムエル・アレキサンダー迄 第四講 アメリカ哲学の勃興——コンコード学派より批判的实在論迄——である。

加田哲二（一八九五—一九六四）は、昭和期の経済学者、社会学者である。慶応義塾の理財科にまなび、のち母校の教授や日大教授などを歴任した。同人の『明治初期社会思想の研究』（昭和8・5）は、明治維新から明治二十年代までの「日本社会思想の研究」を目的として編述したものである。本書は二部構成になっていて、「概観篇」と「研究篇」にわかれる。

著者の研究分野は、近代日本の社会である。維新以来、日本は西洋社会の水準に達しようと、外国文明の輸入にいそがしく、社会学ひとつ例にとっても、また法律学・経済学・政治学にしてもただ輸入するだけで、西洋の科学を用いての日本研究をおこなわなかった。

著者によると、いまの日本は、世界における日本である、という。ゆえにわが国は、世界の一環として研究される必要があるという。

内容の概略は——第一 明治初期社会思想概観篇 第二 明治初期の思想家 明治初期社会思想研究篇——である。

著者いわく。現代の日本社会思想をかたるものは、明治維新にまでさかのぼらねばならない、と。「明治維新」とは、いかなる意味をもつものなのか。政治的現象としては、新しい国家形態が生まれ、徳川幕府によって代表される「集権的封建国家」が消え、代わって天皇を中心とする「絶対主義の国家」に移行したことである。と同時に「欧化時代」の到来をみることになり、封建的残存物が打破され、資本主義制が確立した。

日本人の目は、ことごとく西洋にむいた。旧来の漢学・国学・仏教などは弊履（へいり）（古いはきもの）とおなじく、顧りみられなくなり、日本の思想界も外来思想の占領するところとなった。この時代の西洋思想は、およそ四つに分類できるといふ。すなわち、——

外来思想

英国功利思想 (ミル、バウランド)	………	福沢諭吉
仏国自由主義 (モンテスキュー、ルッソ)	………	中江兆民
獨逸国家主義 (ビデルマン、シュタイン)	………	加藤弘之
米国キリスト教的博愛主義 (ダナリスト)	………	新島襄

黒川純一訳『国体学』（昭和8・5）は、ドイツの社会学者レオポルト・フォン・ウィーゼ（一八七六―一九六九、ハノーファー工業大学、ケルン大学で教鞭をとる。ジンメル形式社会学の推進者）が著わした「一般社会学、第二部 形像学」*Allgemeine Soziologie, Teil II, Gebildelehre*, 1929を反訳したものである。邦訳名を「国体学」としたのは、「形像（Gebilde）」といった語が一般読者になじみがないと思われたので、便宜上意識したにすぎないという。

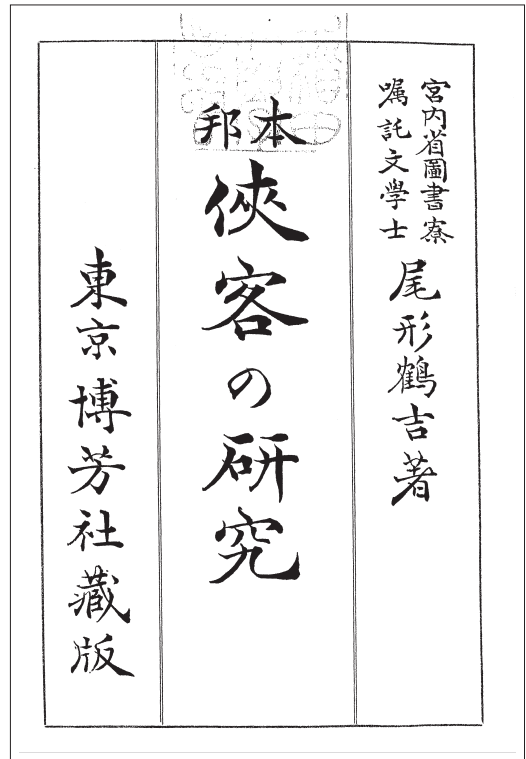
ジンメルが逝ったのち、形式社会学の推進者として活躍したのはウィーゼであるが、同人はまた「関係学」（「関係社会学」*Beziehungslehre*）の提唱者としても知られている。ウィーゼによると、理論社会学の対象とするところは「社会的者（*das Soziale*）」である。かれによると、「社会」と呼ばれるような実体はどこにも存在しないのである。

在るものは、一箇の合成的な出来事——社会的もしくは人間間的事象——人間から人間への影響——社会過程と称すべきものがそれである。ウィーゼによると、社会学とはなにかというと、「社会過程」（*soziale Prozesse*）に関する学であるという。

内容の概略は——訳者序 著者序言 第一章 序論 関係学と形像学 第二章 諸社会的形像の体系 第三章 人間と社会的形像 第四章 群集 第五章 集団 第六章 抽象的集合体一般 第七章 国家 教会 第八章 社会的形像間の諸関係——である。

林癸未夫の『国家社会主義論策』（昭和8・6）は、著者が先に公にした『国家社会主義原理』の姉妹篇であるという。本書に収めた諸篇は、諸雑誌に発表したものであり、今回本書に収載するにあたり添削をくわえたという。

これまでの日本の社会主義理論は、無産階級を中心とするものであった。無産階級の利益と解放のために、社会主義が必要である、と主張するものであった。しかし、翻って考えてみると、社会主義によって利益をうけるのは、無産階級だけだとすると、他の国民はどうなるのか。かれらのことを顧慮しなくてもよいのか。



尾形鶴吉著『本邦 俠客の研究』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

著者によると、わが国の政治学者や社会思想家のなかには、「西洋崇拜患者」がいっぱいいるという。かれらは西洋の新奇な学説をみると、それに飛びつき、轻信し、それを請け売りし、いっぱいの学者づらをして、権威ぶった顔をしている。そしてときに個人主義的、階級主義的国家論などをふいちようするのである。著者の説く「国家社会主義」とは、どのようなものか。国家というものは、本来国民から成る社会である。だから国家社会主義とは、国民が国民のためにおこなう社会主義——国家が国家のためにおこなうところの社会主義だという。

内容の概略は——国家社会主義の国家観 第二章 国家社会主義は社会民主主義及共産主義と如何に異なるか 第三章 国家社会

主義と私有財産制度 第四章 国家社会主義的統制経済と資本主義的統制

第五章 国家社会主義と独創力 第六章 国家社会主義運動の進展

第七章 国家社会主義陣営の右翼左翼——である。

もちろん、著者は無産階級が資本主義のもとでいかに圧迫と搾取をこうむっていることを知っていた。資本主義を廃止すれば、無産階級が救われることは事実である。しかし、国家は一階級の専有物ではなく、全国民のものであるから、その国家の興隆発展を阻害するべくべつな主義は排除する必要がある。

これこそ、右翼的な観点にたった、著者の国家観であった。

宮内省図書寮の嘱託・尾形鶴吉の『本邦 俠客の研究』（昭和8・7）は、書名からしてユニークである。「俠客」とは、おとこ気のある人、義俠をたてまえとしていた人、ばくち打ちなどを意味する。かれらは江戸時代において、民衆から喧伝され、かつ讃仰されはしたが、これまで史的研究の対象とされず、等閑視されていた。

著者が俠客を研究テーマとした理由は、いまの汚濁の世相にかんがみ、さっそうたる俠客をここに投げ入れて、世の中を浄化したいと思ったか

らである。これは三百数十頁以上もある大著である。内容の概略は——緒言 第一章 俠客の概念 第二章 俠客を以て中心とする江戸時代 社会概観 第三章 俠客発生の原因 第四章 俠客に対する幕府の態度 結言——である。

本書は、俠客の発生・転化・存在などに関する幕府の態度、他方では徳川の封建的社会が崩壊してゆく過程の一端を摘出した考証史、それを正視した批判史でもあるという（「緒言」）。

ふつう俠客は、江戸時代に偶然に発生したものと考えられているが、そのはじめりはるか室町時代にまでさかのぼれそうである。封建時代は、支配するものと支配されるものと二極化できる。が、著者によると、室町時代の農工商の被支配階級のあいだに、潜流として「民権思想」の発現があったという。かれらは特権階級である武士にたいして、懷疑と反感をいだいていた。

なぜ武士は、特権階級として存在すべきものであるのか。

なぜわれわれは、驕慢なる消費階級の存在をみとめ、これを支持する必要があるのか。

こういった不合理に気づいた庶民階級（非支配者）は、にわかに硬化していった。かれらのある者は、身に兩刀をおび、胆力と意気とをもって、武士にたいして気えんを吐いた。かれらは遊俠無頼の者であり、弱い者を助け、強い者をくじく気風をもってまい進した。徳川時代になると、世人はこの種の手合いに「町奴」とか「俠客」といった名称を附した。

俠客の気魄は、封建時代だけにとどまらず、いまだに精神的実在として脈々と生きていくという。その精神を受けついでた者は、いまの「国粋団」である。明治初年、自由民権論がさかんに唱道され、政党や政治結社が組織されるようになると、俄然生まれたのは「俠客団」であった。金沢の盈進社、福岡の玄洋社などは、その主なものであった。

欧化主義の風潮のなかで、これらの団体がその旗じるしとしたのは「国粋保存」であり、日本人は日本固有の美点長所によって發達向上を期すべきと主張した。東洋の一小島国である日本が、世界に卓越し、東亜の天地に覇を唱えるにいたったのは、「大和魂」の發揮によるものと考えた。

津田左右吉の『上代日本の社会及び思想』（昭和8・9）は、『史学雑誌』や『史苑』などの雑誌に發表した論稿を増補修正したものである。したがって、書名にみられるように、上古日本の社会および思想のすべてを系統的に研究したものではないという。

内容の概略は——第一篇 書紀の書きかた及び訓みかた 第二篇 神とミコト 第三篇 大化改新の研究 第四篇 上代日本人の道德生活——である。

日本書紀は漢文でかかれているために、上代の物語がそのままに写されておらず、上代の日本人の思想が歪められている、という。その変化の経路を、主に神代紀の用語や書きかたによって考察したのが第一篇である。第二篇は、神代史における「神」と「ミコト」が、のちに混同せられてきた経路を考察したものである。

第三篇は、大化改新は政治上の制度の改変であり、世間で説かれている社会改革でないことを考察したものである。第四篇は、上代日本人の道德生活についての小研究だという。著者は道德意識の発達の経路をたずね、道德生活の實際状態を観察しようとした。

佐久間達雄の『日本古代社会史』（昭和8・11）は、史的唯物論一般というより、歴史科学の視点から執筆したものという。この種のテーマとする研究は、これまでにいくつも発表されている。

日本の古代研究はいづころからはじまったのか。それは相当ふるくからおこなわれ、六世紀の推古時代——氏族国家から律令国家へ移る過渡期——にすでに歴史の編纂がおこなわれている。日本最古の修史は、推古時代の「帝紀」「国紀」といわれる。この二つは、氏族を中心に編まれたものであり、のちに編纂された「日本書紀」は、国家を中心に編纂されたものである。

時代はくだって、平安後期には、姓氏録その他の研究が発表され、徳川初期になると、古代研究と神道研究がはじまり、明治維新以後は、古代研究は、やや科学的におこなわれはじめた。

内容の概略は——第一章 序論 第二章 東亜に於ける旧石器時代 第三章 日本人の人種的構成 第四章 日本石器時代の発展 第五章 日本神話及伝説の研究 第六章 中国文献に現はれた日本古代と紀・記 第八章 家族の発展と氏族制度 第九章 国家形態の完成——である。

「古事記」や「日本書紀」に伝えられている「日本肇国（建国）」の説話（物語）の信ぴょう性については疑わしく、それは歴史的事実として認められていない。著者によると、日本神話は、古代人の意識の反映とも考えられるが、とくに古事記や日本書紀の記述は、それらが編纂された当時の社会関係の反映と考えねばならぬという。

中沢弁次郎の『窮乏農村の再建方策』（昭和9・3）は、世界経済の動向を大観しながら、農村対策を分析批判し、将来の農村のあるべき方向をしめしたものである。当時の農村の疲弊困憊は、近代資本主義の重圧のもとに引きおこされたものであるが、農村問題は政治問題化し、それは国策遂行上の最重要問題として取りあつかわれ、さまざまな巨農（農業をただす）対策が講じられるにいたった（「序」）。

内容の概略は——序説 第一 非常時農村の全面的展望 第二 農村巨救（たすけ救う）の科学的目標 本論 第一章 農村時局巨救問題概

観 第二章 農村経済の変動と為替関係概観 第三章 農村経済統制問題概観 第四章 農村統制関係重要立法批判 第五章 米穀・米価問題概観 第六章 米穀統制問題概観 第七章 日本蚕糸(絹糸)業問題概観 第八章 農村関係最近の社会問題概観 第九章 農村教育・文化問題概観 第十章 農村再建の基本的要綱——である。

日本の農村問題は、昭和七年(一九三二)の五・一五事件を転機として、社会的、政治的な問題として再吟味されるようになり、一部の運動家もこの期を逸することなく新聞・雑誌を活用しつつ、議会に請願運動をおこした。

民政党の経済政策は、農業恐慌——農作物・生糸などの大暴落をまねき、その余波は畜産農業にまで波及して凄惨な状況をかもしだした。

窪田伝一の『世の父兄に捧ぐる赤化子弟の告白』(昭和9・5)は、著(ちよ)というよりはむしろ編(へん)にちかいものという。本書を著わしたひとは、多年新聞記者を生業(なりわい)とし、政界官界に接触し、たびたび世の名士の栄枯盛衰を目撃してきたという。そういった名望ある人は、その子弟から共産党関係者をだしたことにより、たびたび栄位要職を辞退し、社会のすみでひっそりと暮らすことを余儀なくされる場合があった。

本書は、共産主義に走った者の行動の過程と、陳述と気持の変化をつづり合わせたものである。

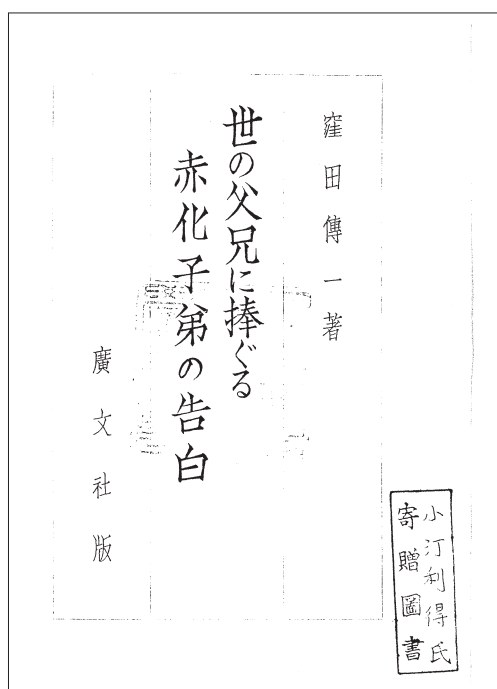
マルクスとエンゲルスの共同執筆になる『共産党宣言』は、一個の妖怪がヨーロッパを徘徊している、といった陰うつなことばではじまっている。

このあと在来のいっさいの社会の歴史は、“階級闘争の歴史”である、といった爆弾的なことばを投げつけ、各国の権力者のどぎもを抜き、かれらにたいして戦いの火ぶたを切った。

ついで、支配階級をして共産革命のまえに戦慄せしめ、万国のプロレタリアよ、団結せよ、とむすんでいる。

ロシアから渡来した“赤の思想”は、労働者や農民、一般市民のあいだに広まり、あまつさえ富裕層や華族の家族にまで侵透してきた。

内容の概略は——緒言 個々の告白



窪田伝一著『世の父兄に捧ぐる赤化子弟の告白』。
〔早稲田大学中央図書館蔵〕

華族子弟の赤化を図る……大学生
華族

郡 一郎(二十五歳)

帰りなん、いざ……………	人夫	奈良幸雄（二十八歳）
此の人間性を奈何……………	某省雇	高石喜代（二十五歳）
英雄主義の誘惑……………	学生	東山米夫（二十一歳）
再批判の要がある……………	大学生	黒木安三（二十四歳）
一度転向しながら……………	少年車掌	米木大二（十九歳）
隣室にピストルの音……………	無職 共産黨員	鹿倉二郎（二十二歳）
尊いかな肉親の愛……………	無職	西川タケ（三十三歳）
彼また陛下の赤子……………	学生	南郷源二（二十三歳）
実社会に合はぬ理論……………	大学生	深田辰郎（二十二歳）
残骸の曝らし場所……………	学校講師	小山幸太郎（二十八歳）
父の金庫から二万円を……………	女子 大学生	細江まつ（二十二歳）

附録 共産党の組織全貌 主義運動と年齢との関係 左傾運動と学校との関係 思想犯に関する参考統計 左翼用語略解——である。

第一の例——「華族子弟の赤化を図る」は、某子爵の令嗣れいしのばあいであるが、本人は学習院をへて東京帝国大学法学部に入学した。共産主義にかぶれたのは、昭和六年（一九三二）十一月中旬ごろであった。学友との社会科学の研究会を通じてであった。やがて共産党を支持し、党へ出資し、じっさい的行動をとるにいたった。はじめ、二円とか三円といった金だ、だんだん高額となり、提供する金は、しまいには二十円とか五十円になった。仲間と会っては、農村問題、戦争問題、ファシズム問題、党の任務、プチブル（中間層）の問題などについて議論した。

はじめて逮捕されたのは、東大構内でデモをやったときであり、本郷本富士署にひっぱられた。いまは「共産党シンパ」として、未決囚として市ヶ谷刑務所に収容されている。

さいごの例——「父の金庫から二万円を」は、目白にある日本女子大学国文科の女子学生のばあいである。彼女は地方の裕福な家に生まれ、女子大で寮生活していた。月々、六十五円から七十円の仕送りがあり、なんの不自由をも感じなかった。

彼女が左傾運動をはじめたのは国文科の三年生——昭和六年（一九三二）四月のことであり、率先して学友らと相談して、「無産者政治

教程」とか「共產主義ABC」をテキストとする研究会を学内に組織したが、ほどなく学校当局の知るところとなり、同年六月解散させられた。しかし、夏休み直前には、各科にそれぞれ組織をつくり、二十五名ほどの仲間をもつまでになった。

同年十月はじめ、八田という党幹部から資金調達を依頼され、仲間とともに資金活動に入り、翌昭和七年一月には、およそ二百四十円ほどの金を日本共産党に提供した。かくしているうちに二月中旬官憲によって逮捕され、一ヵ月ほど留置所に入れられたが、転向を条件に釈放された。

釈放後、彼女は運動から手をひく決心で杉並で下宿生活をしていると、党员的八田から連絡があり、同人からひきつづき運動をつづけるというわれ、ふたたび運動をやる決心をした。八月末、家内のすきを見て、父の金庫から株券と小切手二万円相当を盗みだすと、八田の代理人にわたした。十月下旬、党資金局で資料調査をやっていたころ、大森駅ちかくの街頭で特高によって検挙された。

当時、左傾運動は一種の時代的流行であったとはいえ、女子大学のなかにまで浸透していたのである。

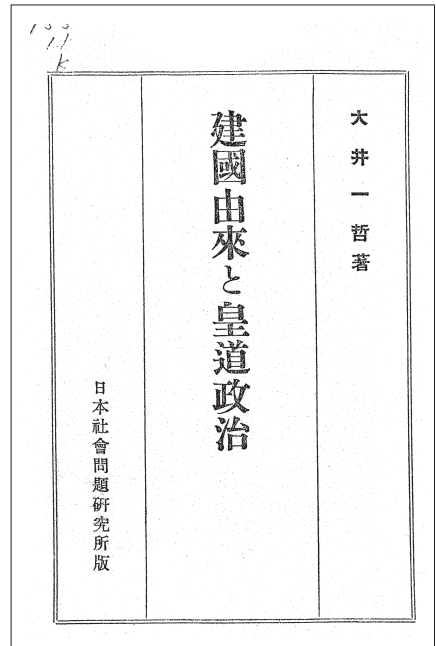
昭和三年（一九二八）か昭和八年（一九三三）までの間に、逮捕・起訴された日本共産党関係者数は、二、九三六名である。

伊藤安二訳『社会科学の方法論——道徳的諸科学の論理学について』（昭和9・5）は、ジョン・スチュアート・ミル（一八〇三―七六、イギリスの哲学者・経済学者）の論理学体系ちゅうの第六書——『道徳的諸科学の論理学について』（一八四三年）を、一九二五年版によって反訳したものである。

本書について約言することは容易ではないが、この本は一般論理学の道徳的、社会的科学の諸部門への適用についてのべたものか。ミルの社会科学方法論は、イデオロギーにおいて、個人主義を基調とし、科学的には自然科学にとどまらず、新興社会主義を彷彿させるものという（「序」）。内容の概略は——第一章 緒言 第二章 自由と必然について 第三章 人性科学の存在もしくは可能 第四章 心意の法則について 第五章 倫理学、即ち、品性形成の科学について 第六章 社会科学に関する一般的考察 第七章 社会科学に於ける化学的、即ち、実験的方法について 以下、十二章までであるが省略する——である。

白揚社編輯部訳『日本帝国主義論』（昭和10・3）は、サファロフ（不詳）が、ジョン・オーチャードの『日本の経済的發展』の「序文」として書いたものを反訳したものである。

日本帝国主義は、要約すると、軍事的、封建的帝国主義とも呼べそうである。著者によると、日本は封建的もしくは半封建的国家から、世界帝国主義戦争の結果、飛躍的な成長をとげ、第一級の帝国主義的国家となった。そして日本の資本主義の発達は、半封建的支柱に依存していると



大井一哲著『建國由來と皇道政治』。



大井一哲

説く。

内容の概略は—— 一 マルサス主義的偽造と半封建的カバール 二 半封建的支柱の上における資本主義の発展 三 日本帝国主義の発展とその矛盾 四 世界恐慌と日本帝国主義——である。

大井一哲の『建國由來と皇道政治』（昭和10・5）は、建國の起りや皇道精神を平易に説いたものである。著者は、国粹的な思想傾向をもった人のようである。政治、経済、思想界の悪化をうれいるあまり、一般国民に“国体”を指導し、“皇道”（天皇の政道）の概念をあたえる必要を感じ、本書を著わしたようである。

内容の概略は——第一章 緒論 第二章 建國由來と其の精神 第三章 政治団体と國家の治乱 第四章 皇道王道及覇道 第五章 天皇親政時代の皇道政治 第六章 天皇非親政時代の皇道政治 第七章 日本國民の尊皇心 第八章 皇道政治の真意義 第九章 東洋文明と西洋文明 第十章 結論——である。

著者によると、日本帝國六千万臣民^{しんみん}は、ひとしく山和民族である。山和民族とは、すなわち天孫民族である。日本國民は、おなじ血脈を有する同一の大家族であるという。もちろん、國民のうちには、貴賤の別、貧富の差はあるが、宗家^{そうけ}との關係は、いっさい平等であり、無差別である。皇室は、日本國民の宗家、總本家であり、われわれはその分家もしくはその末家^{まけ}であるという。一君萬民^{いっくんばんみん}、君民一如^{いむじょ}の大精神を發揮して、何も

のにも破られたことがない。

満州国はすでに皇道日本の光にてらされて、“王道楽土”を出現すべく、日にその工作をすすめている。西洋文明に心酔し、物質文明を崇拜した日本社会は、いまや混乱し、腐敗し、悪化し、深刻の度をふかめている。

山田吉彦訳『未開社会の思惟』（昭和10・7）は、フランスの哲学者レヴィ・ブルジュールが著わした *Les Fonctions mentales dans les sociétés inférieure* を反訳したものである。著者は、後年、民族社会学の領域にも足をふみ出し、未開人の思惟、原始人の心や魂、原始人の神話に関心をもつにいたった。そして著者の名を不朽なものにしたのは、民族社会学の領域における研究である。

内容の概略は——訳者序文 原著者序文 緒論 第一部 第一章 原始人の知覚とその神秘的要素 第二章 融即ゆうそくの法則 第三章 論理前の心性の作業 第二部 第四章 原始人の言語 第五章 原始人の算数 第三部 第六章 原始諸制度と論理前の心性 第七章と第八章は 原始諸制度と論理前の心性 第四部 第九章 上級型への過渡——である。

林要はやしかなめ（一八九四—一九九一）は、大正・昭和期の経済学者である。大正九年（一九二〇）大原社会問題研究所助手をへて、同十二年（一九二

三）同志社大学教授になるが、のちに大学を追われた。戦後、愛知大学、関東学院大学で教鞭をとった。

同人が著わした『猿と人間と社会』（昭和11・4）は、おもに原始共同社会の生成・発展・解体をへて、資本主義社会にいたる過程を描いたものである。同書は、『同志社論叢』に連載した稿を補正し、章節を分ったものという。

内容の概略は——第一章 問題の見とほし 第二章 人間または社会とは何か 第三章 社会法則の一般的規定 第四章 生産力の発生および発展 第五章 原始社会の一般的構造（分業と協業） 第六章 原始共同社会における矛盾の発展 第七章 家族の発生および発展 第八章 エクソガミー（族外婚——引用者）とトーテムズム（トーテム崇拜） 第九章 氏族制度 第十章 言語発生過程——である。

著者いわく。わからない世の中である、と。このわからない世の中を、わからないものと考えないのが“学者”である、と。いま大勢の人間が飢えているのに、他方では多量の飯米が倉庫の奥で昼寝しているという。“米”はいったい何のためにあるのか。どうも米は食うためにあるのではないらしい。こんにちの資本主義社会においては、米は食うために生産されるのではなく、利潤獲得のためにつくられるのである（「問題の見とほし」）。

李清源イ・チヨンウォンの『朝鮮社会史読本』（昭和11・4）は、三千年の歴史を有する朝鮮の経済関係の変遷を科学的な通史として描いたものである。朝鮮の

三千年の歴史は、農民の苦悩そのものの歴史であった。過去の支配者は、諸外国の重圧が加われば加わるほど——すなわち、政府の力が弱まればよわまるほど、社会の底辺にいる農民に、さいごの重圧を加えた。

いまの重圧は性格を異にしている、世界恐慌にともなう重圧である。朝鮮は、中国と日本の中間にあり、複雑な外交関係が生じ、直接間接の重圧や戦争がかさなり、農民はいっそう苦しんだ。

内容の概略は——著者序文 第一編 朝鮮の原始社会の経済及び文化 第二章 原始共产体の解体過程 第二編 奴隷社会の開始と発展 第三章 階級社会の起源と国家 第四章 三国争覇時代 第五章 統一後の新羅 第六章 高麗時代 第七章 奴隷社会の構成状態 第三編 封建社会としての李朝 第八章 封建制度の確立 第九章 李朝の社会と経済 第十章 封建社会の終末 第四編 資本主義の侵入 第十一章 資本主義の侵入に伴ふ社会経済状態 附録——である。

朝鮮人は、いつごろから朝鮮に住むようになったのか。この問にたいする答は、はっきりしていないようだ。しかし、朝鮮全土に石器時代の遺物や遺跡が発見されていることから、石器時代から人類が生活していたと考えられている。そして朝鮮人の基礎は、殷および周のはじめに、匈奴（蒙古族）が移動した結果であり、その後先住民や漢人との混血をへて、朝鮮人の原形ができたと考えられている。

朝鮮における封建的国家は、李朝（李氏朝鮮——朝鮮統一王朝——一三九二年～一九一〇年）において確立したという。このような国家は、封建的土地所有者が、政治権力者として登場したときに成立する。李朝の身分制度は、首長である李氏が存在し、その下には左記のような人びとがいた。

両班（李朝の事実上の主人）——中人（商人的身分）または佃夫——七般公賤（身分以下の身分——すなわち、妓生、内人、吏族、驛卒、牢令婢、有罪逃亡者）と八般私賤——僧侶、令入、才人、巫女、捨堂、舉史、白丁、鞋匠。

瓜生信夫と直井武夫の共訳『マルクス・エンゲルス・マルクス主義』（昭和11・5）は、ウラジミール・イリイチ（レーニンのこと）が執筆した論文の幾篇かをえらんで反訳したものである。内容の概略は——訳者例言 序 カール・マルクス フリードリッヒ・エンゲルス マルクス主義の三つの源泉と三つの構成部分 マルクス主義と修正主義 ヨーロッパ労働運動における意見の相違 マルクスとエンゲルスの往復書簡 マル

クス主義の文献目録——である。

『獨逸大観』(Deutschland ein Überblick, 1936) [昭和11・5]は、新興ドイツのあるがままの姿を叙述したものという。最近ドイツは、国民生活が大変革をとげ、さらに同国の国際的地位は驚異的躍進を上げているという。

内容の概略は——第一篇 総論 第二篇 新国家の誕生 第三篇 党と国家 第四篇 内政 第五編 外交 第六篇 日独関係——である。

『新興ドイツ』といった名称で思いだされるのは、国民社会主義的ドイツ労働者党(ナチス)を創立したアドルフ・ヒトラー(一八八九―一九四五)である。ヒトラーは、長いあいだの奮闘と熱のこもった演説により、国民の迷夢^{めむ}をさまし、選挙民を味方にひき入れて、合法的に政権を手に入れた。そしてわずか一年ほどの間に、国家統一と民族的団結をなしとげ、国民精神をふるいおこして、『^{フオルクスゲマインシャフト}ドイツ民族共存体』を建設した。

河上肇の『マルクス主義の哲学的基礎』(昭和11・5)は、昭和四年(一九二九)十二月に刊行した『マルクス主義経済学の基礎理論』(改造社の『経済学全集』第八巻に収録)の復刻である。が、下篇の一部を割愛したという。

内容の概略は——第一章 唯物論 第二章 弁証法 第三章 史的唯物論(唯物史観)——である。

宇宙の本質は物質であると考える唯物論は、被圧迫階級の哲学であり、かれらが支配階級と抗争するときの精神的武器である。そして著者によると、支配階級は、生産諸関係を代表し、被圧迫階級は生産諸力を代表している。生産諸関係と生産諸力とのあいだの矛盾衝突は、階級闘争にはかならないという。

マルクス主義経済学は、その哲学的基礎をはなれては、これを正しく理解するのがむずかしいという。第一章では、唯物論一般についてのべ、第二章においては、弁証法的唯物論とはどのようなものか、その特徴を論じたという。第三章では、弁証法的唯物論の人間社会への適用としての史的唯物論(唯物史観)について論述したという。

河合栄治郎の『社会思想家評伝』(昭和11・5)は、雑誌『経済往来』(のちの『日本評論』)のために、昭和九年(一九三四)の暮より、ヨーロッパの著名な社会思想家について連載したものをまとめて一冊としたものである。経済学とはなにか。著者によると、経済学は単にある現象と他の現象との因果関係を追求する一経験科学であるという。この因果関係からは、価値判断はけっして導びきだされないという。

ところが、社会思想の領域では、経済学とはちがって、とくに現存の社会秩序を批判するとき、当然価値判断の性質を有する。いま日本においていちばん必要なものは、現存の社会秩序にたいする明確なる批判であるという。著者が経済学者をえらばず、四名の社会思想家を評論の対象に

えらんだのは、経済学とは異なる社会思想の存在を力説するためであった。

内容の概略は——第一篇 ジェレミー・ベンサム 第二篇 ジョン・スチュアート・ミル 第三篇 トーマス・ヒル・グリーン 第四篇 フェルディナンド・ラッサール 附 研究文献——である。

田辺節訳『芸術と社会生活』（昭和11・9）は、シャルル・ラロが著わした *L'Art et la Vie sociale*, Paris, Doin, 1921 を反訳したものである。著者のシャルル・ラロ Charles Lalo（一八七七—一九五三）は、フランスの西南部——ドールドーニュ県の首都ペリグーに生まれ、のちオーシュやボルテール国立高等学校の哲学教授をへて、ソルボンヌの講師となり美学などを講じた。

訳者によると、ラロの学風は、社会学的だという。フランスでは、芸術評論がさかんであるが、美学の研究はなおざりにされていたという。本書は、社会学的美学の述作である。とくに本書が取りあつかっているものは、芸術以外の社会事実である——家庭や職業や政治や宗教などが、芸術にどんな関係をもち、どんな影響をおよぼすかを論じている。

内容の概略は——緒論 社会学的美学 第一章 芸術と職業 一 芸術に対する労働の直接的影響 二 芸術に於ける分業 第二章 芸術と社会階級 第三章 芸術と家庭 第四章 芸術と政治生活 第五章 芸術と宗教 結論 社会環境——である。

高橋一夫訳『問題『農業』とマルクス批判者』（昭和11・10）は、レーニンの論文（独訳）—— *Die Agrarfrage und die Marxkritiker* を重訳したものである。マルクス主義の農業理論と政策は、レーニンによって一つにまとめられた感があるが、本書はかれの農業理論の中心をかたちづけているという（「序にかへて」）。

内容の概略は——前書 一 収穫遞減（しだいにへる）の法則 二 地代理論 三 農業に於ける機械 四 都市と農村との対立の止揚——批判者により提起される——個々の問題 五 進歩せる近代的小経営の繁栄——バアデンの例 以下、十二まで章節があるが省略する——である。ロシア型の「理想国家」とは、どのようなものか。農業問題において、マルクス主義者と反対のたちばをとる人びとより観たる「理想国」は、いろいろ矛盾をふくんでいる。すなわち——

資本家的農業体制をとっている。

農業生産の集中化が増大した。

大経営により小経営が駆逐された。

農村人口のプロレタリア化にともない、困窮が増大した。

新明正道（一八九八―一九八四、大正・昭和期の社会学者）の『ファッシズムの社会観』（昭和11・12）は、主としてイタリアのファシズムのイデオロギー、ファシズムの社会観や国家観、およびこれと関連した諸思想体系について検討したものである。著者はファシズムの運動や組織といったものには関心はなかったようである。ファシズムは、“時代の声”でもあった。が、著者は、「自分のため、また日本のために、ファシズムの科学的な検討の必要を痛感して」筆をとった、と語っている（「序言」）。

内容の概略は――第一部 イタリアのファッシズム運動 第二部 イタリアのファッシズムの社会的国家的観念 第三部 イタリアのファシズムと関連する社会的諸体系――である。

イタリアのファシズムが誕生したのは、一九一九年のことであり、ムッソリーニの“ファッシ・ディ・コムバッチメント”（戦闘団）の運動にはじまった。かれは一九二一年ローマに進軍し、政権を獲得すると、国家をファシズム（帝国主義的独裁制）的に改造し、議会を無力化して独裁者となった。ファシズムの中心的思想は、国家全体主義であった。

ファシズムは、組織と統制を声高にさげぶものであるが、これらの語が意義をもつためには、それがわれわれの生活や社会を向上させるものではなくてはならぬ、という。

国民思想に関する研究は、けっしてすくなくはないが、総体的研究となると、きわめて少ないのである。

勝俣忠幸の『日本古来の国民思想史』（昭和11・12）は、そうした欠陥をおぎなう好書である。日本古来の国民思想の変遷を、概念的なことばや抽象的な説明をさけ、具体的に叙述したのが本書であるようだ。

内容の概略は――第一章 古代日本の国民思想 第二章から第六章まで 奈良朝時代 平安朝時代 鎌倉室町時代 安土桃山時代 江戸時代の国民思想 第七章 明治時代の国民思想 第八章 大正昭和の国民思想――である。

著者がいう“国民思想”とは、どのようなものを用いるのか。狭義においては、それは日本主義を中心とする諸思想を意味するようである。広義においては、大正・昭和の時代にわが国に入ってきた世界各国の思想であり、日本国民に相当影響をあたえた思想をいうらしい。

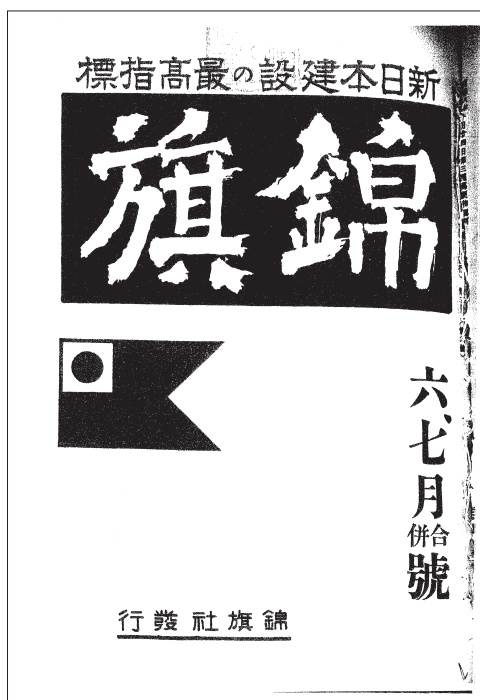
大正・昭和期は、さまざまな思想が入りみだれ、さまざまな現象をしめしたが、これをわかりやすく示すと、つぎのようになるという。

大正、昭和の国民思想									
イ	デモクラシー（民本主義）	ロ	マルキシズム	ハ	一般社会主義	ニ	オリエンタリズム（東洋主義）	ホ	日本主義
ヘ	リベラリズム（自由主義）	ト	モダニズム（近代主義）	チ	文化主義	リ	ファッショニズム		

第一次世界大戦が勃発し、世界改造の機運がうごきだすと、『デモクラシー』（当時は、『民本主義』と訳した）が台頭するようになったが、この思想は、日本の国体と相いれない点があるばかりか、反国家的な危険思想であった。

やがて一九一七年（大正六年）のロシア革命の成就是、世界を震撼させたが、それに大きな刺激をうけて『社会主義』思想がしだいに勢力をえてきた。大正の後半期は、マルクス主義のいきおいがさかんになり、中にはロシアを祖国のごとく、あるいはレーニンを神のように礼賛するものがいた。

昭和期に入ると、満州事変を契機として、『日本主義』とか日本精神主義（欧米に追随しようというのではなく、日本の国民性をはっきり自覚して、独特の文化を創造しようといった考え）の高揚の声がいたるところでおこった。こういった新たな精神活動を活発化するために、さまざまな新聞・雑誌が生まれた。



雑誌『錦旗』。〔早稲田大学中央図書館蔵〕

『日本』『帝国新報』『愛国新聞』『錦旗国民軍』『皇道新聞』『改造戦線』『興国新聞』
〔雑誌〕

『急進』『進撃』『国維』『日本社会主義』『錦旗』『日本精神』『皇道』『明倫』『日本社会科学』『命』『全日同盟ニュース』『明德論壇』『思想国防』

著者によると、昭和のこの時期、日本の思想界においては、“日本精神主義”が、一つの大きな主潮になっているという。

今里勝雄訳『都市社会進化史』（昭和12・4）は、中華民国の都市社会学者・邱致中（チウツウチン、チタンナツ）の二著（『都市社会進化史』と『都市社会学原理』）を反訳したものである。

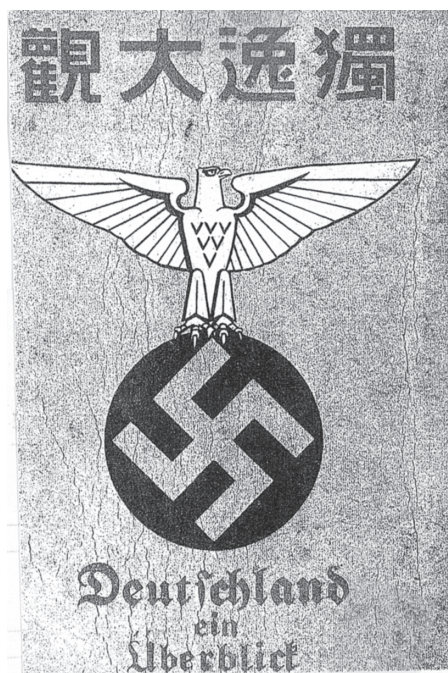
“都市社会学”（Urban Sociology）といったことばがはじめて学界に登場したのは、一九二七年に米人ベッドフォードが『都市社会学資料』（Readings in Urban Sociology）を出版してからのことであるという。

“都市”と“農村”とは、人類の社会における二大形態という。この二つの科学は、社会学から分離して、それぞれ特色ある学的領域をもっているという。内容の概略は——第一章 緒論 第二章 都市社会の制立 第三章から第五章まで 古代都市社会 中世都市社会 近代都市社会の

発展 第六章 結論——である。

“都市社会”とはなにか。それは“農村社会”と対立する生活共同体だという。都市社会は、交通が便利な、あるいは枢要な地域で商工業が経営され、かつこれによって権力組織が形成されるところである。都市社会を構成する重要な要因は、商工業である。

都市社会学と都市社会進化史は、密接な関係をもっている。都市社会進化の研究法は、材料をあつめ、古代に関するものは古城趾などの発掘をおこない、近代的なものは、報告・雑誌・著述のほか、じっさいの調査研究を実施することである。研究とは、材料にもとづく抽象的分析をおこなうことであり、叙述とは研究結果にもとづく思考であり、それを再表現した



『独逸大観』(昭和12・9)。



旧ドイツ大使館

ものという。

柳田国男編『山村生活の研究』(昭和12・6)は、日本学術振興会の補助をうけ、柳田国男の指導のもとに昭和九年(一九三四)五月より昭和十二年(一九三七)四月にいたる満三年にわたっておこなわれた、山村五十余箇所の^{きょうしやう}郷党(むらざと)生活^{せいかつ}の調査結果を報告したものである。本書は五六二頁もある大著である。二十三名の調査員が報告を寄せている。内容の概略は——一 村の起りと旧家 二 村の功労者 三 村の大事件 四 暮らしよかった時 五 家の盛衰 以下、六十五まで章節がつづくが省略する——である。

『独逸大観』(*Deutschland ein Überblick*, 1937~38)「昭和12・9」は、前年に発行した同名本の新刊であり、ドイツの新情勢を刻明に描いている。前年刊行した『独逸大観』は、新興国家としてのドイツを系統的に紹介したが、今回は経済部門の記述に力をそそぎ、かつ新情勢の紹介につとめたという(「諸言」)。

内容の概略は——第一章 総論 一 独逸第三国家の建設 二 指導者国家 三 独逸新民族観 第二章 党^{および}及国家 第三章 外交 第四章 内政 第五章 財政経済 第六章 労働政策 第七章 国防 第八章 航空及運輸 第九章 日独関係——である。

ドイツ第三帝国の建設の根底には、ドイツ国民による神聖ローマ帝国再現への理想が貫流していたようである。一方、国内には統一運動があり、それと対立していたのは封建諸侯らの自主権の確立運動であった。一九一九年（大正八年）ワイマール体制によって、ドイツに共和主義的な国家が出現したことにより、各邦における国家政府の権限が拡張した。が、国内には無数の政府、階級、群派が存在し、おたがい反目していた。

一九三三年（昭和八年）三月——合法的に政権を掌握したヒトラーは、わずか一年ほどの間に邦政府を撤廃し、国内の分裂を排除し、国家統一をなしとげたばかりか、国民の精神をふるいおこし、“ドイツ民族協団体”なるものを建設した。ヒトラーが率いる新興ドイツは、ナチ一色の“指導者国家”でもあった。

『時局と国民自覚大講演集』（昭和12・11）は、昭和十二年（一九三七）十月五日——午後六時より、東京市日比谷公会堂で開催された財団法人日本文化中央連盟が主催した第一回目の世局講演会と、同年十月十六日に大阪市中央公会堂でひらかれた第二回目の講演会の速記録を編輯採録したものである。

おもなる講演者は、この財団法人の理事（貴族院議員）や政府の要人らであった。内容の概略（演題）は——一 眼に視えざる戦線 一時局に直面して 一 武士道に就て 一 銃後の文化戦線 一 文化は戦なり 一 非常時局に際して 一 大を以て小に事ふるの心 一 支那事変と国民の覚悟——である。

「眼に視えざる戦線」と題して講演をおこなったのは法人の理事のひとり——大倉精神文化研究所長・大野邦彦である。かれの話の骨子はこうである。

——列強は日本の膨張発展をおさえようとし、共同的な工作を巧妙におこなってきた。日本を襲う世界的な波浪は、これを乗り切る必要がある。ソ連は日本を目標にして、“赤化”の思想戦線を張っているが、これをこんにちまで克服してきたのは日本精神である。いま目にみえざる思想の戦線が展開している。すなわち、日本精神と赤化思想（共産主義）・功利主義・個人主義・自由主義である。

日本精神の発揚（ふるいおこすこと）は、神にまします天皇に帰一し、命も財産もささげるといった皇運扶翼の実践となって実現される。

一連の講演をおこなった背景にあるのは、支那事変後の多事多難な日本をとりまく世局にたいして、日本民族が悲壮なる決意のもとに万難を排し、尽忠報国の国民精神を発揚し、それを世界に宣布する必要があるというものであった。要するに国民的自覚をうながすのが狙いであった。

宮西義男訳『戦争と経済総動員——工業総動員の統計的研究』（昭和13・4）は、ベルリンの景気研究所に勤務するクルト・ヘッセ博士の論著

Industrielle Mobilmachung Statistische Untersuchungen. Bearbeitet von Institut für Konjunkturforschung. Berlin, 1936 を抄訳したものである。

本書は、ドイツにおける『工業動員』に関する研究である。戦争になれば、戦闘国は物的、人的資源のすべてを動員せねばならぬことはいうまでもない。工業動員についていえば、それは需要・消費・生産などを意味し、統計の助力が不可欠となるが、戦争遂行には数字だけに引きづられないように留意することも肝要である。軍隊をひきいる將軍の精神的な指導も考慮されねばならないという。

大東亜戦争は、彼我の国力、工業力の差を度外視し、開戦にふみきり、いたずらに精神力でたたかうことを強調し、さいごに惨敗を喫した。内容の概略は——訳序 総序 工業動員に於ける統計の任務と限界 第一章 強制さる、工業動員 第二章 工業動員の根本問題 第三章 工業動員と経済機構——である。

『村落社会の研究法』（昭和13・6）は、わが国の農村社会について、各研究者が寄稿したものを編んで一書としたものである。『村落（農村）社会学』といったものは、アメリカをその発生母胎とする。わが国の大学で農村社会学がはじめて講じられたのは、昭和二年（一九二七）のことであり、東京帝国大学において那須皓（なすしろし）（一八八八—一九八四、東京帝大教授）によっておこなわれた。

池田善長は農村社会学の発達史を「日本農村社会学の発展史」において、つぎの四期にわけている。

- 一 胎生期（明治中期～末期）
- 二 発生期（大正初期～末期）
- 三 発展期（昭和初期—七年ごろまで）
- 四 建設期（最近すなわち八年ごろ以降）

この学問が、学界の注目をひくようになったのは、ここ十年ほどの間であるという。昭和のこの時期、農村社会学は学問的に整備されておらず、農村の郷土誌的、あるいは民俗学的、あるいは社会学的な調査や報告をおこなっているのが、斯学の状態であるらしい。内容の概略は——農村社会研究法論 農村社会学の諸学説と其の批判 日本農村社会学の発展史 社会集団の累積としての村落 農村社会と人口問題 農村社会に於ける部落と家農村更生運動と地域計画——である。

清水安三の『支那の人々』（昭和13・6）は、著者が二十二年のながきにわたって中国で暮らしたときの体験談を、書肆の依頼によって書きつづったものである。著者はどういう経歴の人か、はっきりしないが、北京において私立学校（「崇貞学園」）を経営するかたわら、メンソレタームの出張販売員であったという。

本書は、中国の貧しいひとびとを友とする著者の直接体験による中国人観、中国史論、中国社会観をつづったものである。本書には、章節がなく、百十三のエピソードが収録されている。

「支那人の書法」には、中国人の筆法（字の書き方）について語られている。中国人は、墨を硯でゆっくりとこすり、筆をながめ、しばらく吟味したのち、墨汁にひたすという。かれらは日本人が文字をすばやく書くのを見て驚くらしい。一方、日本人は中国人が字をかくのを見て、その辛気くささ（じれったさ）に閉口する。中国人は学校でノートをとるのがおそい。著者によると、世界中の学生のなかで、いちばんおそいのは、中国人ではないかという。そのかわり、かれらは活字のような、きれいな、そろった文字をかくという。

秋津修二訳『全体主義の原理』（昭和13・7）は、オーストリアの経済学者・社会学者であるオトマール・シュパンOtmar Spann（一八七八～一九五〇、ウィーン大学教授）が著わした『戦闘的科学』（*Kämpfende Wissenschaft*, 1934）の「社会学」と「哲学」の両部を反訳したものである。シュパンはこの二つの論文の中で、かれの全体主義の根本原理を政治・経済・社会・教育・哲学・宗教・文化の諸領域にわたって展開している（訳者序）。

またシュパンの絶対主義的学説は、オーストリアのファシズムの基礎となり、他方においてはナチスのもっとも有力な理論的根拠とされたという。内容の概略は——訳者序 第一部 社会学 第一章 個人主義と全体主義 第二章 社会哲学の根本 第三章 自然主義的社会学と観念论的社会学 第四章 全体主義教育 第五章 マックス・ウェーバーの社会学に対する批判 第二部 哲学 第一章 全体性論理学の基礎づけために 第二章 歴史の範疇としての設立及び展開 第三章 弁証法的方法と全体性的方法——である。

著者によると、全体主義は社会改革をおこなうものである。全体主義は、民族的思想（民族主義）と類似しているという。社会学や経済学上の問題も、個人主義的研究態度をもってするか、それとも全体主義的研究態度をもってするかによって決定されるという。

樺俊雄の『世界観の問題』（昭和13・7）は、「世界観の社会学」と称すべき内容のものという。著者が本書を通して主張しようとしたのは、世界観を樹立することではなかった。そうではなくて、「世界観哲学の建設」を究極の目的として書くことであった。一名それは「世界観の社会

学”とでも名づけられるという。

“世界観の社会学”とはなんのことか。その意味は、世界観を、それが形成されてきた現実の社会的存在との連関において把握せんとする研究のことらしい。そのために著者の関心をひいたものは、ドイツのいわゆる“知識社会学”（知識が社会との関係を超越して、内在的に考察してきたのに対して、社会との関連を外来的に考察する）ないしは“文化社会学”（社会を文化として研究する）である。

内容の概略は—— 一 知識社会学の課題 二 知識社会学と歴史主義 三 社会法則について 四 世界観の社会学 五 世界観の解決の問題——である。

著者によると、“世界観の社会学”と並行的に用いられる類似語として、“世界観の心理学”とか“世界観の人種学”といった名称もあるという。これらは世界観についての哲学的研究とともにふつう“世界観学”（*Weltanschauungslehre*）と呼ばれている。これは世界観についての科学的研究を意味し、“哲学”は世界観学だという。

三浦周行^{ひろゆき}の『国史上の社会問題』（昭和13・12）は、わが国の上古以来の社会組織・制度・状態・社会問題、それにたいする政策、利害得失などについて論じたものである。本書の母胎になったものは、大正五、六年ごろ、京大において講じた「日本社会史」であるとか、近年大阪において隔週一回おこなった講演の手控えである。

本書は、第一講（緒言）から第十六講まであり、さいごは結語である。第二講からは第十六講までは、上古・中古・鎌倉時代・室町時代・豊臣時代・江戸時代の各社会問題について叙述されている。

本書の中心テーマ——むかしの社会問題といまの社会問題は、どちらがうのか。現代の社会問題は、“労働問題”にとどめをさすという。国史上社会問題は、労働問題のようなものではなかった。それは大地主と中以下の地主、資産階級と無産階級、特権階級と無力階級の関係——階級間の関係であった。

樺俊雄と武田良三の共訳本『人間と社会』（昭和14・1）は、ドイツの哲学者・社会学者であるマックス・シェラー（一八七四～一九二八）の「社会的人間学」やハンガリー生まれの社会学者カール・マンハイム（一八九三～一九四七）の「知識社会学」「知識社会学の問題」など、論文三篇を反訳したものである。ことにシェラーは、晩年、人間学と形而上学の研究に力をそそいだが、惜しくも五十四歳で亡くなった。

三十年にもおよんだかれの思索生活は、人間学を思想をふかめることであり、現代のあらゆる問題を解決する鍵は、つまるところ人間の問題の

うちにあると考えたようである（「解説」）。

藤井博士全集^{第五卷 第二分冊}『マルキシズム批判』（昭和14・2）は、藤井健治郎（一八七二〜一九三一、京都帝大で倫理学や社会学を講じた）の論文七篇を収録している。内容の概略は―― 一 唯物史観の解剖と其^{その}素成分 二 唯物史観の要訣^{まよけつ}及びそれについての考察 三 唯物史観と歴史法 四 マルクス主義国家観の倫理的批判 五 マルクス主義価値論の倫理的批判 六 階級的闘争論の倫理的批判 七 唯物史観の倫理的・社会学的・心理学的批判――である。

このうち著者が説く、“マルクス主義の国家観”についてふれてみたい。

マルクス主義の国家の起源とその本質についての考えを説いたのは、エンゲルス（一八二〇〜一九五）であった。同人によると、原始時代には国家というものは存在せず、ただあったのは“社会”である。原始社会は、狩をしたり魚をとって生活している世界であった。その社会で部族とか種族に属するひとびとは、共產主義的な生活をいとなみ、私有財産をもたず、ましてや社会的の階級はなかった。

やがて人類が進歩し、牧畜・農業の時代になると、家畜や土地をもつ者ともたぬ者との差別が生じた。そして私有財産というものが現われ、地主と農業労働者――有産者と無産者――といった社会的階級が生まれた。そして多人数から成る社会集団をもって“国家”というものが形成された。

近代の国家のなかには優強階級の資本家と劣弱階級の労働者がいる。前者は搾取階級とすれば、後者は非搾取階級である。労働者階級に属するものは、政治的革命が成功するまで、世界的に一致団結して共通の敵である資本家階級の国家を打倒して、無産者の国家の樹立をめざそうとする。マルクス主義者の国家のあり方は、このようなものであった。

中山忠直の『我が日本学』（昭和14・7）は、日本人の民族性――日本人が世界でもっともすぐれた精神文化、真実の平和と正義に生きる民族であることを、合理的かつ科学的に立証しようとしたものという。著者が国粹主義者なのはいわずもがなである。

著者は、日本民族の偉大性を推賞してやまず、とくに国体と社会、神道などを客観的方法で分析し、明らかにしようとしたのが本書でもある。内容の概略は――第一篇 見地 第二篇 日本民族の科学的能力 第三篇 日本国体の特異性の基礎 第四篇 日本人の精神生活 第五篇 神道・皇室 第六篇 ユダヤと日本の関係――である。

本書は、換言すれば、日本といった特殊な国体と、その民族性にたいする科学的な考察であるという。すなわち、“日本社会学”あるいは“日

本国家学”を建設しようとしたものである。

著者によると、日本社会は雑多な民族の混血によって成っており、同型の家族制度と風俗習慣を形成し、国家という一大家族としてうちとけ、結合しているという。著者いわく。同胞よ、日本民族に内在する偉大性にめざめよ。進軍せよ、日本よ。上下心をひとつにして、大死一番の覚悟をもって立ちあがれ、と。

中村吉治の『中世社会の研究』（昭和14・11）は、中世から近世におよぶ農政や農民の問題を取りあつたものであり、いうなれば『近世初期農政史研究』である。内容の概略は―― 第一 中世の社会問題 第二 中世農民の反抗 第三 田地に神木を立てること 第四 水の分配 第五 地水分配 第六 中世農業労働の一例 第七 近世初期に於ける勸農（農業をすすめ、はげます――引用者） 第八 安土桃山時代と徳政 第九 初期加賀藩の田租に就いて――である。

中世――鎌倉時代から戦国末期にかけての大きな社会問題といえは、『農村問題』が中心であつたという。貨幣経済が農村にも浸透し、さまざまな問題をひきおこし、徳政（仁政）も社会的混乱の相を具現し、さらに社会経済を混乱させた。さらに徳政への希求は土一揆の多発をまねいた。新明正道の『人種と社会』（昭和15・4）は、昭和十一年（一九三六）の夏――満鉄の招聘をうけ、満州各地でおこなった講演が基礎になつており、それに加筆修正をほどこしたのが、本書のようである。著者が『人種の問題』に興をおぼえる契機となつたものは、ナチズムの人種主義の理論的な内容を研究するようになってからのようだ。

ナチズムとは、社会を決定するのは人種であり、アーリア人種の優越を前提し、国民に先天的な優劣の差があるのは当然であると考える主義であつた。そして日本人を評して、文化模倣の二流国民ときめつけた。

内容の概略は―― 第一篇 人種と社会 第二篇 人種主義の理論 第三篇 人種主義的政策――である。

人種とはなにか。著者によると、そのもっとも一般的な見解は、人種を社会や民族としてみる考え方である。人種は、社会や民族とおなじように人間の集合や統一を意味するものだという。

松山高商教授・往谷悦治が著わした『近世社会史』（昭和16・5）は、十八世紀から十九世紀における、イギリス・アメリカ・フランス・ロシア・ドイツの社会的諸過程について叙述したものである。本書は、イギリスにおいては、紡績機械という怪物が出現したことにより、産業界が変革され、民衆の生活にも一大変化が生じたこと、フランスにおいてはとくに一七八九年の大革命を、ロシアにおいては一八九九年の農奴解放を、

ドイツにおいては一八四五年の三月革命を、アメリカにおいては独立戦争と奴隷解放を対象として、封建社会より近代資本主義社会への移行の特質をながめたものである〔序〕。

内容の概略は——序 緒論 近世社会史とその意義 第一章 イギリス 第二章 アメリカ 第三章 フランス 第四章 ロシア 第五章 ドイツ——である。

また別ない方をすれば、本書はおもに各国における封建社会の成熟した矛盾を解剖し、そこにおいて発展しつつある資本主義や生産方法、さらには社会・政治の諸相をしめしたものである。

野村兼太郎^{かねたろう}（一八九六—一九六〇）は、大正・昭和期の経済学者である。慶応義塾にまなび、ヨーロッパに留学したのち、母校の教師になり、イギリス経済史などを講じたが、晩年、江戸時代の日本経済史の研究に従事した。同人が著わした『徳川封建社会の研究』（昭和16・5）は、徳川時代の社会や経済の諸状態を原資料によって明らかにしようとしたもので、大別すると武士・百姓・町人の部門にわけられるようである。内容の概略は——第一篇 武士階級の経済的崩壊 第二篇 農村生活の貧困 第三篇 商業発展の本質 第四篇 幕府の社会・経済政策——である。

徳川時代に“失業”というような問題が存在したかどうか。失業とは、ふつう生計のための職業を失なうことを意味する。が、著者は“浪人間題”について論じている。“浪人”は禄をはなれた武士のことであるが、その社会に及ぼせる影響もすくなくなかった。浪人間題は、徳川期の大きな社会問題であった。

かれらは現状破壊を希望するものであり、幕府からみれば、危険思想家であった。たとえば、

熊沢蕃山（一六一九—九一、江戸前期の陽明学者）

山鹿素行（一六二二—八五、江戸前期の儒学者）

らは、人望があるばかりか、朱子学（朱子が大成した儒学、江戸期幕府から官学として保護をうけた）の反対者としても、危険な人物とみられた。幕府は浪人にたいしてきびしい禁圧策をとるだけで、救済策は講じなかった。浪人が生計の手段としたのは、手習師匠とか儒者であったが、や

がて手工業の方面に移っていった。封建制度下の失業問題は、どちらかといえば、“家”を中心とするものであったが、いまのような資本主義体制のもとにあっては、“個人”を中心としている。

高山岩男の『文化類型学研究』（昭和16・7）は、わが国の精神史・文化史の特性を、類型学的に考察したものという（「序」）。“文化類型学”といったことは、あまり聞きなれぬものであるが、一般に文化の類型的研究をおこなう学問を称するものらしい。

このばあい、研究対象である“文化”をどのようなものに限定するかによって、文化類型学の内容もちがってくるという。たとえば、文芸・思想・宗教等の研究から、基本的な世界観の類型を取りだそうとする研究、神道・儒教・仏教の類型を比較して考察するのが、文化類型学の研究である。

内容の概略は——文化類型学の概念 東洋文化と西洋文化（その一、その二、その三） 文化類型と風土的地域性 日本の国土と文化的精神 日本の国家理念の特殊性 日本における事実主義の精神——である。

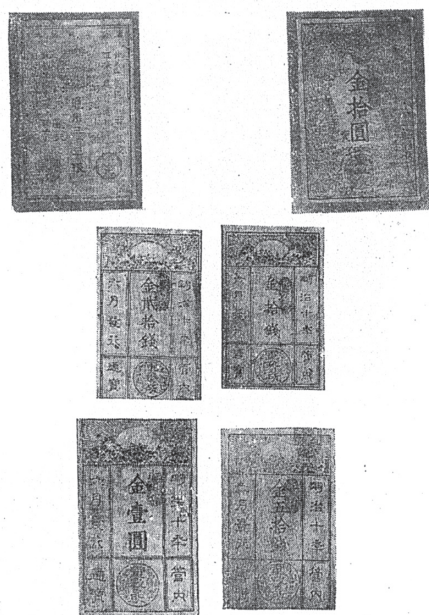
吉岡修一郎の『現代仏蘭西哲学』（昭和16・8）は、読者が現代に生き、現代を思索するのに、どのようにすればよいか、といった切実な問題の解答の手引を著わしたものだという。したがって、本書は現代フランスの哲学者とその思想を、教科書風に羅列したものではないのである。

内容の概略は——序 第一章 フランス哲学一般の特色 第二章 歴史への一瞥 第三章 ベルグソン哲学その他 第四章 主知主義の傾向 第五章 実証科学側の哲学者——である。

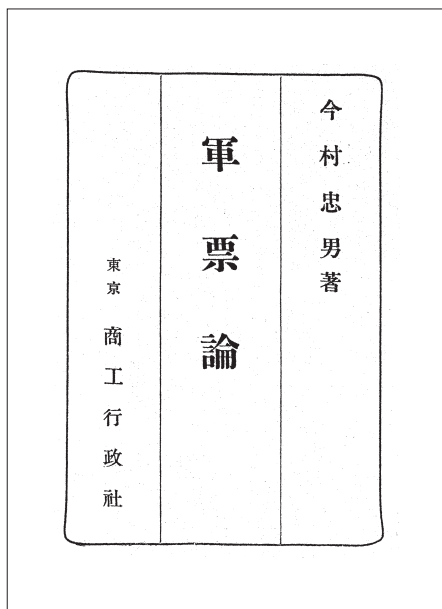
フランス哲学の特色とはなにか。西洋哲学の術語や訳語がむずかしいために、われわれはよくたじろぎ、一步も二歩も後退することがあり、まいには投げ捨ててしまうことがある。が、著者によれば、フランス哲学の文章や用語は、単純なのである。フランスの哲学者は、少数の専門家だけのために本を書いているではなく、万人のため、人類全体に呼びかけるために書物を著わしているのである。

むずかしいものを、むずかしく書くのが哲学ではないはずである。難解で深遠な思想を、だれもがわかるようにやさしく書くのが書き手のつとめであろう。

今井忠男の『軍票論』（昭和16・9）は、まことにユニークな書である。“軍票”とはなにか。この語は、“軍用手標”の略語である。それは戦地や占領地において、軍隊が正貨に代わって使う紙幣である。近代戦において、軍票は重要な役割をはたしているが、それにたいする理解はうすいという。なぜなら、百年前の“掠奪票”^{りやくだつ}は、五十年前の“徴発証券”^{ちくはつしやうけん}とおなじものと考えられているからである（「序文」）。



西郷札



今村忠男著『軍票論』。

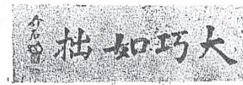
内容の概略は——第一章 軍票史 第二章 支那事変軍票論 第三章 軍票の通貨理論 附録——である。

第一章では、日清・日露戦争、シベリア出兵について語ったのち、日本とドイツの軍票、西郷札、支那の軍票について論じている。第二章では、支那事変の軍票から、第三章では、過去および現在の「日本軍票」の理論的展開を試み、軍票論をつくりあげようとしている。

このうちから明治十年（一八七七）の西南の役における、「西郷札」（不換紙幣）について語っておく。西郷軍はじゅうぶんな軍資をもたず、同年二月、鹿児島を出発した。そのとき携帯した軍費は、約二十五万円であったという。出兵後、直ちに不足を感じ、軍費の募集をおこなった。地租（旧法で土地にたいして課した収益税）、献金、掠奪をおこなったほか、鹿児島島の民間会社からも借金をした。しかし、戦局が進むにつれて、軍費にますます欠乏するようになり、同年六月にいたり、桐野利秋の発案で、「西郷札」を発行した。発行したのは、つぎの六種類である。

拾円札（濃茶）	………	三六、〇〇〇枚	——	三六、〇〇〇円
五円札（ぶどうねずみ）	………	一一、六〇〇枚	——	五八、〇〇〇円
一円札（褐色）	………	三〇、六〇〇枚	——	三〇、六〇〇円
五十銭札（ピンク色）	………	二七、六〇〇枚	——	一三、八〇〇円
二十銭札（黄色）	………	一〇、六〇〇枚	——	三、二〇〇円
十銭札（生壁色）	………	九、〇〇〇枚	——	九〇〇円
計		九三、〇〇〇枚	——	一四二、五〇〇円

これらの西郷札が、強制せられて通用したのは、駐屯地だけであった。西郷軍は、各地で敗れて鹿児島に帰ると、地方民は大損害をこうむったが、戦



佐田介石とその筆跡

後政府による補償はなかった。

本庄栄治郎の『社会経済論』（昭和16・12）は、佐田^{かたせき}介石（一八一八～八二、明治前期の僧——天文・経済学者）の人と業績について説いたものである。内容の概略は——解題篇 第一章 緒言 第二章 略伝 第三章 著書 第四章 介石の思想 第五章 介石の運動 第六章 批評と反響 第七章 結辞 附録 本文篇——である。

封建鎖国体制の幕府が崩壊し、明治の新政をみると、古いものは打破され、欧米の習俗がにわかに脚光をあび導入された。わが国は新生日本として第一歩をふみだした。が、欧化主義にたいする反動として、国粹運動もおこった。佐田は仏教の教

理にもとづいて天文学や暦法を研究したひとである。

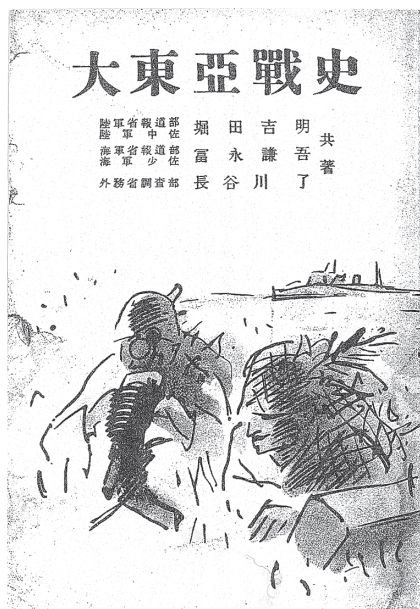
かれの思想は、保守反動的であり、国粹的な色彩が濃く、わが国の欧化主義をうれい、外国貿易のわが国に利あらざることを説いたり、舶来品排斥の結社をつくり、国産品愛用運動をおこしたり、各地を説教してあるいた。介石こそは、わが国の国家主義思想の先駆をなす人物であった。

京都帝国大学教授・池田栄が著わした『日本政治学の根底』（昭和17・2）は、国家主義または日本精神を体した“日本政治学”を樹立するために著わした書物のようである。著者によれば、いまの新体制と聖戦のもとで必要なものは、日本政治学だという。その根底をあきらかにするため肇国精神の基礎たる聖徳太子の十七条の憲法の理念と、その政治的実現は意義あることである、とかたっている。著者は国粹主義者であることは言をまたない。

内容の概略は——第一篇 総論 第二篇 本論 第一章 肇国精神とその政治 第二章 国体精神とその政治 附録——である。

昭和十六年（一九四一）十二月八日——わが国が英米に宣戦布告したとき、著者が抱いたおもいは、祖国の光栄ある歴史と神ながらの理念を尊重し、大東亜のために死闘する日本人は、かならず勝つ、というものであった。

陸軍省報道部——陸軍中佐・堀田吉明と海軍省報道部——海軍少佐・富永謙吾の共著『大東亜戦史』（昭和17・5）は、宣戦の大詔を奉じて、大東亜共栄圏の基礎工事を完了するまでの、雄渾なる（雄々^{おお}しく、勢いがある）皇軍の作戦と大東亜戦争（太平洋戦争）の宿命的必然性をやさし



堀田吉明 共著『大東亜戦史』
田永謙吉

く解説したものである。

この戦争は、東亜（アジアの東部）をめざす、世紀の征戦だという。世界の新秩序を建設せんとする民族の大事業だという。内容の概略は——

第一部 外交の部 第二部 陸軍の部 一 大東亜戦争勃発 二 香港攻略 三 マニラ入城 四 マレー作戦 五 シンガポール攻略 六
ビルマ作戦 七 東印度作戦 第三部 海軍の部 一 暗雲低迷四十年 二 雄渾ノ海軍作戦の展望 三 壮絶ノ六大海戦の展開 四 燦然ノ各
部隊の偉業 五 制海権の確認 六 海洋への決意——である。

大東亜共栄圏を建設せんがためには、全国民がいっせいに奮起し、身を挺して国家興隆のいしずえとなる覚悟を要する、といい、かりにも諸戦
の大戦果に酔ってはならぬ、といましめている。

今日出^{こんひ}海（一九〇三〜八四、昭和期の小説家・評論家）の『日本の家族制度』（昭和17・7）は、六篇の論文を収録している。内容の概略は

—— 序説 大宝養老の律令 御成敗式目 徳川時代 家について 日本の家族制度の特徴——である。

さいこの「日本の家族制度の特徴」とは、どのようなものか。それは父母への孝養と祖先の崇拜にあるという。このあと著者は、中国の孝道主
義にふれている。わが国の家族制度は、歴史とともに移りかわってきたが、いつの時代でも、家長を中心とする秩序ある集団であったという。

『大東亜の資源と経営』（昭和17・8）は、日本軍が南方に進出した結果、手に入れた資源をいかに有効に生かすかについて、各専門家の研究を
収録したものである。日本軍の仏印進駐について、対米英にたいする宣戦布告を
みるにおよんで、国民の関心はにわかに南方に集中したのである。

南方は大東亜戦争の理念を実現するための「物質的条件」にもめぐまれていた
から、日本に不足している物質の調査と、南方の諸地域における経営形態につい
て研究する必要がある。内容の概略は——第一篇 大東亜の鉱山資源 仏印と
我が不足鉱山資源 東印度の燃料鉱物資源 泰國の錫^{しやう}鉱業 大東亜の石油資源
ビルマの重要資源 第二篇 仏印の緬^{めん}羊飼育の将来性 農林産資源より見たる
比律賓^{フィリピン}群島 シヤム米の話 第三篇 大東亜の物質交流と経営——である。

日本においてひじょうに不足を感じているものは、無煙炭・亜鉛・鉄・錫^{すず}・ア

ンチモニ・燐鉱・硅砂・鉛などの鉱物である。石油はまったく産出しないから、将来も需要をみたしえないのは遺憾であるという（緒言）。西村真次の『南方民族誌』（昭和17・8）は、著者が大東亜戦争がはじまる前から、毎月新聞や雑誌に南方の諸民族の人種や文化について書きつけてきたものを一冊にまとめたものである。

内容の概略は——「第一部」第一章 海洋文化論 第二章 世界の共存圏 「第二部」第三章 日本と南方との民族的交^{こう}聯^{れん} 第四章 南洋の諸民衆と其文化 第五章 南方共栄圏の文化（中略）「第三部」第十四章 日本民族の優秀性 第十五章 八紘一字 第十六章 古代文化に於ける外来文化の影響（後略）——である。

本書の構成についていえば、第一部は前論であり、海洋文化と世界の二大共栄圏とを論じ、南方共栄圏の地理的性格をあきらかにしたものだとい^う。

第二部は本論であり、南方諸民族の人種的・文化的研究である。

第三部は後論である。日本民族の性格、理想、歴史について論じ、南方共栄圏の文化政策について提言したものという。

本書はまさに当時の日本の国策にそった論著であり、大東亜共栄圏の理想——“八紘一字”と“万邦共栄”を実現するために必要なものは、南方諸民族の人種と文化についての知識であるとの考えから、筆をとったものである。

小林珍雄訳『社会法則』（昭和18・1）は、ガブリエル・タルドの *Les Lois Sociales, Esquisse d'une Sociologie*, Librairie Félix Alcan, Paris, 1921 を反訳したものである。本書の母胎になったものは、一八九七年十月「社会科学自由学園」でおこなった連続講義であるという（序文）。

内容の概略は——序文 緒論 第一章 現象の反復 第二章 現象の対立 第三章 現象の順応 結論——である。

藤間生大の『日本古代家族』（昭和18・4）は、わが国の古代家族を成立から終えんまで跡づけたものである。著者によると、わが国の古代の家族の実体をとらえようとすると、^{“戸”}（郷戸）を媒介せねばならぬという。^{“戸”}というのは、古代の家族の法制上の表現であり、ふつう^{“郷戸”}と呼ばれている。

内容の概略は——はしがき 第一章 「世帯共同体」の理論 第二章 大化前の共同体 第三章 郷戸的家族制の成立 第四章 古代の家族構造 第五章 古代家族の終焉 あとがき——である。

平山高次訳『価値の進化』（昭和18・7）は、フランスの著名な社会学者セレスタン・ブーグレ（一八七〇～一九四〇、モンペリエ、ツールー

ズ、ソルボンヌなどの教授を歴任、デュルケーム学派の人）が著わした *Leçons de Sociologie sur l'Evolution des valeurs*, 1922 を反訳したものである。価値の世界はいかにして構成され、いかにして進化するか。それを構成する諸要素は、いかにして分離し、組みあわさっているか。これらの問題に有益なる教示をあたえるのが社会学である。

“価値” とは、ふつうねうち、大切さの意である。それはわれわれの要求をみたすものである。が、第一次世界大戦後、戦場からの帰還者のなかから、さまざまな価値の妥当性、有用性などについて、再審査する必要をもとめる声がおこったという。かれらは、ある事物、あるひとびと、存在や行動の仕方、考え方にたいして、再検討することを欲したのである。いわゆる価値哲学の発生がこれである。

本書は十四章から成る。内容の概略は—— 一 訳者序 一 原著者序言 第一章 価値の世界 第二章 価値と実在 第三章 価値と教育 第四章 価値の分化 第五章 価値 目的 手段 以下、省略する——である。

寺田弥吉の『日本総力戦の哲学』（昭和18・8）は、戦争そのものの概念的遊戯についてのべたものではない。そうではなくて、総力戦のプランそのものを対象とし、そこに存する客観的の原則を分析したものである。内容の概略は—— 序 一 日本総力戦の哲学 二 日本史上より観たる総力戦体制 三 一億皆兵の根本義 四 思想戦の総力的展開 五 思想戦士としての山鹿素行 六 思想戦の基礎としての思想・信念・学問 七 思想戦における手段・対象・ルート——である。

著者によると、こんどの戦争（大東亜戦争）は、その底に米英の不正秩序の打破と、あらたな世界秩序の再建といった高度の戦争目的をもっているという。この戦争は事実であって、概念ではないのである。

宗教団体戦時中央委員会が編んだ『大東亜建設と宗教』（昭和18・9）は、この種のテーマで論文を公募し、応募作品二〇三篇のなかから、当選した論文四篇を収録したものである。その内訳は、入選作一、選外佳作三である。当選作の構成は—— 一 序 二 大東亜建設の根本精神とその実践 三 宗教の本質とその使命 四 大東亜建設と宗教 五 結び——である。

当選者・宮内彰（朝鮮神学院教師、四十一歳）の論文の骨子はつぎのようなものである。新しい世界観こそが、あたらしい世界を生むとの考えのもとに大東亜戦争がはじまった。東亜はながく英国的世界観のなかで、各民族はなかば諦観し、隷属していた。しかし、日本はこの世界観を敵として戦いに打って出たのである。宗教（仏教）は昔日の力をうしない、無力を叫べばれてからすでに久しい。が、宗教が大東亜戦争のために負うべき使命と役割とはなにか。

著者によると、宗教が果たす役割とは、国策にしめすところに順応して、大東亜建設のために、ただ黙々と奉仕することである。縁のしたの力持ちとして奉仕することである。具体的には、国民精神や国民思想をふるい起こし、昂揚こうようさせることだという。

本位田祥男ほんいでんしゅうおは、東京帝国大学教授のかたわら大政翼賛会経済政策部長を歴任した。同人が著わした『戦時の家庭経済』（昭和18・10）は、ちょうど国民が国家のなかでじぶんの職務の重要性を自覚する必要があるように、主婦も家庭経済の国家における地位を知らなければ、その使命をまっとうできないとの考えから、執筆されたものという。

さらに著者のねらいは、わが国の主婦の視野をひろげ、国策の意味を知らしめ、これに順応して家庭経済を営ましめることであった。内容の概略は——第一章 家庭経済の重要性 第二章 消費経済機構 第三章 価格統制と消費規正 第四章 家庭消費の合理化 第五章 消費者の組織化 第六章 納税と貯蓄 第七章 結び——である。

著者によると、支那事変から七年、年々歳々に物質がすくなくなり、生活もくるしくなってきたという。主婦は不平をいわず、ひたすら忍苦の生活に耐えてきた。しかし、主婦はただ国策に順応し、困苦欠乏に耐えるだけでは足りないという。戦時の家庭を切りもりする主婦は、その時代にふさわしい生活を設計する必要があるという。婦人は家庭にいても国家に貢献できるのである。国民の決戦総力をつよめるも弱めるも婦人の力であるという。

東北帝国大学教授・中村吉治の『封建社会』（昭和18・10）は、日本や西欧の封建社会（中世の社会）の変遷の様相について叙述したものである。中世の社会は、古代と近代とのあいだの時代であり、封建の時代と称してもよい。洋の東西をとわず、中世は封建的性格をもっている。それは政治形態にみられるもので、土地の領主と農民との隷属関係、上下関係、すなわち支配者と被支配者といった対立した立場である。

本書は、封建的性質を再検討すると同時に封建的または中世的な全体性を摘出し、それを多面的に調査したものである。内容の概略は——序 緒論 第一章 封建社会の形成 西欧と日本の封建社会の形成 第二章 封建社会の構造 西欧と日本の封建社会の構造 第三章 封建社会の崩壊 西欧と日本の封建社会の崩壊——である。

有賀喜左衛門きざえもん（一八九七～一九七九）は、昭和期の農林社会学者である。東京教育大学、慶応義塾大学で教鞭をとったのち、日本女子大学学長に就任した。わが国の農村社会を社会学的に研究したことで知られている。同人の著書『日本家族制度と小作制度』（昭和18・12）は、七三二頁もある大著である。小作問題がとくにやかましく論じられるようになったのは、昭和四、五年（一九二九～三〇）以後の数年間という。



アドルフ・ヒトラー

“小作”とは、農地をもたない百姓が、一定の借地料を払って他人の土地を耕作して、農業をいとなむ意である。小作の起原については諸説があり、律令時代の“賃租田”にもとめる説。他方、中世荘園制度における“作人”にもとめる説がある。ともあれ小作制度が発展したのは徳川時代とされる。“名田小作”（地主の土地をかりて農業をいとなむ）が中心であった（『社会科学大辞典 7』鹿島出版会）。

小作料は、原則として“現物米”であり、収穫の六割から七割を地主にとられた。地主と小作との争議は、明治・大正・昭和とたえることなくつづいて来たが、地主と小作との封建的な搾取関係、小作農民の自覚の高まりとあいまって争いはたえなかった。

本書は、おもに小作のかたちを名子（領主や名主に隷属していた小作農民）制度との歴史的連関によって考察した研究といえる。内容の概略は——第一章 家族制度と小作制度 第二章と第三章は、名子の名称と分類 第四章 賦役の種類 第五章 賦役と物納小作料 以下、省略する——である。

中川與之助の『^{ナチス}社会の基本構造の研究』（昭和19・2）の中心的内容は、ドイツに“ナチス革命”がおこった歴史的事件をあきらかにし、ナチスドイツの社会的・人間的構造を追究したものである。

内容の概略は——第一章「第二帝国」の社会構造と運営 第二章「中間国家」の社会組織と運営 第三章 ナチスの国家像 第四章 ナチスの社会像 第五章 ナチスの人間像 第六章 歴史的形勢としてのナチス的人間像 第七章 ナチス政策における人間的立場 第八章 ナチス・文化の日本的発展 第九章 日本文化とナチス文化の交渉 附録——である。

ドイツ社会や国家の形成原理は、“民族的世界観”であり、ドイツ人はこの世界観のなかで生まれ、働き、死んでゆくのである。ところでこの“民族的世界観”とは、どのようなものなのか。著者によると、人間生活の基本単位は、個人や階級ではなく、民族であるという。国家は民族のための手段にすぎず、民族的意志を具現する機構なのである。

ナチス国家は、“指導者国家”である。指導者によっておしえ、導びかれる国家である。ナチス国家では、最高指導者と国民は、本質的に一体である。ドイツと日本は、国体を全然異にしている。ナチス国家は、指導者制をとっており、わが日本は天皇の

国家であり、君民一体の国家である。

坂本静雄訳『メキシコ社会史』（昭和19・3）は、スペイン生まれの著名な著述家ルイス・アラキティン（一八八六～？）の *La Revolución Mexicana: sus orígenes, sus hombres, su obra*, 1930 を反訳したものである。

メキシコは、大東亜戦争の大詔が出ると、直ちにわが国と国交を断絶し、メキシコ在住の邦人五千名を抑留したり、奥地への立ち退きを命じた。当時のカマチョ政権はアメリカの走狗（手先）に甘んじていた。著者は社会主義者と目される人物であり、新聞・雑誌の世界で活躍した。

内容の概略は——著者のことば 訳者のことば 第一編 発祥 第二編 人物 第三編 事績 第四編 反抗 第五編 革命の終焉 附録——である。

著者によると、メキシコほど世界から誤解されている国はないという。メキシコといえば、“血なまぐさい革命”を連想したり、専断と暴圧の国、無秩序国家の代名詞でもあった。が、著者が本書において意図したのは、血なまぐさい賊徒の通俗劇をみせることなく、メキシコという一大社会劇をみせるにあったようだ。

三谷隆正（一八八九～一九四四）は、明治から昭和期にかけての法哲学者、キリスト教教育者である。六高、静岡高校、一高で法制とドイツ語などをおしえた。『幸福論』（昭和19・3）は、同人の著述である。内容の概略は——第一章 幸福論の歴史 第二章 幸福とは何か 第三章 苦難と人生 第四章 新しき創造 第五章 不幸の原因 第六章 幸福への鍵——である。

著者は立論にあたって外国の文献にも依拠しているから、かならずしも本人の考えをのべてはいない。が、随所にすぐれた意見や考えがみられる。まず幸福とはなにかの問にたいして、著者はアリストテレスのことばを引いて、つぎのように答えている。——人間の幸福は、単なる所持にあるのではなく、活動にあると。活動とは、有徳なはたらきのことであり、完璧な徳行のうちに至純な幸福があるというのである。アリストテレスはまた、“快”あるいは“よろこび”を幸福のひとつに数えた。しかし“快”は生活の結果でなくてはならず、けっしてその目的や動因であってはならぬ、としている。

幸福と裏表の関係にあるのは、“不幸”である。人間は、衣食住に事欠いたり、健康がすぐれなかったり、家庭や人間的生活条件がみたされぬと不幸であると考えたがる。著者がいいたいことは、ひとの吉凶禍福は、天のなせる業（わざ）ということか。

鬼頭英一の『社会存在の論理』（昭和19・5）は、日本臣民として、日本をどうすべきかというだけでなく、世界をいかにすべきかについて考

察したものである。著者のいう“社会存在”とはなんのことか。“存在”とは、すべてわれわれの存在である、という意味において、存在自身が“社会存在”であるという。社会存在は、必然的に一定の法則にしたがって進んでゆくのだが、その法則が“社会存在の論理”だということ。そして、著者によると、いま日本臣民としてなすべきことは、皇運を扶翼^{ふよく}して（たすける）、八紘一字の理想の実現に献身することだということ。内容の概略は——序説 第一章 社会認識 第二章 社会関心 第三章 社会信念 第四章 責任共同体 第五章 字^つ（世界）の理念 跋——である。

京都帝国大学教授・荒木俊馬の『日本精神と日本学術』（昭和19・12）は、国民の士気を大いに鼓舞するために書かれた書物のようだ。大東亜戦争の様相は、悽愴^{せいそう}苛烈^{かれつ}をきわめており、この時期、日本精神を發揚し、さらに科学技術を進歩發展させ、この戦争に勝利するのが国家国民の最大の目的であった。が、戦局はじり貧であった。

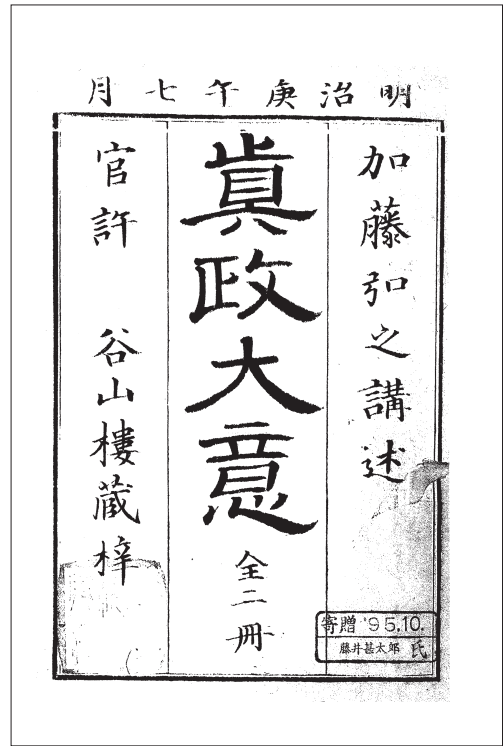
内容の概略は——序 一 思想戦序説 二 思想皇夷の別 三 徹底的勤皇思想家 河上彦齊 四 哲学談疑 五 陰陽五行説と弁証法 六 日本的性格を示唆するもの 七 世界像と現実世界 八 自然科学目的観 九 現代科学戦の意義（後略）——である。

波多野鼎^{かなえ}（一八九六—一九七六）は、昭和期の政治家・経済学者である。戦前、同志社や九州帝大の教授を歴任し、敗戦後政界に入り、昭和十二年（一九四七）日本社会党から出馬し、参院議員に当選した。同人の著者『マルクス主義大要』（昭和21・12）は、唯物史観を中心に、マルクス主義的な考え方をあきらかにしようと、試みたものである。

マルクス、エンゲルスによって創始されたのが、いわゆる“マルクス主義”といった壮大な理論大系である。が、その全体のうち、唯物史観を理解する手引をあたえようとするのがこの小著を執筆した動機だという。内容の概略は——第一章 マルクス、エンゲルスの生涯と著作 第二章 唯物史観 第三章 社会主義的社会秩序——である。

*

昭和元年（一九二六）から終戦（一九四五）までの約二十年間に刊行された数多の社会科学文献を見渡すと、おのずからいくつかの特徴があらかになる。一つは社会哲学や社会思想的なもの、二つは非統治者の側に革命思想を育てるかのように、マルクス主義や社会主義に関する反訳がよく刊行されている。もっともこれらのイズムは、国体と相容れない危険思想であるから、好ましくならぬ箇所は検閲によりすべて削除されている。



加藤弘之講述『真政大意 全二冊』。

〔法政大学附属図書館蔵〕

三つは日本の古代史や社会史に関したものの、四つは国粹思想や軍国主義を宣布する目的で刊行されたもので、太平洋戦争がはじまる前後からよく刊行されている。書物は時代をうつす鏡、時代の例証ともいえそうである。

閑話 狂躁の昭和期―亡国への道

“社会主義”と“共産主義”の輸入。

第一次世界大戦が終わり、ヴェルサイユの平和条約が結ばれたころより、欧米では帝国主義や軍国主義への反省から、民主主義的政治を主張する者があらわれた。思想界の動きに敏であった政治学者の吉野作造（一八七八―一九三三）は、大正五年（一九一六）以来、雑誌等で“民本（民主）主義”を鼓吹したところ、それに共鳴する学生や若い労働者が生まれ、かれらの中から社会主義や共産主義に走るものも出てきた。

この二つのことは、いつごろ日本に入ってきたのか。またそれを紹介したのは、だれであったのか。

これらの言葉がわが国に輸入されたのは、明治三年（一八七〇）であり、輸入者は加藤弘之（一八三六―一九一六、啓蒙的官僚学者）であった。加藤は自著『真政大意』（明治三年刊）のなかで、“ Kommunismus ”と“ Sozialismus ”ということばを使っている。かれははじめ大胆に自由主義―民主論を説いたが、新政府の御用学者になってからはじぶんの主張を変えたことで知られている。

加藤弘之講述『真政大意 全二冊』（明治庚午七月）の巻の下―十五頁に、この二語が出てくる。

既ニ欧州ニモ往古希臘ノ盛ナ時分之二類シタ制度モアリ、又其後ニ至リテハ コミュニスムヂヤノ。或ハソシアリスムヲ申ス。二派ノ経済学ガ起リテ。二派少々異ナル所ハアレドモ 先ッハ大同小異デ。今日天下億兆ノ相生養スル上ニ於テ。衣食住ヲ始メ都テ 今日ノ事ヲ何事ニヨラズ。一様ニシヤ

ウト云フ論デ。(後略)

明治六、七年(一八七三、七四)ごろは、日本の言論史上、自由主義がさかんに唱えられたときであり、すでに「社会党」や「コミニスト党」⁽²⁾の名称も聞かれたようである。

当時、加藤は先の二語を訳せなかったようであり、原語のまま用いている。かれは「社会主義」と「共產主義」は、世の中を救う一つの方法かもしれないが、治安上、有害であると批判した。

その後、社会主義はじょじょにわが国に浸透し、例の大逆事件をもってピークに達するのである。カール・マルクスの社会主義がわが国で流行しはじめ、学生や労働者がその研究をはじめ、共鳴者を生み出したのは、大正六年(一九一七)ごろからであり、翌年あたりから「国際共產党」(第三インターナショナル)が、わが国に宣伝を試みるようになった。

大正十年(一九二一)十一月——共產主義者らは、秘かに「^{ぎようみん}曉民共產党」(のちの「日本共產党」)を組織したが、官憲に探知され、関係者は治安警察法違反として処罰された。日本共產党は栄枯盛衰をくり返すのだが、昭和三年(一九二八)三月のいわゆる大検挙(三・一五事件)によって、約一六〇〇名の逮捕者をだした。社会運動を取りしめるために、治安維持法が公布されたのは、大正十四年(一九二五)のことであるが、昭和三年四月にはその改正案が第五十五回帝国議会に提出され、衆議院で審議未了となると、六月緊急勅令によって実現した。⁽³⁾その内容はひじょうにきびしいものであり、国体の変革をもくろむ結社の組織者、役員その他の指導者にたいしては、「死刑」または「無期」もしくは五年以上の懲役・禁錮に処すというものであった。

戦前、治安維持法によって送検された人数は、司法省の調査によると、七五、六八一名である。送検されなかった逮捕者は、その数倍と考えられるから、十万名以上がつかまったことになる。

とくに旧警察制度のもと、おもに政治や思想関係を担当したのは「特別高等警察」(「特高」)である。特高は、治安維持法の尖兵として活躍したのであるが、ほんといつても尖鋭化する社会運動(労働、農民運動)を取りしめるのが主なしごとであり、たびたび「思想警察」⁽⁴⁾と称せられた。特高警察機関がはじめて特設されたのは、明治四十年(一九〇七)であり、その後拡充がおこなわれ、昭和三年(一九二八)七月ついに全国各府縣に新設され、完成をみたのである。⁽⁵⁾とくに問題なのは、特高警察や憲兵隊などにおいて捜査や取り調べの過程で拷問や虐殺がおこなわれ、犠



山本宣治

犠牲者が大勢だったことである。昭和四年（一九二九）二月八日——第五十六回帝国議会の予算委員会第二分科会で、当時の特高警察の全国的な拷問を調査して政府を追及したのは、山本宣治代議士（通称「山宣」）であった。

「山宣」の暗殺

このとき山宣は、共産党事件に連坐し、各警察署において取調べをうけた被告もしくは被疑者の待遇について、政府委員に詰問した。拷問は全国にわたるものであったが、かれは函館警察署の例（冬の寒空に洗面所か浴室のような所で真裸にされ、四つ這いにさせられたうえ、竹刀でなぐられ、「もう」といわされ、床をなめさせられた）のほか、竹刀でなぐられ悶絶し、目がさめたら枕もとに茶碗に線香が立ててあった事件、被告の十五歳になる娘が母親の見ているまゝで陵辱をうけた事件などを問題にした。

これにたいする政府委員の秋田内務次官の答弁は——

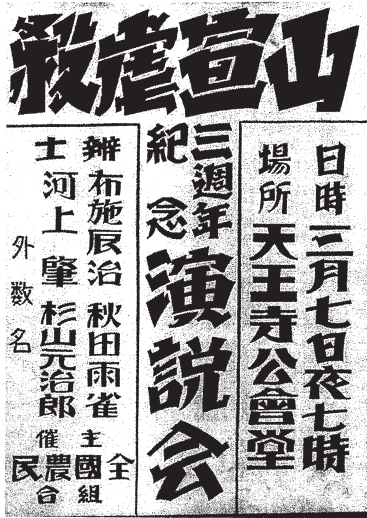
政府としては、ただいま山本君の述べられました事実のあるといふことを断じて認めることはできません。したがって存在せざる事実を前提として、これにたいして所見を述ぶる必要はありません。⁽⁶⁾

とあいまいな答弁をして逃げた。

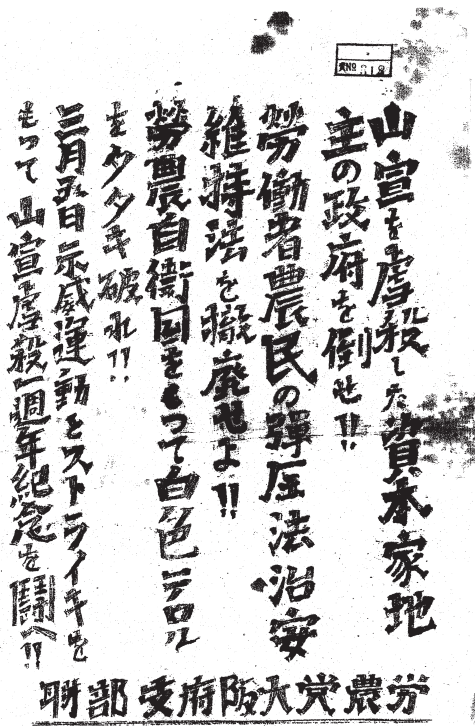
山本宣治は、なぜ殺されたのか。かれの暗殺に関しては、終戦の翌年——雑誌『創建』（昭和21・2）に、江口渙^{えぐちきよし}（二八八七—一九七五、大正・昭和期の小説家、日本社会主義同盟中央執行委員、戦後は日本共産党中央委員）が、興をひく記事を寄せている。

山本は農働農民党の代表として、京都第二区から選出された代議士であった。当時は、陸軍大将・田中義一を主班とする侵略主義、軍国主義の内閣であり、昭和三年（一九二八）三月十五日を期して、日本共産党にたいして大弾圧がおこなわれた。このとき共産主義者と戦闘的な労働者、インテリ農民らにたいする言語に絶する拷問がつけつきと強行された。

帝国主義的資本主義と天皇制専制政治による暴圧に抗して、敢然と闘ったのは山本であった。かれは日本共産党員に対するかこくな拷問や学生運動にたいする官憲の不法弾圧にも果敢な戦いをつづけた。かれは緊急勅令による治安維持法改正案を一命をかけても阻止するつもりであったが、議会において発言する機会もあたえられず、むなしく旅宿に帰ったその晩にテロにあって殺されたのである。



昭和7年(1932)3月—山宣虐殺三周年記念演説会のポスター。
〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

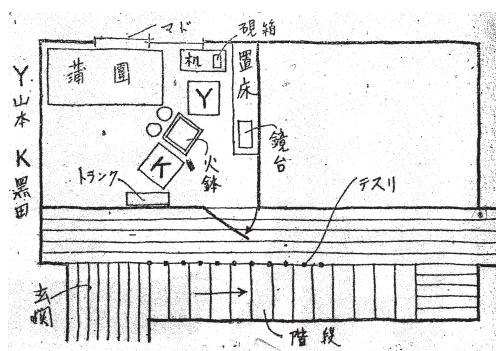


昭和5年(1930)3月—労働農民党大阪府支部連合会が出したポスター。〔法政大学・大原社会問題研究所蔵〕

昭和四年(一九二九)三月五日、午後十時五十分まえのことである。山本は議会開会中は、神田区表神保町一〇番地の旅館“光栄館”を旅宿に使っていた。表玄関のガラス戸をあけて、三十五、六歳のがっしりした体格の男が入ってくると、山本さんはおいでですか、といった。平生、山本は夜、知らない訪問客と会わないことにしていた。女将は夜の訪問者をみなことわるようにいいふくめられていたから、きっぱりと断わった。けれど男は、ほんのちょっとでいいから会いたいと執拗にいった。山本は、女将と押し問答をしている声が聞えたので、階段を降りて行き、どなたですかと尋ねた。すると男は、芝浦の組合で働いている黒田という者です。と名乗り、ちょっと先生にお話し申しあげたいことがある、といった。

山本は、とにかくお上りなさい、といって、黒田に背中をむけると、階段を上っていった。山本は机を背にし、赤いメリンスの座ぶとんの上につきわり、黒田は銘仙の座ぶとんの上に、きちんとひざをそろえてすわった。山本は、あなたはどこの組合かと聞くと、男はじつは組合などどこへも入っていません。ある団体に入っているだけだといった。ではどこの団体ですかと問うと、男は“七生義団”です、と答えた。

男はじつはこういうものを持って来たからといって、「自決勧告書」を山本にわたした。山本はそれを受けとると、手で軽く会釈し、机の上にある硯箱のうえにのせた。



山宣が刺された部屋の見取図

山本を殺った黒田は、正当防衛による傷害致死ということになり、懲役六年といった軽い判決が下された。黒田は服役し、小菅刑務所で雑役をつとめた。かれは山本を殺ったことを後悔しているようであった。無罪になるから、やれといわれたと、囚人仲間にかたまった。

成功報酬は十万円。政党の幹部に引き立ててやると約束されたが、すべて実行されぬ約束であった。

山本宣治の遺骸は、旧労働農民党の「真紅の党旗」につつまれ、納棺されると、本郷の帝大キリスト教青年会館で通夜がいとなまれた。告別式は、三月八日午後一時から本郷の仏教会館でおこなわれた。会葬者は、約一千名。尾崎行雄以下二十名の代議士のすがたがあった。司会者・大山郁夫は叫んだ。「われらの行くところは、職場であり、墓場である」と。

さいごに棺が労働者にかつがれて仏教会館を出るとき、真紅の旗（赤旗）がいくつもひるがえり、市電の従業員らは、いっせいに「赤旗の歌」をうたった。山本の霊柩車は、千住の火葬場へむかった。

特高警察による拷問や虐殺の事実を国会で追及する国会議員は、山本をのぞくと、終戦まで一人もいなかったという。⁽⁷⁾ 山本の暗殺は、容赦なく政府を追及して不慮の厄^{やく}にあった最悪のケースであるが、その死は全国の戦闘的労働者や農村の血をわかつたのである。⁽⁸⁾

特高による拷問の手口。

つぎに特高による拷問の手法についてふれておく。拷問とは被疑者に肉体的な苦痛をあたえて白状させる意である。わが国のばあい、ときに生殺しにちかい状態にまで苦しめた。拷問はふつう密室でおこなわれるため、被害者は証拠を準備して裁判に訴えるすべを奪われていた。物的証拠

を提出できないため、法廷に告訴できないまま今日に至っているし、半世紀以上もたったいまでも、身体に拷問の傷跡をのこし、後遺症に苦しむ被害者は全国各地にいるのである。¹⁰⁾

特高による拷問の体験者の証言をつぎに記そう。

プロレタリア演劇の俳優・松本克平のばあい……昭和七年（一九三二）四月——左翼劇場は、村上知義作の「志村夏江」（杉本良吉演出）の舞台けいこ中、本庁の特高は杉本をマークした。杉本は特高からねらわれていることを察知すると、逃亡し地下にもぐった。

そのとばかりを食って、突然築地署に引っぱられたのは松本克平（プロレタリア演劇同盟東京支部の責任者）であった。松本は訊問者の目つきが尋常ではないのを見て、きょうはただではすまないと覚悟をきめた。二人の訊問者は、交互に矢つぎばやに質問した。即答しないと、竹刀と藤の太いステッキで、太股を気が狂ったようになぐりつけられた。やがて気が遠くなり、意識不明に陥った。

松本は獄にもどると、一週間以上うごけず、その間高熱に浮かされた。太股はベニガラ色に変わり、四斗たるほどの太さにはれあがった。警察は、内出血の痕が消えるまでかれを釈放しなかった。すぐ釈放すると医者のところに行くであろうし、そうなれば拷問を加えたことが明るみになるからである。

作家・中本たか子（一九〇三〜九二）は、山口高等女学校を卒業後、下関の小学校で教鞭をとった。昭和二年（一九二七）上京後、カフェの女給となり、女給からプロの作家となり、「女人芸術」に参加した。彼女のばあい……第四次日本共産党事件（昭和五・七・一四）で逮捕されて十日後、尋問がはじまった。当時、彼女は二十六歳、妊娠三ヵ月の体であった。共産党員にアジトの協力をした嫌疑で検束されたのである。呼びだされたのは、谷中署の二階の調室（六畳間）であった。取調官は警視庁の特高三名である。

栗田巡查部長……四十年配のチョビひげの色の黒い男。

鈴木警部……五十年配の頭のはげた男。

（氏名不詳）……三十年配の陰気な男。

中央にすわっていた鈴木警部が、まずおだやかに姓名や住所をききはじめた。が、中本は答える必要がないとおもい、口をひらかなかった。す

ると特高たちは、なめられたとおもい、顔色をかね、総立ちになった。

かれらは彼女の顔をなぐり、髪の毛をひっぱったり、背中をけりはじめ、鈴木などは竹刀で顔をなぐりつけた。彼女はふんだり、けったり、なぐられているうちに意識がくらんできた。やがて彼女をまっ裸にすると、さかさづりにしようとしたが、天井には釘もしかけもないので、あきらめ、彼女を畳のうえに投げつけた。鈴木は部屋の隅においてあったほうきを持ってくると、その柄を彼女の陰部のなかに突き込んだ。そのあと、栗田が馬のりになり、両手で首をしめた。彼女は意識をうしなった。

意識をとりもどすと、彼女の手をしぼり、正座させ、鉄棒で太股を小突きはじめた。それは三時間ほどつづき、太股はどす黒く腫れあがった。彼女は立ちあがることも、歩くこともできなかった。彼女はこの拷問により人工流産し、予審なかばにして発狂し、一年ほど東京郊外——松沢の脳病院ですごさざるをえなかった。

三浦うめ（四・一六事件で逮捕）のばあい……一年あまり入院して、ようやく歩けるようになったが、手首、足首に傷跡が刻みこまれた。彼女は神奈川県の特高警察により、まっ裸にされ、手と足をしばられ吊し上げられ、腰のまわりにタバコの火を押しつけられ、恥毛を一本づつ、タバコの火で焼かれ、膣内を竹べらでかき回された。このような破廉恥な拷問を連日おこなったのは、中村警部補らであった。

中野署でおこった輪姦事件……其婦人活動家は、三人の特高刑事にかわるがわる強姦されたあげく、「貴様たちを殺そうと生かそうと、どうしよう」と勝手になっているんだ」と、いい放ったという（『赤旗』昭和8・9・26付）。

特高の拷問は、共産党員や朝鮮人の活動家にたいしては、とくに狂暴におこなわれたようである。

平井正雄のばあい……神戸警察署でさかさづりにあい、鼻の穴に唐辛子とうがらしを入れられたあげく、虐殺された。

金舜実キンフジナル（知識人の朝鮮人の婦人）のばあい……早稲田署で、両足を大バケツに入れられ、氷漬けの拷問をうけた。が、口を割らなかった。

谷川巖のばあい……昭和九年（一九三四）二月スパイの手引により、東京の久松署に逮捕された。当時、袴田里見はかまださとみ（一九〇四〜九〇、昭和期の社会運動家）は、日本共産党の唯一の中央委員であったが、その連絡員として谷川は、連日、特高のきびしい追及と拷問をうけた。警視庁から、悪名高い五名の特高——中川、山県、鈴木、宮下、須田らがやって来て、袴田との連絡方法を知ろうとして必死の拷問をくわえた。

その手口は——

指のあいだに鉛筆をはさんでねじり回す

髪の毛をつかんで引きずり回す

ヒザの上に丸太棒をおいて、左右の四人の力でグリグリと回す

電気イス（体に電気を流し、全身をしびれさせる）

後手にしばられ、天井からさかさずりにする

などであった。谷川はこれらの拷問をうけるとたびたび失神したが、口を割らなかった。

かれはその後、原宿署、駒込署とたらい回しされた。二ヵ月ほど、ひとりで便所に行けず、四谷署で赤痢にかかり駒込病院にはこばれたが、両足に鉄鎖をはめられたままであった。

石崎源七のばあい……治安維持法違反で、昭和八年（一九三三）年二月から八年間も獄中にあった石崎は、同二十年五月三日小岩に引越してまもなく、神奈川署において取調べをうけた。石崎は田端の家を空襲でうしなっていた。そのため特高は物的証拠がないので、“手記”をかけと強要した。書くことは何もない、というと、頭の中のすべてを告白し、全生活を記録し、“赤”を清算しろ、といわれた。赤を撲滅するのが、おれたち特高の任務なのだ、と特高係はいった。

特高は、手記を書かない石崎に残虐な拷問をつづけ、こんど来るときは、唐辛子を鼻の穴に入れてやる、といって脅迫した。辛い敗戦により、石崎は自由になれたが、神道久三と寺崎弘行は、特高の拷問により虐殺された（『特高警察黒書』）。

横浜事件のばあい……昭和十七年（一九四二）九月——社会評論家・細川嘉六（一八八八—一九六二）をはじめ、アメリカ帰りの川田^{ひさし}寿夫妻などが、共産主義運動をした嫌疑で逮捕されたほか、世界経済調査会職員、満鉄東京支社員なども検挙された。同十九年（一九四四）、神奈川県警察部は、『中央公論』『改造』『日本評論』『大陸』などの編集者を数十名、治安維持法違反被疑者として検挙した。被疑者（五十名以上）たちは、神奈川警察署、保土ヶ谷警察署、山手警察署、横浜臨港警察署などにおいて、棍棒・竹刀・麻縄・剣帯革・靴・手錠・火箸などで乱打されたり、靴のまま踏んだり、けったりされたり、吊り上げられたりして十三名が失神し、拷問により四名が死亡し、傷害を受けたものは三十三名に上った。

川田寿のばあい、過酷な取調べは一年にわたり、この間拷問により何度も失神したし、その妻と考えられる女性は、夜間声が外にもれないように、猿ぐつわをはめられ、腰部を裸かにされた上、全身を乱打されたり、両手をしばって吊り上げたり、陰部を棍棒で突かれたりし、⁽¹⁾何度も失神

した。これは、でっちあげ事件であったが、敗戦後、被害者三名は、思想検事や特高警官らを『特別陵虐』で告発した。しかし、大部分は物的証拠がないために不起訴になった。⁽¹²⁾

横浜事件は、戦前・戦中における最大規模の言論・思想の弾圧事件であった。⁽¹³⁾逮捕した無実の者に、言語に絶する拷問をくわえ、虚偽の自白を強いた特高を捜しだし、かれらに復しゅうすることに執念を燃やしていた被害者がいる。その人は、川田寿の妻（定子夫人）であった。

川田夫人は、後年、「乞食^{こじき}になってもいいから、日本じゅうの家を一軒ずつ尋ねて、松下英太郎と柄沢（六治）の家を見つけて放火して焼き払ってやろうと、そればかり一途^{いちず}に思って獄に坐っていた」と語った。三人の旧特高は、『特別公務員暴行傷害（拷問）』で告発され、松下英太郎元特高係長は懲役一年半、柄沢六治元警部補、森川清造警部補らは、それぞれ懲役一年の実刑をうけ、昭和二十七年（一九五二）収監された。

松下元特高係長は、出獄後、新橋駅の近くで、『牡丹』というとんかつ屋を経営していた。川田夫人は、何度もその店に出かけたが、松下はいつも留守だった。伝言にも手紙や電話にも、なしのつぶてだった。昭和五十三年（一九七八）九月中旬、川田夫人が再び店を訪ねた翌日、おもいがけなく、松下から電話がかかってきた。その声は老人らしい、かすれた弱々しい声であった。松下は電話越しに、語った。

——アメリカの記者にも断わったんですよ。やはりなんども手紙をよこしたり、店まで来たが、わたしは会いませんでした。いまさら真相はわかりません。もう三十五年も前のことで、記憶がありません。わたしも年とって、やっと歩いているようで、みんな忘れてしまいました。なにもお話しすることはありませんから、（会うこと？——引用者）お断りします。

さんざん拷問を加えた当事者が、何十年もまえのことは記憶にありません、と、平気そうをついているわけである。このときから三年半まえの昭和五十年（一九七五）二月——NETテレビ（現・朝日テレビ）は、横浜事件を取りあげ、レポーターの小中陽太郎と横浜事件関係者（青山鉦治・青地晨・高木健次郎）は、松下元特高と会った。

そのときも松下は、「遠い昔のことで、たいていは忘れてしまった」と逃げた。「あれだけの大事件が、一地方のわれわれの力だけで遂行できるはずのものではない。しかし、公務員には、たとえ退職といえども、職務の秘密は守らねばならぬ義務がある」と語った。いわゆる守秘義務である。

横浜事件の関係者・青山鉞治は、この事件を唐沢俊樹警保局長から東条政権につながる、中枢部の政治的陰謀と推理した。川田夫人は、電話を切られないよう用心しながら、横浜事件はでっちあげかどうかたずねると、松下は

——さあ、どうでしょうかね。もう記憶がありません。

と、遁辞たんじを設けるだけであった。

そして、年齢をきくと、

——七十三です。もうだめですよ。

と、弱々しく答えた、という。

——（特高の）仲間はたいてい死んじやいました。生きいる者も、寝たきりです。わたしもうだめですよ。

川田夫人は、松下に服役の体験をきこうとすると、それにはきっぱりとした答がかえってきた。

——刑務所へなんか、一日も行っていない。日本が独立したとき（昭和二十七年〔一九五二〕——引用者）講和特赦になったんです。刑務所へなんかぜんぜん行ってませんですよ。実刑なんかうけていませんですよ。

と、くり返しいって、電話を切った。

特高がその対象とする犯罪者は、思想犯が圧倒的に多かった。国家社会に対して直接の障害となる主張や行動（た）⁽¹⁴⁾（たとえば社会運動）は、当然取締りの対象であり、何事も治安維持法のもとに逮捕できた。

「横浜事件」は、当時の陸軍報道部長・谷萩那華雄大佐が、大日本出版文化協会の機関紙『日本読書新聞』（昭和17・9・14付）で、「あの論文（雑誌『改造』昭和17・7・8月号にのった細川嘉六の「世界史の動向」——引用者）は、赤の宣伝ではないか」といったのが、きっかけとなったようである。⁽¹⁶⁾



佐野学 (37 歳)



鍋山貞親 (33 歳)



台湾でピストル自殺をした
渡辺政之輔 (30 歳)

講和条約が発効したのは、最高裁で元特高の実刑が確定した四日後の昭和二十七年（一九五二）四月二十八日のことであり、晴れて独立を達成した日本は拷問特高を守ったことになる。川田夫人は、最高裁までいった元特高にたいする告訴に、肩すかしをくった思いがたらしい（中村智子『横浜事件の人びと』田畑書店、昭和54・5）。

じぶんの点数をかせぐ目的もあって思想犯逮捕に躍起となっていたのが特高であるが、共産党の巨頭・佐野学の転向は、日本において“転向時代”といったことばを生むほど影響力は大きかった。昭和八年（一九三三）七月の官庁統計は、全国の思想犯についてつぎのように報じているという。

未決囚……………一、三七〇人

転向者……………四一五人

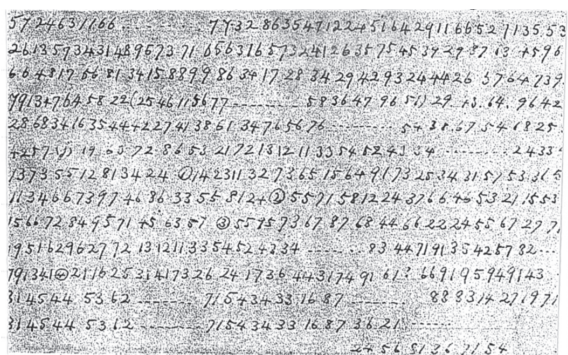
すなわち、未決囚のうち約三分の一が転向したということである。ところで佐野は、三・一五事件の直前に東京を脱出して、地下にもぐったが、いったいどこに雲がくれたのか。その逮捕劇についてのべておこう。

佐野学の逮捕劇。

佐野は昭和三年（一九二八）三月十五日の共産党の大検束（三・一五）がおこなわれる前に東京を脱出し、三月十三日上海にわたった。かれは



佐野学を上海で逮捕した警視庁の特高。
前列むかって左 浦川労働係長



佐野とその仲間が通信に用いた暗号

そこで渡辺政之輔（一八九九〜一九二八、台湾基隆^{キールン}で官憲におそわれ自殺）から、大檢舉のことを耳にはさんだ。同年五月、モスクワに入り、コミンテルンの第六回大会に列席し、党代表の

市川正一（一八九二〜一九四五、大正・昭和期の社会運動家、のち獄死）

山本縣蔵（一八九五〜一九四二、大正・昭和期の労働運動家、のちロシアで獄死）

高橋貞樹^{ただき}（一九〇五〜三五、大正・昭和期の社会運動家、のち党から除名）

などとともに執行委員にあげられ、党再組織の情况報告をおこなった。佐野は三・一五につづく四・一六事件のことも知らず、ましてや市川正一が帰国後、逮捕されたことも知らなかった。

一方、警視庁では、八方手をつくして佐野の行方を捜すのであるが、なかなか手がかり一つつかめなかった。

翌昭和四年（一九二九）のことである。大岡山の市川正一の家を張り込んでいた特高課員は、一通の手紙を手に入れた。それには「上海の共産党大会に日本から代表を送ってくれ」といった主旨が、暗号で綴られていた。

約束の日取りは六月十日である。

警視庁は俄然色めき立った。この機会にぜひ佐野を逮捕したいとおもった。五月二十八日、特高課の

浦川労働係長
藤生巡査部長



三木清

らは、日本共産党員になりすまして、東京より上海へむかった。約束の六月十日に、中国服を着た三人の特高は、北京路大東旅舎のまえで、午後二時から四時まで待ったが佐野は姿をみせなかった。

このときは手紙の行きちがいにより、待合せできなかったのであるが、同月十六日やっと会見することになった。会う場所は、中央旅舎の応接間である。約束の時間は同日の午後三時である。警視庁の特高三名は、約束の目じるしとして右手にタバコ、左手に英字新聞でつつんだ本をかかえてホテルのロビーに入ってきた。

そこへ背広服を着た佐野が、右手にタバコをもち、左手に厚い洋書をかかえてやってきた。佐野は何の警戒心をもってはいなかった。浦川係長は、佐野と会うなり、

「警視庁からきた」

という、かれの顔色はたちまち蒼白になり、一言も口をきかず、呆然として立ちつくしていた。佐野の身柄はすぐ自動車で公安局に送られ、そこで取調べられたのち、八月末に連絡船・長崎丸で日本に護送された（森正蔵著『風雪の碑』。護送中、佐野はいっさい外部の者の目にふれないように厳戒され、本人は手錠をはめられたまま、昼夜をわかつた監視のもとに置かれた（北一夫著『日本共産党始末記』塩川書房、昭和4・11）。三木と戸坂の怪死。

監獄に入っている間に死ぬことを「獄死（牢死）」というが、暗黒時代、囚人の死因に関しては、何かと疑惑が多い。京大哲学科が生んだ最大の俊英といえは三木清（一八九七―一九四五）であるが、かれは警視庁から逃亡した高倉テル（一八九一―一九八六、大正・昭和期の社会運動家、何度が検束ののち、戦後マッカーサーにより追放）を自宅にかくまい、衣服や旅費をあたえ、逃亡をたすけたことにより逮捕された。

昭和二十年（一九四五）九月二十六日――三木は奥多摩刑務所で獄死した。死因は疥癬（かいせん）（ダニによって起こる皮膚病）と栄養失調といわれるが、急性腎臓炎で亡くなったことになっている。同人の通夜の日、生前の知友らのあいだで、その死をめぐっていろいろとりざたされた。

三木の疑惑の獄死とおなじようにその死因が問題とされたのは、戸坂潤（じゅん）（一九〇〇―四五、昭和期の哲学者）である。戸坂は三木の後輩であり、京大哲学科にまなび、おなじように法政大学で教鞭をとったが、ひじょうに尖鋭な学者であった。しかし、惜しいことに昭和九年（一九三四）思

想不穩を理由に法政を解雇された。

戸坂は終戦直前の八月九日——長野刑務所で、急性腎臓炎といった病名で死亡した。戸坂の死亡通知に接した夫人は、遺骸を引きとりにすぐ長野刑務所におもむくと、それはすでに白骨にされていた。手渡されたのは急性腎臓炎と書いてある死亡証明書だけであった。夫人は夫の死顔すら見ることがなかった。戸坂の死は、いろいろ疑念をよび、釈然としないものがあつた。

ファシズム体制と破滅への道。

農村の慢性的な疲弊と困窮が、わが国のファシズム運動を惹起する一因となり、軍閥は満州に侵略の手をのびはじめ、昭和六年（一九三二）九月ついに『満州事変』（関東軍による柳条溝「奉天郊外」の鉄道爆破事件）がおこつた。政府（若槻内閣）は、不拡大方針をとつたが、軍部を抑えることができず、現地の軍部（関東軍）はこれを無視した。

関東軍は、翌七年（一九三二）二月までに満州をほぼ占領し、満州国を建設し、以後、わが国は十五年戦争に突入することになった。日本を戦争へ戦争へとばく進させたき⁽¹⁷⁾っかけとなつたのは、満州事変であり、それが昭和十二年（一九三七）の日華事変（日中戦争）へむかつて拡大し、日本の帝国主義は昭和十六年（一九四一）の大東亜（太平洋）戦争へと突っ込んでいった。

わが国は軍国主義、超国家主義、優越主義に毒され、破滅的な戦争遂行への道へとまっしぐらに突き進んでゆくのだが、昭和六年（一九三二）の満州事変から日本が敗れる昭和二十年（一九四五）までの十年間は、かつてみられないほどの激しい戦争と文化弾圧の期間であり、まさに暗黒時代であつた。

ファシズム体制下のドイツやイタリアの侵略政策にならつて、日本政府も新体制運動を転開し、『大東亜共栄圏』の確立を国策とするにいたり、昭和十五年（一九四〇）各政党は解散し、大政翼賛会がつくられた。昭和十六年（一九四一）十月、近衛内閣のあとを引きついで、強硬意見を主張する陸軍大臣・東条英機が強力な軍事内閣をつくると、外交交渉の舞台うらで、対英米戦争を計画し、指導した。そしてついに十二月八日、英米にたいして宣戦布告の大詔が渙発せられた。戦いはまず日本海軍による真珠湾攻撃によって幕をあけた。

それは日本の実力をも省みずにはじめた古今未どうの大戦争であつた。宣戦布告の大詔が宣布されたのは、明治維新後、これで四回目であつた。⁽¹⁹⁾

- 一 清国にたいする宣戦布告（明治27・8・1）
- 二 ロシアにたいする宣戦布告（明治37・2・10）

三 ドイツにたいする宣戦布告（大正3・8・23）

四 米英にたいする宣戦布告（昭和16・12・8）

十二月八日午後零時二十分に発表になった『帝国政府声明』（宣戦の大詔）の要旨は、つぎのようなものである⁽²⁰⁾

宣戦の大詔（みことのり）を奉戴し、ここに内外に宣明す。東亜の安定を確保し、世界平和に貢献するは、帝国不動の国是である。列国との友誼をあつくし、この国是の完遂をはかるは、帝国の国交の要義である。しかるに中華民国は、わが真意を理解せず、いたずらに外力をたのんでわが帝国に挑戦してきた。

英米両国は、東亜を隷属的地位に置かんとする頑迷なる態度を改めようとはしない。帝国政府は、ハカ月にわたり隠忍自重し、米國とのあいだに外交交渉をつづけ、平和的解決につとめてきたが、東亜の明々白々たる現実をみとめようとはしなかった。東亜の安定と帝国の存立は、危殆（きたい）（あやうい）に瀕したために、米英にたいして宣戦の大詔が渙発せられたのである。

このあと総理大臣・東条より、「大詔を拝し奉りて」といった微衷を表明したものが発表になった。

ただいま宣戦の御詔勅が渙発せられた。わが精鋭なる帝国陸海軍は、いまや決死の戦をおこないつつある。政府は東亜の平和のため、あらゆる努力を傾けてきたが、決裂のやむなきにいたった。アメリカは、英・蘭・中と連合し、中国からの陸海軍の徴兵、南京政府の否認、日独伊三国同盟の破棄を要求し、帝国の一方的譲歩を強要してきた。もしわが帝国が、かれらの強要に屈すれば、わが国の權威は失墜し、支那事變の完遂を期することはできない。建国二千六百年になるわが国は、いまだかつて戦いに敗れたことはない。この史蹟の回顧こそ、いかなる強敵をも粉碎するものと確信したい。われわれは、あくまでさいごの勝利が祖国日本にあることを確信し、いかなる困苦や障害をも克服して進まねばならない。われわれはこの試練を突破してこそ、大東亜建設者としての榮譽を後世になうことができるのである。⁽²¹⁾

対米英宣戦の大詔渙発は、国家主義者・徳富猪一郎からみると、日本精神の一大発現⁽²²⁾であった。大東亜（太平洋）戦争はまた政府の偉いひとか

らみれば、大東亜の新秩序建設の“聖戦ちゅうの聖戦”——神の道を地上に顕揚する（あらわす）ための戦争であった。⁽²³⁾ 戦争の目標は、世界新秩序の一環として世界平和を実現することであり、⁽²⁴⁾ 長期戦をも戦いぬく万全の用意をせねばならぬとし、さらに英米的不正義を打倒し、アジアの十億民族を解放しかつ、人類共存の普遍的秩序を大東亜の天地に建設することであった。⁽²⁵⁾

かくして日本政府および軍部は、彼我の戦力や経済力の差をすっかり忘れてしまい、無謀な戦争へと突入した。日本軍はハワイの奇襲作戦、マレー沖海戦（12・10）に大捷し（圧倒的に勝ち）、翌昭和十七年（一九四二）一月から二月にかけて、マニラやシンガポールを占領したが、六月ミッドウェーの海戦ではじめて敗北し、昭和十八年（一九四三）には、ガダルカナルやアッツ島から撤退し、戦局は徐々に不利に陥った。

昭和十九年（一九四四）七月、サイパン島の日本軍は全滅したのを機に東条内閣は総辞職し、代わって小磯内閣が成立した。が、わが国には退勢をばん回するだけの力はなく、戦局は日ごとに劣勢にむかった。サイパン島の陥落後、同島より米軍機の本土爆撃がはじまり、各都市は空襲をうけた。同年十月、神風特別攻撃隊がはじめて出陣した。

昭和二十年（一九四五）三月、硫黄島の日本軍は全滅し、四月沖縄に米軍が上陸し、やがてそれも失陥し、原爆投下とソ連の参戦により、八月十五日日本政府はポツダム宣言を受諾し降伏した。大東亜戦争において、国民は相つぐ緒戦の勝利に狂喜し、おごりたかぶり、誇大なる戦果を期待するあまり、平和をもとめることをすっかり忘れてしまい、和平運動を開始したころは、もはや手おくれの状態であった。

戦争は兵と戦略物質の消耗戦でもあるが、戦争をつづけるうえで重要戦略物質の調達が緊急に必要であった。

石油（航空機、艦船、戦車、自動車などを動かす燃料）

ボーキサイト（航空機体用軽金属）

鉄鉱石（鉄鋼業の原料）

塩、ゴム、非鉄金属鉱石など。

開戦前、これらは欧米諸国およびその植民地から輸入していたが、第二次世界大戦以降、これらの輸入はきわめて困難になり、太平洋戦争がはじまると、輸入が途絶したために、わが国は南方の占領地や中国からの輸送にたよらねばならなかった。⁽²⁶⁾ が、これらの物質を運ぶ船舶がアメリカ



レオナルド



フィッシャー

の潜水艦に撃沈され、その被害は甚大であった。

防諜とスパイ事件。

大東亜戦争がはじまると、“防諜”がさげばれ、敵の思想諜略にたいする警戒が喚起された。日本人は明治維新以来、外国と外国人を崇拜するあまり、その文物を模倣してきた。とくに外国から新しい思想——自由主義、個人主義、共産主義がわが国に入ってきてからは、それに染まる者がすくなくなっていた。かれらは欧米の模倣思想や事大主義（定見なく、力のつよいものに従うやり方）から離れることができなかった。けれど近來、国体明徴や皇道發揮がさげばれ、日本精神運動が展開されるようになると、この悪弊はしだいに葬られていった。

交戦国のスパイや反体制の人間がねらうのは、国内を攪乱することである。思想諜略としては——

反戦・厭世^{えんせい}気運をつくりだすこと

軍人と民間人を離反させること

怠業・罷業を煽動すること

暴動をおこさせること

などであり、破壊諜略としては——

戦争遂行に障害をあたえるために、軍用施設、軍需工場、倉庫、港湾設備、公共施設、鉄道、通信線、船舶、水道、電力などを破壊したり、放火することである。

戦前の最大のスパイ事件といえば、昭和十六年（一九四二）に発覚した“ゾルゲ事件”（駐日ドイツ大使館顧問リヒャルト・ゾルゲと満鉄囑託・尾崎秀実らが、日本情報をソ連に伝えていた）が筆頭である。が、これ以前にも、いくつかスパイ事件がおこっている。

たとえば、破壊諜略の実例として、日本の某大学の留学生になりすまし、爆破放火や宣伝を画策した重慶政府のスパイ団（「中華抗戦立国団」があるし、白人のばあいは、“フィッシャー事件”と“レオナルド事件”がある）がある。

前者は、昭和十二年（一九三七）から函館の天主教教会につとめるカナダ生れの主任司祭マルトン・フィッシャー（三十九歳、仮名）の事件である。この司祭は、教会附属の「白バラ幼稚園」の園長をもつとめ、親切な神父として評判もよかった。かれは食わせものであり、じつはスパイだった。かれは信者のなかに、これぞと思う若者がいると、小遣いをやり、ごちそうをしてやったり、カメラを買ってあたえたりして、函館要塞（立ち入り禁止）についての情報（要塞の入口の位置、山上の地形、守備の人員、兵舎の構造、兵器の種類、高射砲の有無について）をえようとした。

司祭はこのような方法で十数名の青年を手なずけると、要塞の秘密をさぐりはじめた。またかれは要塞についての情報とはべつに、動員や応召、函館に入港した海軍艦船のうごきをも知ろうとした。

後者は、某国の工業大学出のユダヤ人ヘルパー・レオナルド（仮名）の事件である。かれは昭和十年（一九三五）に来日し、日本の化学・工業についての記事を英米の諸雑誌に送って生計を立てていた。が、昭和十二年（一九三七）支那事変のおこったあたりから、西銀座四丁目のカフェ（「ハッピー・ランド」）の女給・小高秋子（仮名）と同棲をはじめ、表面は親日家をよそおっていた。

レオナルドは、昭和十四年（一九三九）ごろから、某国の諜報員となり、陸海軍の各種飛行機の情報収集を開始した。中島飛行機製作所の関係者にちかざくと、一流のホテルやホテルに招待し、談笑のあいだに日本の飛行機の性能や種類などを聞きだした。²⁷⁾

共産主義運動の波動

マルクス主義の嵐は、大正末期から昭和の初期にかけて大いに吹きまわったのであるが、この「赤い思想」は、金城鉄壁の軍隊のなかにも入ってきた。昭和四、五年ごろ、軍隊内に「日直下士官」を一名増員さすということで、ひじょうに問題になった。日直下士官というのは、いわば軍隊内の見張人である。それを増員することは、軍規や風紀が乱れはじめた徴候であった。結果において、増員は決定された。

「赤い思想」を知って入営した兵のなかには、兵営内で軍国主義や封建的な軍隊教育に失望し、あるいは嫌悪して逃亡したり、ときに上官に反抗する者がけっしてすくなくなかった。また陸軍士官学校の生徒や卒業生の中にも、左翼的な思想を抱いて、「赤い本」をもっていたとか、あるいはマルクス主義を研究するために左翼団体とか共産主義系のひとびととつきあいがあったということで処罰される者がいた。²⁸⁾

また自己の意志により、兵役を拒否したケースもけっして少なくなかった。

大正六年（一九一七）から昭和六年（一九三一）までの『陸軍年報』を調べた菊地邦作の「天皇制下の軍隊における異端」（「みずす」六六号所

収、阿部知二の『良心的兵役拒否の思想』岩波新書に引用されている）によると、

徴兵からの逃亡者、忌避者の数……四万四四五六名（大正五年）

二万三五一三名（昭和六年）

また体を毀損したり疾病を作為したものは、毎年数百名あったという⁽²⁹⁾

昭和期に入ると、日本共産党は弾圧につぐ弾圧をうけたために、表むきは壊滅状態にあった。一般的傾向としては、“グループ組織”が方々にでき、そこで細々と活躍をつづけていた。春日庄次郎（一九〇三〜七六、昭和期の労働運動家）は、昭和三年（一九二八）の三・一五事件で逮捕され、昭和十二年（一九三七）非転向で出獄した。が、かれは関西における党組織をつくるために、“日本共産主義者団”を大阪において結成した。

昭和十二年（一九三七）の秋ごろ——岡部隆二（のちに獄死）と長谷川浩、伊藤律らが、東京において党の再建運動をやっていた。昭和十四年（一九三九）から同十六年（一九四一）にかけて、神山茂夫（一九〇五〜七四、昭和期の社会運動家、新聞配達や職工などをし苦勞したのち、昭和四年（一九二九）日本共産党に入党）は、擬装転向によって、仲間と独自の活動をはじめ、党の再建につとめたが、昭和十六年（一九四一）再逮捕された。やがて太平洋戦争がはじまると、グループ的な動きがほとんどなくなった⁽³⁰⁾

講壇から追放された教授たち。

戦争目的のため、国内体制を統一する必要から、官学・私学の教授にたいする弾圧がおこなわれた。昭和初期から終戦までの間に、じつに多くの“赤色教授”や“自由主義者”たちが、各大学の教壇から追放されたり、獄舎につながれたりした。学園から追放された教授たちの多くは、文部省思想局からおどされ、“病氣”とか“私事”を理由に教壇を去ったひとびとである。追放された大学名と氏名を記すと、つぎのようになる⁽³¹⁾

〔東京帝大〕

大内兵衛（経）

河合栄治郎（経）

大森義太郎（経）

平野義太郎（法）

脇村義太郎（経）

有沢広巳（経）

（以上六名は、検挙された者）

な権力となり、指導中であつたとは思はないが、彼らがつぎくしくテロ政治に立ち去られたために、わが思想界が動搖と混乱の度加へ、遂に有象無象のものは有象無象、全体主義者なるガミラスの申し手としてシヤー

にあらうて消えらう。彼等のSの心を變へ、思ひ正さるゝのである。其は「福音」
圖が、それと政治へ、往年の運用「教育」のこの動向を現してゐる。

輸入をして一切のものが溢々たる盛衰の中、
由主權グループ」の強要を最後にこれら進歩的
時に理想の神道はとり、地へ（國體へ）
へ、乃至は無常へと（無常）解体してつたのである。
である、戦争は終つた、今建設の初期にある
日本は自力で新生しなければならぬ。この時



ろうやま
蠟山政道（政）
山田文雄（経）
土屋喬雄（経）

58 (113)

〔法政大〕

三木清（哲）（検挙） 美濃部亮吉（経）（検挙） 戸坂潤（社）（検挙）
 城戸幡太郎（心理） 南謹二（経） 鈴木俊（文）
 阿部勇（経）（検挙）

〔早稲田大〕

佐野学（政）（検挙） 大山郁夫（政） 猪股津南雄（経）（検挙）

文部当局や各大学の強引な政治的弾圧の犠牲になった教師は、いま掲げた以外にも数多いはずである。学園の“赤狩り”や自由主義者の追放が活発になったのは、昭和三年（一九二八）ごろからである。いま年代記的にながめると――、

昭和三年（一九二八）…………… 東大「大学事件」
 昭和八年（一九三三）…………… 京大「瀧川事件」
 昭和十二年（一九三七）暮…………… 人民戦線「教授グループ事件」
 昭和十三年（一九三八）一月……………
 昭和十三年（一九三八）初頭…………… 東大「河合教授事件」
 昭和十八年（一九四三）六月……………

東大の「大学事件」では、経済学部の大森義太郎（一八九八～一九四〇）が辞職を迫られ、学問研究の自由を主張する声明をあとに辞表を提出し、大学を飛びでた。大森はマルクス主義学者として知られ、早大で軍事教練に反対の演説をしたり、新潟の小作争議を調査し、左翼評論家として匿名で政治評論を発表したりしていた。昭和十二年（一九三七）の人民前線事件に連座し逮捕され、翌年病気のため仮出所したが、昭和十五年（一九四〇）病没した。

人民前線の「教授グループ事件」は、共産党の壊滅後、労農派教授グループ（大内兵衛、有沢広巳、美濃部亮吉ら）ほか十数名が検挙され、以後日本の大学からマルクス経済学は姿をけしたばかりか、全国の書店からマルクス文献は影をひそめた。⁽³²⁾

昭和初期は、軍部と右翼によるファシズム思想と運動がさかんとなり、やがてその嵐は大学のなかにも入って来て、学問や思想の自由が脅かされるのである。が、左翼弾圧の手は官学だけにとどまらず、私学にも伸びてきた。法政大学の哲学科は、昭和八年（一九三三）一月当時、他大学においてみられる講壇的アカデミズムに支配されることなく、少壮新鋭の教授陣によって、現実的、具体的諸問題が批判研究され、新時代の準備をおこたらなかった。⁽³³⁾

哲学とはなにか。それはいまも発せられる問であり、将来においても発せられる問である。法政大学の哲学科は、哲学を正しい位置にすえ、その任務を明らかにし、さらに新しい領域において、哲学の理論的基礎を開拓し、新進気鋭の論客をあつめることに成功した日本屈指の哲学研究室を有していた。講壇に立つ教師は、どれも一流の学者であった。

谷川徹三教授

（一八九五～一九八九、昭和期の哲学者、の……文芸評論家でもあり、美学・近世哲学（ジンメル、ベルグソン、ディルタイ）などち理事をへて法大総長）
を講じた。

田中美智太郎講師

（一九〇二～八五、昭和期の哲学者、のち京……古典哲学のプラトン、アリストテレスの篤学者。

大教授）

三木清教授

（一八九七～一九四五、昭和期の哲学者、の……当時『法政の哲学』の令名を高めた恩人である。三木は豊潤な秀才にめぐまれ、わが国の哲学界を背負って立つ人物であった。研究室以外のひとびとの啓蒙に資するために、毎年、哲学研究会、哲学講演会を開催し、課外研究として「反デューリング論」などを開いた。昭和五年（一九三〇）と同十九年（一九四〇）に治安維持法違反で検挙された。

ち獄死）

戸坂潤教授

（一九〇〇～四五、昭和期の哲学者、のち獄……英知は秋の水のように澄み、堂々たる論陣を張った。自然科学の造詣と唯物弁証法の論理を相もち、世界観としての学問論、文化社会学としてのイデオロギー論は、同人独特の領域であった。昭和六年（一九三一）法政大講師となり、翌年唯物論研

死）

死）



戸坂潤

究会を創設したが、昭和九年（一九三四）思想不穩を理由に法政を追われた。昭和十三年（一九三八）治安維持法違反で逮捕され、同一五年（一九四〇）釈放。昭和十九年（一九四四）ふたたび下獄。敗戦を目前にして、八月九日、長野刑務所で獄死した。

昭和五年（一九三〇）文学部哲学科の有名教授であった三木清は、治安維持法で逮捕され、懲役一年執行猶予二年の判決を受けたが、かれの大学復帰はかなわなかった。しかし、三木は大学を退いても、屋根裏のようなきかない部屋で、有志に非公式に講義をおこなった（谷川徹三編『回想の三木清』昭和23・1）。三木のあと、昭和六年（一九三一）文学部哲学科の講師（翌年教授）として大谷大学から移籍したのが戸坂潤であったが、同人も法政大学を免職になった⁽³⁵⁾。戸坂によると、法政を解雇された理由は、法政騒動と右翼新聞の注文で大学当局がむりにやめさせたからという（戸坂「免職教授列伝」）。

これらの教授追放劇は戦前のものであるが、敗戦後五年たった昭和二十五年（一九五〇）四月、大阪第一師範学校教授兼大阪学芸大学教授・篠勲^{いさお}は、大学における国語学講座の担当をはずされ、むこう一年以内に大学より他へ転出すべきことを口頭で伝えられた。放逐の理由と考えられたのは、半生の心血をそそいだ「古事記偽書論」であった。この事件は、学内に学問研究の真の自由をはばむ旧弊な考えをもつ愚劣なる勢力がはびこっていたことの左証であろう。同書は、早稲田大学中央図書館の「津田左右吉文庫」に架蔵されている。

暗黒政治の巨魁^{きょかい}（首領）・東条首相。

東条英機^{ひでき}（一八八四～一九四八、昭和期の陸軍軍人）は、昭和十六年（一九四一）、第三次近衛内閣のあとを受け継ぎ、首相に就任すると、陸軍大臣と内務大臣を兼ねのち参謀総長も兼任した。かれは対米英開戦の最高責任者となり、独裁体制をつよめ、昭和十七年（一九四二）候補者^{いかに}推薦^{いさひ}制度による翼賛選挙をおこない、戦争体制を一段と強化することにつとめた。

東条は、日本の実力をまったく省みることなく、無謀かつ愚昧^{ぐまい}な対米英戦争（太平洋戦争）を計画し、推進した元凶とされている。かれは憲兵隊を私兵とし、軍閥の首領として地位を不動のものとし、政治・経済・教育・文化の面にまで指導力を発揮した。東条内閣は、太平洋戦争直後に

ひらかれた臨時議会の席上、言語・集会・結社・出版の臨時取締法を提出し、東方会（会長・中野正剛）の代議士の反対にもかかわらず、一夜のうちに通過させた。やがて国家総動員法や新聞紙法によって、議会の代表質問は一人に限定し、演説内容もあらかじめ、秘書官・赤松大佐によって検閲された。

ミッドウェー海戦で、日本海軍は大敗北を喫したが、還送された負傷者は、すべて横須賀海軍病院に拘束され、外部との接触を断たれた。真相を知らせると、国民の士気に影響するとの考えから、敗北は秘匿された。ついでカロリン諸島中部の日本海軍基地トラック島（日本の委任統治領）が多数の米軍機の攻撃をうけ、艦船が壊滅的打撃をうけたときも、国民は何も知らされず、報道は真実を伝えず、ウソの報道にだまされた。

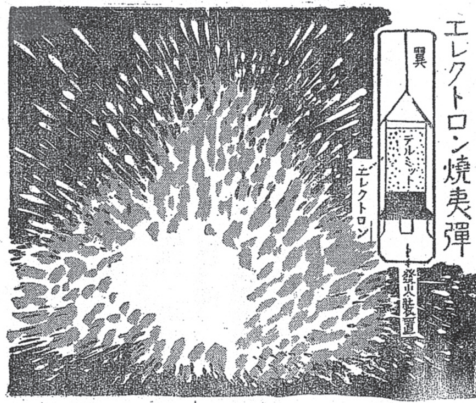
昭和十七年（一九四二）二月、シンガポール陥落直後、イギリス外相のイーデンより、日本から休戦を提議してくれ、といった、和平交渉の話があったが、東条はそれに耳をかさず、インドやオーストラリアへと戦争拡大を企画するのみであった。³⁶昭和十八年（一九四三）晩春から——アッツ島、ガダルカナル、タワラ、マキン、サイパンなどの玉砕と敗戦の悲報があいつぎ、やがて沖繩戦がすんで、本土空襲がはげしくなると、ようやく国民は軍の報道の矛盾にうたがいをもつようになってきた。

米軍機が高度四千メートルから八千メートル位からおとす落弾は、おもに“焼夷弾”（一キロから五〇キロ級のものがあつて、いちばん多く使用されるものは、五キロから十キロ位のもの）と爆弾（二五キロから千キロ級のもののまである）であつた。

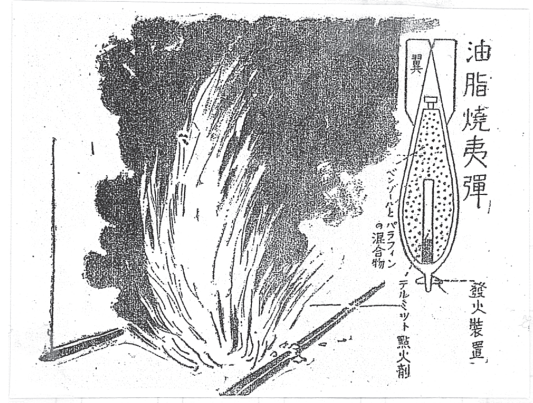
〔焼夷弾〕

- 一 油脂焼夷弾……………固形油またはベンゾールとパラフィンをまぜたものが入っている。落下とともに真赤な炎を出し、火炎をおこす。
- 二 エレクトロン焼夷弾……………弾体をエレクトロン（マグネシウムの合金）でつくり、焼夷剤としてテルミット（磁性酸化鉄とアルミニウムの粉末を混合したもの）が入っている。爆音をあげて発火し、まぶしい白い光、火花を散らしながら燃える。摂氏三千度³⁷ぐらいの高熱をだし、火炎をおこす。

米軍機の無差別爆撃にくわえて機銃掃射をなすがままに許したが、それを迎えるつ日本軍機はほとんど飛びたなかつた。日本のほとんどの都市は、空襲により焼け野原と化した。



エレクトロン焼夷弾の図



油脂焼夷弾の図

この間、日本国民は、老いも若きも総動員体制と言論統制の枠組みのなかで、声を殺し、ひっそりとした不自由なくらしを強いられた。若者は勤労動員に、あるいは徴用工として軍需工場へと駆りだされた。米軍機の「トラ刈り空襲」がはげしくなると、日本人の厭戦気分をあおるように飛行機から宣伝ビラが投下された。

国民の血に染められた軍閥の手を縛れ
とか、

ニッポンが世界を相手にして戦ひ
得ないと云ふ事は 誰でも
知って居る事である。斯様な戦
争に諸君を引込むと云ふ愚を
演じた軍閥は処罰されねばな
らぬ。

といったものまであった。ほかに「自由」を煽動するかのように、絵入りの

欲望の自由 言語の自由
恐怖からの自由 圧制からの自由

といったビラまであった。ビラを拾った者は、役所に届けるよう指令されていたが、大方の国民はそれを無視した。

戦局が悪化の一途をたどるようになると、民衆のあいだから、皇室にたいして敬意を欠いた言動（投書や落書）が現れるようになった。昭和十七年（一九四二）に、月平均数十件、年に三百件ほどだったものが、戦争末期の昭和十九年（一九四四）以降になると、月平均五十件以上、年総件数六百件を超えるまでになった。⁽³⁸⁾

一方、政府や軍は、太平洋戦争がはじまる以前から、また戦時下、日本の国策を反映した「標語」（スローガン）をさかんに発表した。

大陸の春 新東亜の建設……………昭和十四年（一九三九）

日本精神発揚……………昭和十四年（一九三九）

進め！新東亜の建設へ……………昭和十四年（一九三九）

眠る肩鉄 活かせば兵器……………昭和十六年（一九四一）

力強く推進せよ 大政翼賛運動……………昭和十六年（一九四一）

銃後奉公の誓……………昭和十六年（一九四一）

皇室のもと、一億一家、心と心……………昭和十六年（一九四一）

力と力をひとつにして、銃後を守りかためます。

国民皆労

国民全部が一人の無業者もなく 国家の必要とする……………昭和十六年（一九四一）

職場につき 全能力を挙げることが

国家総力発揮に絶対必要である。

大東亜戦下の紀元節

思へ、建国の大偉業

八紘一字の大精神は

天日と共に明らかである。

我々はこの大精神の自覚に徹し……………昭和十七年（一九四二）

凡ゆる艱難を克服し
大東亜戦争の完遂に
渾身の努力を傾けよう。

正に撃滅の秋^{とゞ}

—— 挙力あげて沖繩決戦へ(39) 昭和19(一九四四) ~ 同20年(一九四五)

戦時下、一般国民は、米軍機が空からばらまいてゆくビラや政府が発表する標語のなかに、日本の劣勢や旗色のわるさを感じとり、敗戦を予想した。

検閲と伏字^{ふせじ}。

日華事変から太平洋戦争へ突入する時期にかけて、戦時政府はますます言論政策を強化していった。そして治安維持法や言論二法にくわえて、

言論集会結社等臨時取締法

戦時特別法 軍機保護法

国防保安法 軍用資源秘密保護法

などの法律をつくり、国民をがんじがらめしめつけた。

従来、刊行物は「事後検閲」であったが、太平洋戦争がはじまる直前——昭和十六年(一九四一)九月から「事前検閲」に切り替えられた。検閲をおこなっていたのは、内務省警保局の図書検閲課であったが、じっさい主導権をもっていたのは軍報道部をはじめ、憲兵隊本部であった。

主要雑誌は、校了まえに「目次」の提出を命ぜられ、^{テーマ}題目や執筆者の変更から、上からのいわゆる官製原稿や天くだり^{テーマ}の掲載など要請された。版元の編集権への介入も公然とおこなわれた。⁽⁴⁰⁾

“伏字”は、印刷物において明記することを避けるため、その箇所を“×○”などの印で表すことを指すのだが、ふつう社会問題、左翼思想、官能描写などの箇所は、よく伏字の厄をうけた。そのため読者は類推して読まざるをえなかった。

当局が問題あり、と判断したとき、納本から二、三日後、発行人また編集責任者が喚びだされる。軽いときは、“厳重注意”、すこし重くて“一部削除”、もっと重いときは発売禁止処分をうける。削除命令をうけるのは、社会科学書にかぎらず、文芸書や辞典にまでおよんだ。

筆禍事件は、枚挙にいとまないが、満州事変がおこる昭和六年（一九三一）から、日中戦争がおこる昭和十二年（一九三七）までの間に、当局の忌いにふれたケースを『中央公論』を例にとると、かなりあることがわかる。

片山潜「日本階級運動の批判的総観」〔『中央公論』昭和6・4〕

河上肇「国家社会主義の理論的検討」〔『中央公論』昭和7・6〕

野呂栄太郎「恐慌の新局面と展望」〔『中央公論』昭和7・6〕

岩淵辰雄「陸軍の分派と動向」〔『中央公論』昭和10・8〕

矢内原忠雄「国家の理想」〔『中央公論』昭和12・7〕

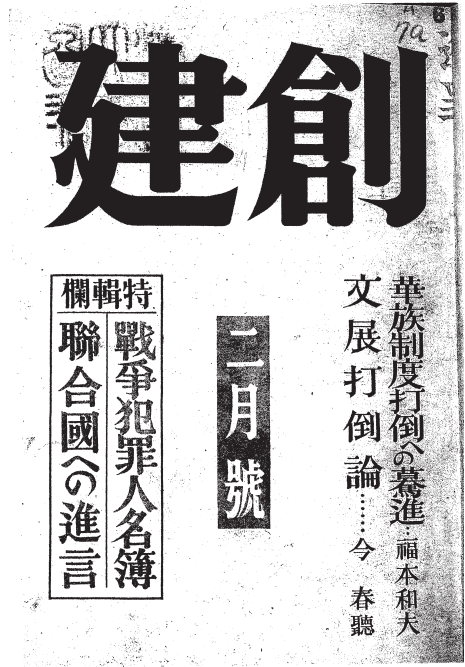
石川達三「生きてゐる兵隊」〔『中央公論』昭和13・3〕

片山論文をのせたことで問題化し、発行名義人・編集者・印刷人は司法処分をうけた。

河上の論文はかなりの部分が、野呂のものはほとんど全文が削除命令をうけた。岩淵のものは一部削除、矢内原と石川のものは全文削除（発禁）の処分をうけた。⁽⁴¹⁾

戦争中、極端な軍国主義的出版物を刊行することによって、日本国民を誤導したり、あるいは軍閥と結託して、さかんに戦争熱をあおった主要出版社を“戦争犯罪人”として糾弾したのは、雑誌『創建』（昭和21・2）であった。

昭和二十一年（一九四六）一月九日——連合軍司令部は、日本人記者団との会見の席上、ちかく出版界にも、軍国主義的、超国家主義的分子を駆逐する措置が講ぜられると発表した。そこで雑誌『創建』は、さっそく“日本人民大衆の立場からみた戦争犯罪人”を告発し、粛清しようとし



雑誌『建創』（昭和21・2号）

た。戦争中、情報局（内閣情報局）の略称。政府の情報活動、宣伝および新聞・雑誌・書籍にたいする統制をおこなった）の出張所であった「日本出版会」は、終戦後解散し、その後、既成出版業者を母胎とする「大日本出版協会」が創設された。

“出版界方面”の戦争犯罪人を摘発したのは、斎藤竹史（不詳）である。斎藤が戦犯ときめつけた出版社は、『大日本雄弁会講談社』（現・講談社）と『旺文社』である。野間清治（一八七八～一九三八、大正・昭和期の実業家、講談社の創設者）亡きあとの講談社の企画から運営をすべて牛耳ったのは、橋本総務局長だという。かれは大日本出版報国団副団長としてファシヨ的存在として、当時の日本出版会会長・久富達夫（一八九八～一九六八、昭和期のジャーナリスト、翼賛会宣伝部長、出版報告団長、情報局次長、敗戦後、公職追放）とともに軍閥の手先として暗躍した。

九六八、昭和期のジャーナリスト、翼賛会宣伝部長、出版報告団長、情報局次長、敗戦後、公職追放）とともに軍閥の手先として暗躍した。講談社は雑誌『キング』『富士』『講壇倶楽部』によって僻村の青年男女を毒し、昭和十九年（一九四四）には陸海軍報道部と結託して、新たに『海軍』『若桜』の二誌を創刊し、わが国の青少年に軍国主義思想を鼓吹し、戦争熱をあおった。

旺文社の元の社名は、「欧文社」といった。同社を創設したのは赤尾好夫（一九〇七～八五、昭和期の出版人）である。赤尾は忠実なるファシズムの信奉者であり、“日本出版界のムッソリーニ”と評された。かれは大日本出版報国団成立と同時に、講談社の橋本とともに副団長として活躍した。

旺文社は、軍国主義的図書の刊行（橋本欣五郎著『青年に翹ふ』、奥村喜和男著『尊王攘夷の血戦』）などを刊行したほか、青年むきに雑誌『新若人』『建設青年』『蛍雪時代』『新武道』を出版して、軍閥にたいする阿諛的記事を満載したという。斎藤によると、その他ファシズム宣伝に躍起となったのは、つぎの出版社である。

平凡社………下中弥三郎（一八七八～一九六一、出版事業家）は、教諭をへて大正三年（一九一四）平凡社を創設。大政翼賛会発会に協力。敗戦後、

戦犯として公職追放。

第一公論社……満鉄總裁・松岡洋右から資金をえて、かみむらつや上村哲彌が創設した出版社。

山海堂……陸軍報道部とむすんで『機械化学』を発刊した。

光文社……講談社がその看板を塗りかえて新しく雑誌『光』をもって出発した出版社。

文藝春秋社……菊池寛を主宰者とする出版社。

落日の大日本帝国。

昭和十八年（一九四三）、戦局は一段と不利に陥り、戦いのなりゆきにも不安が感じられるようになっていた。東条首相は、大東亜戦争の完遂と大東亜の新秩序建設の方針について、大東亜各国（中华民国、満州、タイ、フィリピン、ビルマ、自由インド）の代表と協議するために、“大東亜会議”なるものを同年十一月五日と六日の両日、帝国議事堂において開催した。⁽⁴²⁾

各国の代表より熱烈な発言があり、その結果「大東亜共同宣言」（前文と五つの原則から成る）が表明された。その要旨をやさしく述べると――、

- 一 大東亜各国は、協力して大東亜の安定を確保して、道義にもとずく共存共栄の秩序を建設する。
- 一 大東亜各国は、自主独立を尊重し、互助親和を確立する。
- 一 大東亜各国は、相互にその伝統を尊重し、各民族の創造性を伸暢し、大東亜の文化を昂揚する。
- 一 大東亜各国は、緊密に提携し、その経済発展をはかり、大東亜の繁栄を増進する。
- 一 大東亜各国は、多くの国々と交誼を篤くし、人種的差別をなくし、文化交流をさかんにし、進んで資源を開放し、世界の進運に貢献する。

この五原則は、内外に宣布したものであり、美辞を連ねているが、そのもっとも大事な意味は、大東亜戦争に勝ち抜くことであった。

この宣言文は約言すると、“独立親和の原則”とでもいえそうであるが、会議終了の翌十一月七日――日比谷公会堂において「大東亜結集国民大会」がひらかれ、東条首相によって敷衍せられ、世界にむけて呼びかけられた。このときが、東条政治の絶頂であった。なぜなら、翌年かれは

失脚し、首相の座をおりるからである。

終戦詔書の起草者はだれか。

太平洋戦争は、天皇の名ではじめられ、天皇の名でおわった。天皇制が存在したから、戦争がはじまり、戦争にまけた。⁽⁴³⁾ 開戦の詔勅も終戦の詔勅も、天皇みずからがすべて起草したものではない。昭和二十年（一九四五）八月十日の深夜の御前会議のときの天皇のことをもって詔勅の原案がつくれられ、迫水久常^{ひさつね}（一九〇二〜七七、昭和期の大蔵官僚、鈴木貫太郎内閣の書記官長）が、信用できる四人に手伝ってもらって八月十日から三晩——ほとんど徹夜で書きあげ、それを大東亜省顧問で右翼思想家・安岡正篤^{まさひろ}と内閣嘱託・川田瑞穂^{みずほ}に首相官邸に来てもらい、草稿をみてもらい加筆訂正してなったものが、終戦の詔勅であるようだ。

したがって安岡と川田は、詔勅の起草者ではなく、関与者ということになる（茶園義男著『密室の終戦詔勅』雄松堂出版、昭和64・1）。敗戦の原因はなにか。

敗戦後、極東国際軍事裁判で、検事側証人として数々の暴露的証言をおこなったことで名をなした元陸軍省兵務局長の田中隆吉（一八九三〜一九七三）は、自著『軍閥』（山水社、昭和21・1）のなかで、日本を滅亡の一手手前まで追い込んだものは、日本自身である、とのべている。それは米英でも、支那でもソ連でもない、といっている。

また敗戦の年の八月二十二日、東京から山中湖畔にもどった元陸軍大将の宇垣一成^{うがきかずしげ}（一八六八〜一九五六、敗戦後、公職追放）は、田中隆吉にひとこと「万事でおくれ、身から出たさび」といって、大きなため息をついたという。

こんどの戦争の直接の原因は、国家の指導者をもって任じる官僚や軍人の無知と暴挙であり、その結果が数百万の戦死者を生み、日本国民ならびに近隣の国々のひとびとに多大の惨害をあたえ、あげくの果てに他国の軍隊によって占領されるといった憂き目をみた。

ところでどうして日本は敗けたのであろうか。

敗因はいろいろある。第一に、日本は同盟国ドイツの勝利を前提とし、勝利の予想のもとに主要な作戦を立てたが、スターリングラードの敗退は、いわば日本にとってのミッドウェー海戦の敗北でもあり、日独はともに敗戦への道を進んだ。第二に、日本は開戦当初、陸海軍のすべての分野において、量において連合国をうまわる軍備施設をもっていたが、その後形勢は逆転した。米軍機による本土空襲がはげしさを増すにつれて、生産は停滞と破壊にさらされた。

第三に、新鋭武器がものをいう近代戦において、連合国は急速に進歩をとげているのに、日本軍の装備、武器は、量と質において、連合国のものよりも劣ってきた。連合国側には、――

高度な電波探知器、B 17またはB 24、B 29型爆撃機

地上攻撃用ロケット砲、爆弾投下用照準器

測距儀、空中魚雷、携帯用ロケット、火焰放射器、原子爆弾⁽⁴⁴⁾

などがあったが、日本にはこれらを生産する力がなかった。つまり劣悪な武器と装備、乏しい工業力が敗北の主因と考えられる。

天皇制と民主主義。

戦後まず変わったことはなにか。

何んといっても国家権力による抑圧が、敗戦とともに取りのぞかれ、学問や思想の自由が回復せられたことである。⁽⁴⁵⁾日本の敗戦につづいて、占領軍（進駐軍）による本土占領がはじまり、日本人は有史以来、はじめて外国人の支配下におかれた。占領とともに連合軍は、軍国日本の解体に手をつけた。

昭和二十年（一九四五）十月四日――連合国最高司令部情報教育局は、この日の午後六時、日本政府にたいして――

- | | | | | | | | |
|------------|-----------|---|----------------------------|---|-----------------|------|-------|
| 一 | 政治犯人の即時釈放 | 二 | 思想警察その他いっさいの類似機関の廃止 | 三 | 内務大臣および警察関係の首脳部 | 日本全国 | の思想警察 |
| 弾圧に係る官吏の罷免 | | 四 | 市民の自由を弾圧するいっさいの法規の廃止ないしは停止 | | | | |

を要求した。これをうけて政府は当夜ただちに協議をこらした。

連合軍最高司令官の通牒が出される前日（10・3）、ロイター通信の東京特派員ロバート・リュベンは、東久邇内閣の内相・山崎巖^{いわ}（二八九四―一九六八、内務官僚、警保局長、警視總監などを歴任、のち公職追放）と会見し、その内容を『星条旗』紙^{スター・アズ・ストライプス}（駐留軍むきの英字新聞）に発表し

た。その内容たるや、治安維持法に我執^{がしゅう}していることが歴然として明白であり、古い考えをがんこに守っていることがわかる。

山崎が記者に言明したのは、つぎの点である。

思想取締の秘密警察は、いまなお活動をつづけている。反皇室的な宣伝をおこなう共産主義者は、容赦なく逮捕する。また政府転覆をたくらむ者の逮捕もつづける。天皇制廃止を主張するものは、すべて共産主義者とかんがえ、治安維持法によって逮捕する。わたしは共産党員以外の者を絶対に逮捕した憶えはない（『朝日新聞』昭和20・10・5付）。

また同日（10・3）、中華民国の記者が法相・岩田宙造^{ちゅうぞう}（一八七五～一九六六、東京日々新聞の記者から弁護士となる。日銀、宮内省の顧問弁護士をへて東久邇内閣の司法相、のち公職追放）を訪ね、つぎのような一問一答をおこなった。

問 終戦後における新事態に即応するため、共産党員をはじめ、多くの政治犯を即時釈放すべしとの意見があるが、当局の方針はどうか。

答 司法当局としては、現在のところ政治犯人の釈放のごときは考慮していない。かかる犯罪人を刑期より前に釈放することは裁判を無効にすることであり、われわれにはかかる権限は与えられていない。かかる権限は、天皇の大権に属し、唯一の具体的方法は、陛下の御発意による恩赦以外にない。

問 政治犯人のうちには、すでに刑期をおえたにもかかわらず、拘置所に収容されている予防刑^{不明}□□が多いが、かれらの釈放は、司法大臣の権限にあるとおもうがいかに。

答 大臣の権限をもって釈放できる。しかし、現在の事態のもとでは、かれらを依然拘置所に留^とめておく必要ありと考え、したがってこれまた釈放のごときは考えていない。

問 治安維持法即時撤廃論^{ていぱい}にたいする所見は。

答 撤廃は考慮していないが、修正を加える必要はありと考え、すでに具体的に考慮している。しかし、法律の改廃は議会の権限に属するが、ただ緊急勅令という方法もある。

問 共産主義運動は公認するか。

答 共産主義運動は、部分的にこれを認める方針である。しかし、国体の^{不明}□□、不敬罪を構成するとき運動は^{不明}□□に取締る。

問 日本の国体と共産主義とは相容れないものであり、共産主義運動の部分的承認というようなことはありえないとおもうが。

答 日本の国体を維持しつつ、共産主義の主張の一部を^{不偏}□□現させることは可能と考える。国体変革問題以外、たとえば私有財産制度の^{不偏}□□正等に関する

る運動は、これを認めてもさしつかえないとおもう。(後略)

(『朝日新聞』昭和20・10・5付)

このように内務、司法官僚は、国体護持、治安確保、民生安定を配慮し、急激な変革や共産主義運動の勃興を危惧するあまり、思想犯の釈放にはひじょうに慎重になっている。しかしながら、司法省は昭和二十年十月十日までに、連合国最高司令官の通牒にもとづき、現在受刑ちゅうの者の裁判ちゅうの者、捜査ちゅうの者のすべてにわたって釈放の手続をとり、全国の政治犯、思想犯の釈放を完了した。その数は、約三千名。

十月十日午前十時——雨のふるなか、社会運動家の徳田球一(あだ名は「徳球」、大正十一年(一九二二)モスクワで開催されたコミンテルンの極東民族大会で、ロシアの婦人闘士たちから「愛すべき日本人」⁽⁴⁶⁾と呼ばれた)と、志賀義雄⁽⁴⁶⁾(一九〇一〜八九、一高をへて東京帝大の文学部社会学科にまなぶ。三・一五事件で検挙される)ら同志は、たがいに腕をくんで、十八年ふりで(豊多摩)刑務所のそとに出た。鉄の大扉のまえには、仲間が「赤旗」をふりながら待っていた⁽⁴⁷⁾。

徳田の体内には、被圧迫民族の反逆の血がながれており、上京して荷車をひきながら、日本大学の夜学に通って法律を勉強し、苦節十年、ついに弁護士試験に及第した。かれが社会運動に第一歩をふみだしたのは、弁護士・山崎今朝弥⁽⁴⁸⁾(一八七七〜一九五四、明治法律学校卒。日本社会主義同盟を結成。戦後、三鷹・松川事件の弁護人となる)の事務所で修業していたときであり、のちに戦闘的マルクス主義者になってゆく。

徳田と志賀は、十八年ものあいだ獄中にあっても、操志を固く守り通した点が共通するところである。志賀はおもった。

——われわれは、くされはて、すさみきったいまの社会を建て直し、矛盾のない、正しい、ゆたかな社会をつくりあげなければならない。そうすることによって、監獄も、やがて正しい、ゆたかな監獄にうまれかわるだろう。われわれの闘いは、そのためのものであり、そして、かならずそれをなし遂げることができる(徳田・志賀著『獄中十八年』時事通信社、昭和22・2、一〇四頁)。

徳田と志賀両人は、出獄と同時に党の再建に参画し、昭和二十一年(一九四六)に衆院議員に初当選した。やがて徳田は日本共産党の立役者、最高指導者として活躍するのだが、共産党代議士となってから、大胆にも柄沢とし子・志賀義雄・野坂参三・高倉テルらと皇居に押しかけ、天

った、とウェップ裁判長はいいたかったのであろう。

それ由に天皇は有罪であると考えた。フランスのベルナル判事は、太平洋戦争の宣戦は天皇がおこない平和を犯した、といい、オランダのロリーング判事は、天皇は戦争を阻止できる立場にありながら、それを防止しなかったとし、フランス同様天皇が訴追を免れているのは重大な誤りであると主張した（田中隆吉「鬼検事キーナン氏」『文藝春秋』所収、昭和40・10）。

敗戦後、連合国軍総司令部の命令のもとに、わが国の「民主主義革命」は天皇制政府によって進められ、こんにちにいたった。が、民主主義は圧迫者、圧政者にとって、つねに危険思想であり、被圧迫者にとってそれは、つねに清新の気、元気をあたえてくれるものなのである。

注

- (1) 猪股猛著『社会主義夜話』（労務行政研究所、昭和二十三年十一月）、一三頁。
- (2) 石川旭山編 幸徳秋水補『日本社会主義史』（『明治文化全集 第二十一巻』所収、日本評論社、昭和四年二月）、三三五頁。
- (3) 『日本政治裁判史録 昭和・前』（第一法規、四十五年三月）、一三六頁。
- (4) 青木貞雄著『特高教程』（新光閣、昭和十二年八月）、一頁。
- (5) 同右、三頁。
- (6) 市川義雄編『農働者農民の代議士 山本宣治は議会で如何に斗ったか』（三一書店、昭和二十四年一月）、一一〇頁。
- (7) 「特高警察黒書」編集委員会編『特高警察黒書』（新日本出版社、昭和五十二年六月）、一〇九頁。
- (8) 大山郁夫「赤旗につ、まれた戦士の遺骸——同志山本宣治の死を凝視して」（『山本宣治全集 第五巻』所収、汐文社、昭和五十四年六月）、三頁。
- (9) 注（7）の一〇頁。
- (10) 同右。
- (11) 双川喜文著『拷問』（日本評論社、三十二年二月）、九五頁。
- (12) 注（7）の二二頁。
- (13) 『十五年戦争下最大の言論・思想弾圧事件 横浜事件 三つの裁判』（高文研、平成七年一月）、一三頁。
- (14) 注（7）の二二頁。

- (15) 緋田工著『全訂 特高必携』（新光閣、昭和七年二月）、三頁。
- (16) 森正蔵著『昭和受難者列伝 風雪の碑』（鱗書房、昭和二十一年六月）、二四四頁。
- (17) 中所豊著『日本軍閥秘史 裁かれる日まで』（中華国際新聞社、中華民國三十七年二月）、一頁。
- (18) 「戦時下の日本」 文化弾圧・抗争の歴史」（『人民評論』第四卷第三号所収、伊藤書店、昭和二十三年三月）、三頁。
- (19) 山本哉著『米国及英国 二対スル 宣戦ノ詔書謹解』（非売品）（国学院大学院友会、昭和十七年二月）、五頁。
- (20) 世界情報社編『大東亜戦と国内態勢』（世界情報社出版部、昭和十七年六月）、一四〇一六頁。
- (21) 同右、一七〇一九頁。
- (22) 徳富猪一郎著『宣戦の大詔』（東京日々新聞社、昭和十七年三月）、一頁。
- (23) 白鳥敏夫「世界進運貢獻の原則」（大日本言論報国会編『大東亜共同宣言』所収、同盟通信社、昭和十九年四月）、二二七頁。
- (24) 安藤紀三郎「国民に望む」（『日本評論 大東亜戦争号』所収、昭和十七年二月）
- (25) 中村弥三次「戦争の目標、こゝに在り」（『日本評論 大東亜戦争号』所収、昭和十七年二月）
- (26) 『日本終戦史 上巻』（読売新聞社、昭和三十七年八月）、一三六〇一三七頁。
- (27) 情報局編輯『週報 防諜特輯』内閣印刷局、昭和十七年七月
- (28) 注（17）の一〇〇一一頁。
- (29) 阿部知二著『良心的兵役拒否の思想』（岩波書店、昭和四十四年七月）、一四三頁。
- (30) 座談会「戦時下の日本」 文化弾圧・抗争の歴史」（『人民評論』第四卷第三号所収、昭和二十三年三月）、一一頁。
- (31) 「講壇を追はれた教授連」（『朝日新聞』昭和20・10・20付記事）
- (32) 同右。
- (33) 『法政大学新聞』（第三〇号、昭和8・1・16付記事）
- (34) 同右。
- (35) 『法政大学八十年史』（法政大学、昭和三十六年八月）、七一〇七二頁。
- (36) 森正蔵著『解禁昭和裏面史 施風二十年 下巻』（鱗書房、昭和二十一年二月）、二二六頁。
- (37) 防衛総司令部参謀・陸軍中佐難波三十四著『現時局下の防空』（大日本雄弁会講談社、昭和十六年十月）、三三〇四〇頁。
- (38) 注（26）の一九六〇一九七頁。

- (39) 『戦時下標語集』（大空社、平成十七年五月）を参照。
- (40) 畑中繁雄著『覚書 昭和出版弾圧小史』（図書新聞社、昭和四十年八月）三六〇三八頁。
- (41) 同右、一七七頁。
- (42) 大日本言論報国会篇『大東亜共同宣言』（同盟通信社、昭和十九年四月）、七八頁。
- (43) 高倉テル「天皇制ならびに皇室の問題」（『中央公論』所収、昭和二十一年八月）
- (44) 連合国最高司令部民間情報教育局編『真相箱』（コスモ出版社、昭和二十一年八月）、七四頁。
- (45) 津田左右吉「我が国の思想界の現状に就て」（『ニホン人の思想的態度』所収、中央公論社、昭和二十三年十月）、四八頁。
- (46) 注（1）の一六六頁。
- (47) 徳田球一・志賀義雄著『獄中十八年』（時事通信社、昭和二十二年二月）、一六六頁。
- (48) 小林亦治筆（『社会断層』所収、山新出版社、昭和二十二年十月）、三〇頁。
- (49) 徳田球一「天皇制の下に民主主義・社会主義の建設が出来るか」（『社会評論』第三卷第一号所収、ナウカ社、昭和二十二年二月）
- (50) 注（43）におなじ。